



書き下ろし文芸マガジン

# NONSTOP

vol.4 分岐

☆「クローパー」

入江稔

☆「響け、私たちの歌声」

広野未沙

☆「Dear My Life」

貴水玲

☆「平行線シンドローム」

水島朱音

☆「やろうぜ！」

土本強

☆「あたりまえのこと。」

水面浮月

☆「From・N」

番棚葵

☆「ターニング・ポイント」

諸星崇

企画・監修 榎本秋

株式会社榎本事務所

書き下ろし&読みきり文芸マガジン「NONSTOP」の第四号をここにお届けする。

本マガジンは二つの全体的なテーマを設定している。ひとつは、北陸地方の海沿いをイメージした架空の地方都市「N市」を共通の舞台としたシェアードワールドノベルズであること。そしてもうひとつは、「青春」をテーマとすることだ。

これに加えて、毎号の統一テーマも設定した。こちらも普段は表と裏の二つがあるのだが、今回は番外編的に両者を統合し、「夏休み」とした。青春時代ならではの各種イベントと密接に絡むキーワードかと思う。

このような事情から、先行する弊社発行の電子マガジン「signal」掲載の諸作品と比べ、本マガジンに掲載している作品は続き物としての性質が強めになっている。それでもなるべくどこから読んでも楽しめるようにはなっているが、できれば第一号より順繰りに追いかけていきたい。損はさせない出来のつもりである。

本マガジンには、私、榎本秋と関係ある作家および作家の卵たち、計八名（うち一名は今急病により休載）が参加している。さらに、普段から榎本事務所制作の本でお世話になっているアミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科の全面協力を得て、毎月イラストコンペを開催していただき、その上位作品を表紙あるいは口絵として収録するという試みもさせていただいている。カバーイラストについては、これとは別に創刊時にコンペを行って選ばせていただいた。

本誌をひとつの踏み切り板としてに各参加作家、イラストレーターが新たな展開を手にすることを願ってやまない。それでは、楽しんでいただけると幸いです。感想やご意見など、コメント機能などご利用の上でいただけると大変うれしい。

榎本秋

# 目次

はじめに	2
目次	3
口絵	4
イラスト	
新月竜	
まつきなほ	
伊藤由希	
戊祐秋	
(掲載順)	
舞台設定	6
へタイトルクリックで該当のページに飛びます	
クローバー	
イラスト	
入江棗	9
伊藤由希	
Dear My Life	
イラスト	
貴水玲	45
ヒトエ	
やろうぜ!	
イラスト	
U35	
士本強	79
From・N	
イラスト	
伊藤由希	105
番棚葵	
響け、私たちの歌声	
イラスト	
うらら	
広野未沙	139
平行線シンдрーム	
イラスト	
水島朱音	171
正午あきら	
あたりまえのこと。	
イラスト	
新月竜	
水面浮月	203
(※作者急病のため休載。イラストのみ掲載させて頂きます)	
ターニング・ポイント	
イラスト	
橘ぼん	
諸星崇	205
鑑賞	
柚木ゆな	232









**舞台：N市**

☆海に面した盆地上の小都市

○海 -> 山でいきなり切り立っており、海に面していない周りは山で囲まれてる

☆高速道路開通の賛成・反対でもめている

○大きな都市（県庁所在地）と都市を繋げるための道路で、市の活性化を見込んでいる

☆市内に男子校（昇星学院）、女子校（優華女学院）、共学がそれぞれ存在する

☆駅前に大きめのショッピングモールができたばかり

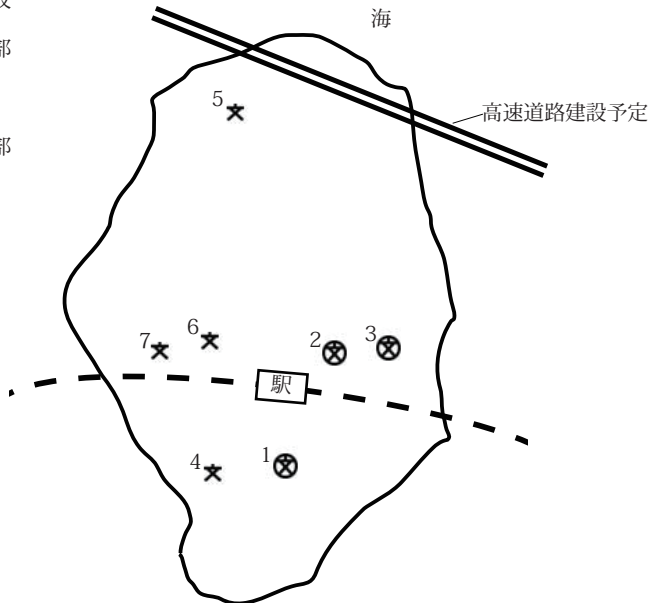
☆地主＝旧家がある

○「塚本家」という地主が存在する

○本家・分家があり市内に家が散らばっている

○高速道路問題では一族で揉めている

- 1 → 市立中央高等学校
- 2 → 昇星学院高等部
- 3 → 優華女学院高等部
- 4 → 市立第一中学校
- 5 → 市立第二中学校
- 6 → 昇星学院中等部
- 7 → 優華女学院中等部







# クローバー

入江棗

Illustration: 伊藤由希

あらすじ

佐々口孝士



中学三年生。千伽の幼馴染。千伽のことをよく気にかける。

高橋千伽



中学三年生。本屋の娘。本が好きで大人しい性格。

塚本楓



中学三年生。地主の分家の次男。一匹狼で少しわがまま。

第四話 秋雨とはじまり

体育祭が終わると同時に一年の半分も終わる十月の始め、生徒会と委員会はこの時期に交代を迎える。

ついこの間生徒会総選挙があつて新しい生徒会長が決まった。明後日は一、二年がホームルームで委員を決める。三年生は本格的に受験準備に入るので、この手の縛りから解放されることになる。

つまり、塚本くんとこの図書委員も今日の当番でおしまい。

「雨かよ、チャリで来てんのに最悪」

窓の外は小雨がぱらついていた。午後からぐずりだしていた天気がついさつき雨を降らせたようだ。

「これくらいの雨だったら道路もそんなぬかるんでないだろうし、傘差しながら帰っても大丈夫だと思うよ」

「お前、俺が傘指し運転できると思ってるのか」

そうだった。つい数ヶ月前に生まれて初めて自転車に乗り、そこそこ乗れるようになる

まで結構な時間を要したんだった。

この辺りは安定していかない道が多いし、片手で運転するのはまだ難しいのかもしれない。

「しゃあねえな、歩きで帰るか」

「車呼ばないの？ 暗くなるの早くなってるし」

「たかだか登下校で連絡すんのだりいよ」

四月は車を呼んでいたのに。あの時はものすごい雨脚だったけど。

窓から離れた塚本くんはカウンターの席に座って本を読み始めた。今日は持参。この間うちで買った海外小説だ。一昨日買ったばかりなのにもう後半部分のところにしおりが挟まれている。

「これ面白いな。さすがに原文で読む気力はねえけど」

「この人は原文も結構読みやすいよ。すいすい読めちゃう」

先日、塚本くんに面白い本あったら教えろと言われ、お気に入りの作家の翻訳版を何冊か薦めてみた。

気にいってくれたみたいでよかった。それに好きな作家の話ができるのは嬉しい。孝士や今まで話をしていた女の子達は海外小説なんて読まなかったから。

「犯人は大体予想つくんだけどトリックが分かんねえ。お前分かった？」

「私は犯人すら最後まで分からなかったよ……」

推理小説を読む人にはいくつかパターンがあるって聞いたことがある。推理しながら読むタイプ、推理しないで読むタイプ、あとにかあった気がするけど思い出せない。

塚本くんは推理しながら読むタイプで、私は推理してみても全然分からないタイプ。頭の構造の差がここでも明るみになるなんて。

塚本くんが読んでいるところまでの内容の話をしている内に当番終了の時間になっていった。生徒は誰も訪ねてくることなく、図書委員の役目はあっけなく終わってしまう。

「委員つつつても全然働いた気がしなかったな」

「ここで本読むかおしゃべりするかだったしね」

校舎のほずれにあるここは吹奏楽部が奏でる音色や運動部の掛け声が聞こえてくることは殆どなくて、ここだけ空間が切り取られたように静かな場所だった。

孝士と塚本くんの三人でお昼ご飯を食べたり、他愛のない話をしたりとすぐ居心地がよくて、学校で一番好きな場所。

「今度からどこで息抜きすっかなあ」

椅子から立ち上がった塚本くんは腕を上げて背伸びをしながら呟いた。

塚本くんはお家を嫌う。夏休みも私達と東京へ行ったり遊んだ日以外は一日中図書館に籠って時間を潰していたらしい。

はつきりと聞いたことはないけれど、これは嫌いといっていると思う。

「げ、雨強くなってるぞ」

塚本くんの声に反応して窓の外を見ると、確かに小雨から本降りになっていた。

「これは自転車押して帰らないとだなあ……」

「お前も歩きなら車呼ぶぞ?」

「え、いいよ悪いし」

「気にすんな」

「だって、お家嫌いなんでしょう？」

つい口に出てしまった。すぐに後悔する。

塚本くんは iPhone を取り出したままの格好でこちらを凝視した。

「今まで地味に気にしてたのってそれ？」

「き、気にしてなんか」

「嘘つけ。俺がちよつとでも家の話するとすつげえ心配そうな顔してたくせに」

そんな、顔に出ていたなんて。

今すぐ顔を隠したい。

「千伽、チャリは置いてけ。歩いて帰るぞ」

やっぱり怒らせてしまったみたいだ。それもそうだ、「余計なお世話」ってやつなのだ

から。

「塚本くん先帰ってて。私図書室の鍵返しておくから」

「は？　なんで別々なんだよ。お前ん家まで送って、だるくなったらしゃあなし車呼ぶ」

怒ってはいないみたいだけど真意がまったく掴めない。

「送ってもらわなくても大丈夫」

「家のこと気になるんだろ？　千伽になら教えてやるよ」

図書室の鍵を持った塚本くんはいたずらに笑った。

「お前ん家って歩いて何分くらい？」

「三十分くらいかな」

「じゃあちようどいいくらいか」

学校を出て私の家に向かって歩き出す。雨脚は弱まることなく、傘にいくつもの水滴が叩きつけられていた。

「先に結論から言つとくと家は別に嫌いじゃない。つーか、どうでもいい」

ずっと気になっていたことの回答があっさり出されてしまった。

しかも好き嫌いじゃなくて、「どうでもいい」って、ある意味一番ひどい。

「まあ好き嫌いかのどつちか選べって言われたら嫌いだけだな。しきたりが色々あつてめんどくせえし、なんかじめつとした空気が醸し出してるし」

確かに塚本家について、あまり明るい印象は抱かない。

市内に一族が散らばっているそうだから中にはいい家もあるだろうけど、塚本くんの家のはわりはいつも静かだし、中学の入学式の時一度だけ見たことのある塚本くんのお父さんはとても厳しい表情をしていた。

「お父さん達と話とか、しないの？」

「しねえな」

「お母さんとも？」

「余計しねえよ」

「どうして」

普通お父さんとお母さんだったら男の子でもお母さんの方が話しやすいんじゃない。

「んー。分かりやすく言うわ。」

家自体は嫌いじゃない。使用人で昔から世話になつてる奴なんかも居るし。そいつらが居る場所だから嫌いになりきれないって言えばいいのか。

で、親父と、あいつは気持ち悪い」

塚本さんの声に集中していた鼓膜が雨音を大きく響かせた。

「脳内で今聞いた言葉を反芻する。」

気持ち悪い。

どんな経験をしたら親を気持ち悪いだなんて思えるの？

それにお母さんを「あいつ」呼ばわりだなんて。

否定的な考えをしたけれど、それはすぐに抹消された。

私も人のことが言えない。

「そんな顔すんなよ」

掌で軽く額を押された。全然痛くない。

「ここから先はトップシークレット。絶対誰にも言わないって約束できるか？ もちろん佐々口にも」

夏休み前に部活を引退して、今は家に居るであろう幼馴染の顔を思い浮かべた。

孝士にも言えないなんてとんでもない秘密なんじゃ。

「誰にも言わないけど、私に言っつていいの？」

塚本くんが今日差している傘は、半年前に私に貸してくれたものだった。

あのころの私は塚本くんにここまで近づけるなんて思いもしなかっただろう。

「お前だからいいんだよ」



あのころの私は、塚本くんがこんな風に笑うなんて知らなかった。

\*\*\*

「じゃあな」

何事もなかったかのように塚本くんは来た道を戻って行った。幸い、雨は少し弱くなっている。

店にお客さんが居たので裏口に回った。今日は集会と言っていたから住居スペースには誰も居ないだろう。そう思って家の鍵を取り出したけれど、玄関のドアの鍵は閉まっていなかった。集会、中止にでもなったのかな。

そんなことを考えながら家に入ると、見慣れないものが目に入った。

お父さん、お母さん、おばあちゃん、私の誰も履きそうにない、ピンヒールの黒ブーツ。居間からテレビの音が聞こえる。この時間、家族は店番をするかなにかしらの作業をしているからテレビがつくことはほぼない。

口では形容しがたい、不快な感情が押し寄せてくる。自分の家なのに入りたくない。唇を固く締めて靴を脱いだ。自分の部屋がある二階に上がるには居間を通らなくてはいけない。

いつもより遅い足取りで廊下を進む。廊下と居間を繋ぐ引き戸が開いていた。

「あ、千伽か。おかえりー」

居間から漂う人工的な香りが鼻腔をくすぐる。

できることなら会いたくない人がテレビを見ながらくつろいでいた。

「お姉ちゃん」

帰ってくるなんて聞いてない。

なんでいるの。

「なにボケつと突つ立ってんの？ あんたもお菓子食べる？」

「今日帰ってくるって、連絡」

「あーしてないしてない。だつて帰ろうって決めたの昨日の真夜中だもん。教授がぶつ倒れて、大事な講義がちよつとの間休みになったからこの隙に里帰りでもしとくかあつて。必要な単位はもう大体取ってるし、普段真面目に講義出てるから少しくらい休んでも平気だしね」

県外の大学に通う三年生の姉は自由奔放に生きている。

めんどくさいという理由だけで年末年始に帰ってこなかったり、突然電話してきたかと思えば部屋のどこかにあるCDを探して送って欲しいと要求してきたり。

昔から自己中心的でお父さん達の手を焼かせてきたけれど、やりたいことがあるからと勝手に決めた大学にはきちんとして通っているみたいだから許されている。

「あんたちよつと見ない間に成長したね。胸でかくなってるし。これあたしよりでかくなるんじゃない？」

立ち上がったってこちらに寄ってきたかと思ったら、突然両手で胸を掴まれた。

「ちよつ」

「うわ、しかも形いいし。腹立つなあ。素材はあんたの方が上なのよねえ。ま、あんた性

格暗いからこれ活用する日なんて来ないんじゃない？」

ものすごく下品なことを言われた気がする。

香水と化粧品の匂いがきつい。爪が異常に長くてやたらとキラキラしていた。

「ああでもあんた塚本の次男捕まえたんだったって？ やるじゃん。高校生になったらゴムに穴でも空けて」

「やめてよ！ 変なこと言わないで！」

不躰な物言いに耐えられなくなった。胸を掴んでいた姉の腕を無理やり剥がす。

反抗的な態度をとったのが気に食わなかったのか、姉は眉を歪ませた。

「たまに顔合わせしても無愛想か生意気な態度しか取らないよね、あんた。可愛げない」

その通りのことを言われて返答に困る。確かに姉の前ではそんな態度しか取れない。

自分勝手に生きている姉が昔から苦手だから。そして多分姉も私のことが好きではないだろう。お互い性格的に受け入れられない範囲が広すぎる。

「あんたがいるから帰るの渋りたくもなるのよ。ほんとイライラするわ」

姉はそう言い放つと居間に戻って私に背を向けた。テレビを見てけらけらと笑い、私の存在なんてなかったことのようにしている。

玄關の方から物音がした。お母さんとおばあちゃんの声が聞こえる。集会から帰ってきたようだった。

「千伽、なにそんな所に立ってるの。千春帰ってきてたのね」

お母さんが私に声をかけてきたけれど、居間にいる姉を見るなり視線をすぐそちらに移した。

「ただいま。おばあちゃん元気してたー？」

姉はおばあちゃんの姿を見るなりすぐさま立ち上がったて駆け寄った。派手な見た目に反しておばあちゃんっ子だからこそ家族から疎まれないのかもしれない。

私だっておばあちゃんとはそこそこ仲がいい。でも姉と比べると壁と称せられるくらいの差があつて、同じ孫なのになんでだろうと考えたことが何度かある。

人懐っこさの差だとすぐに気付いたけれど。

お母さんとおばあちゃんが姉と話をし始めたので気付かれないように二階に上がった。私服に着替えて受験勉強でもしようと思つたけれど集中できそうにない。

読みかけの本を持ってベッドに転がったみた。うつ伏せになつて本を開く。けれどいつもなら難なく頭の中で訳せる英文が全然読めなかつた。

読むのを諦めて仰向けになる。

下校からまだ一時間も経っていない。

いろいろなことがあるすぎて頭の中がパンクしそうだった。

家族つて、一体なんなんだろう。

\*\*\*

そういえば言っておかないと、と孝士の顔をまじまじと見て思い出した。

「孝士、絢乃お姉ちゃんに一週間くらいうちに来ない方がいいって伝えといてくれる？」  
昼休み、誰も来ないのいいことに委員ではなくとも図書室を占拠していた。

「なんだそれ？ 絢乃って佐々口の姉貴だよな」

隣でやたらと豪華なおかずを頬ばる塚本くんは怪訝そうな顔をする。絢乃お姉ちゃんの名前よく覚えていたな。夏休みに名簿を見たっきりだと思ふのに。

「もしかして、千春さん帰って来てんの？」

「そう」

すぐに事情を察した孝士は食べていたおにぎりから口を離し「あー……」と困惑ととれる声を漏らした。

「うっかり会ったらあとが面倒だな。言っとく」

「全然話が見えねえんだけど。千春って誰だよ？」

孝士の口から姉と絢乃お姉ちゃんの説明がされた。私はそれをただ黙って聞くに徹する。

「お前らんとこ結構歳離れてるのに上も同い年なんだな。で、すこぶる仲が悪いと」

「サバサバしてて基本いい人ではあるんだけどな……。好き嫌いがはっきりしてて、思ったことを一切オブラートに隠さないというか」

「それはあれだな、佐々口の姉貴は知らねえけど千伽にとっては天敵みたいなもんだな。すっげえ相性悪いんじゃないかねえ？」

塚本くんを見ていたら、昨日言われたことを思い出した。

あんな、塚本くんに失礼なこと、信じられない。

「デリカシーがなくて、好きになれない」

食欲がなくなってお弁当箱を閉じた。

なんの反応も返ってこなかったの二人を見ると、二人とも驚いたような目をして私を見ていた。

「千伽がそんなにはつきり言うの、初めて聞いた」

孝士に言われ、改めてついさっき言った自分の言葉を内心で反芻する。

確かに好きになれないなんて、今まで口にしたことがなかった。

それだけ塚本くんのことを悪く言われて怒っていたんだ。

「まあ千伽ん家もいろいろあるんだな。あんま家いたくないんだつたらギリギリまで図書館で勉強でもしてるか」

食べかけの玉子焼きを口に入れてお茶で流し込んだ塚本くんは、わざと気楽そうに提案してくれた。

「それ俺も行く」

「お前は姉貴に伝言という重要ミッションがあるじゃねえか」

「どうせバイトで帰り遅いから変わんねえよ。仲間はずれにすんじゃねえよ、泣くぞ」

「泣くとか笑わせんなよ！」

軽快な二人のやりとりにおかしくなって、つられて笑ってしまふ。

笑ったら食欲が戻って来た気がするのでもう一度お弁当箱を開けて残りのおかずを完食した。

\* \* \*

「千伽あー！」

土曜日、受験勉強の息抜きを兼ねてめぐみと駅前ショッピングモールで買い物をすることにした。

うちとめぐみの家の中間地点にある交番の前で待ち合わせをし、バス亭で一時間に三本しかない駅行きのバスを待つ。かろうじて雨は降っていないかったけれど、どんよりとした曇り空で肌寒い天気だった。

「今日何時までに帰ればいいの？」

めぐみが携帯を開きながら尋ねてきた。

「うーん、七時くらいまでに帰れば大丈夫かな」

「じゃあ充分時間あるね。あつちに着くのお昼前くらいだし、先にランチしようか」

バスの時間をあらかじめ調べておいたので、五分ほどでバスはやってきた。土曜日ということもあってそこそこ混んでいたけれど、二人掛けの席がちょうど空いていたのでそこに座る。

「なに買おつかなあ。ワンピース欲しいけどアウターも買わないといけないなだよなあ。多分どつちもは買えないわ……」

窓側に座っためぐみは真剣な顔をして購買プランを考えていた。

「千伽はなに買うつもり？」

「えーと、下着買おうかなって思ってる」

他のお客さんに聞こえないように小声で答えた。

皮肉にも、姉に胸を掴まれ大きくなったと言われたことで下着のサイズが合っていない

ことを自覚した。ちよつときついかな、と思わなかったこともなかったのだけど大して気にしていなかったのだ。

「けどその分はお母さんにお金貰ってるし、あとはスカートが欲しいかな」

この時期に買い物に行くのを許されたのは、下着を買うという名目があったからだだった。りする。

「確かに千伽、大きくなった気がする。背小さいし他の部分は全然肉ないのに」

□を尖らせためぐみは胸の辺りをまじまじと眺めた。そんなに見られると恥ずかしい。「めぐみだつて大きいじゃない」

「あたしはその分他にも肉があるのよ。ダイエットしたら胸から落ちていくつていうし、どうしたらいいんだろ」

別に余分なお肉がついているとは思えないのだけど……。最近テレビに出ている女優さんやモデルさんなんかも痩せすぎているんじゃないかと思つてしまう。そういえば姉も中学・高校時代は少しふつくらしていたのに、大学に入った途端かなり痩せた。周りが痩せていたから頑張つて痩せた的なおぼあちゃん達と話していたような気がする。

「あーあ。女子っていろいろと面倒だよ。あの学校いるとつくづく思うよ。女子同士じゃファッションやらなにやらで話合わせないといけないし、外に出たら世間体を気にしないといけないし。あの制服はほんと重荷だわ。親と喧嘩してでも公立入つておけばよかった。そしたら千伽と一緒だし」

世間体云々はよく分からなかったけれど、女子同士の付き合いに関しては同意せざるをえない。みんなの話題にうまく合わせないとすぐに輪からはずされる。私の場合は浮いた



せいではずされちゃったのだけだ。

そういう煩わしいことを考えないでいい相手はめぐみだけだ。

「あと男！ 誰と誰が付き合ってる、あの子があの人のこと好きだから手を出すな、あなたは誰が好き？ とかさ。好きな人いないと人権ないみたいな言い方する奴もいるよ。受験ないからってお気楽すぎない？」

確かにそれはどうかと思う。聞いているだけでげんなりしてきた。

「うちはどうなんだろう……。受験あるから優華ほどじゃないとは思うけど。最近まともにそういう話してないから分からないや」

「まさか地主の子と仲良くなるとは思わなかったけどねー。でもどうでもいい女子と付き合うよりかはずっといいんじゃない？ 女友達はあたしだけで十分よねー？」

茶目つ気たつぷりに言われ、思わず笑ってしまった。

私はいつもこうして誰かに笑わせてもらっている気がする。この間も孝士と塚本くんもそうだった。

いつか、私が笑わせられる立場になれたらいいのに。

めぐみの問いにもちろん、と返事をするともうすぐ駅前バス停につく旨のアナウンスが流れてきた。

フードコートで昼食を済ませたあと、ショップが立ち並んでいる階に上がった。

「千伽、これとこれならどっちがいいと思う？」

「めぐみにはこっちの色のの方が合うんじゃないかな」

ワンピースかアウターと言っていたためぐみだけど、今見ているのはカットソーだった。買物なんてそんなものだ。

「千伽はなにかいいのあった？」

「まだピンとくるのはないかなあ。まあまだ二軒目だし、一通り回ってから最終的に買うもの決めようよ。セールで早い者勝ちってわけでもないし」

「そうする。あたしいつも衝動買いして後悔するんだよね。今回は慎重にいくわ」

一時間半ほどかけてシヨップ街を周り、お茶も兼ねてカフェでなにを買うか会議。めぐみは黒のピーコートとカットソーを、私は白のミニスカートとコットン素材のキャミソールワンピース、それに下着四組を買った。

カフェで随分と長い時間話しこんでしまっていたので日が暮れようとしていた。時計を見ると六時が過ぎてている。

「そろそろ帰らないと。バス間に合うよね？」

「うん、十五分があるから七時までには帰れる」

「あ、そうだ。あたし欲しい雑誌あるから千伽の家寄っていつでもいい？ 閉店しちゃうかな」

うちの本屋は田舎なことあつて閉店時間がバラバラだったりする。基本は七時閉店だけど、雨が降ったりしてお客さんの来る気配がなかったりするとそれよりも前に店を閉めることがある。

けれど問題はそこではない。閉店してもレジさえ締めなければ問題ないから、電話して頼んでおけばどうにでもない。今回問題なのは。

「お姉ちゃんいるかもしれないけど……」

「あ、そっか帰ってきてるんだっけ」

孝士と同じく幼馴染のめぐみももちろん姉とは面識がある。

「うーん、まあ大丈夫でしょ。入るの店の中だけだし。会ったとしてもちよつと火花が散るだけよ」

めぐみも姉と一緒にストレートな表現をする。けれど、姉と違って言うていいことと悪いことの区別はついているし、なにか事情がない限り人を貶めるようなことを言わない。そしてめぐみにとって姉は貶めてもいい対象になっている。

口論になるのはよくないし、私も最大限顔を合わせたくないからどこかへ出かけてくれていることを願う。

バスを降りて家に向かうと店先の電気がまだついていて。電話しておいたから開けておいてくれたのかもしれない。

この時間になると店番は多分お父さん——かと思いきや違った。

どうして嫌な予想というのはよく当たるんだらう。

「けっこう早かったじゃん」

レジに座っていたのは雑誌を読んでいる姉だった。電話に出たのはお父さんだったの  
に。

「めぐみ、久しぶりだねえ。優華どう？ お嬢様ばつかでめぐみには空気合わないんじゃない？」

「お久しぶりです千春さん。大丈夫ですよ、社会勉強だと思えばどうってことないです。」

それよりも千春さん、ちょっと会わない間にまた化粧濃くなりましたねー。面の皮が厚くなったってこういうことを言うのかな」

目に見えない火花が二人の目から散っていた。顔を合わせる度に起こることなのだけど、毎回胃が痛くなる。

「残念だったわね、あんたも絶対化粧濃くなるタイプよ。それで、なにが欲しいの？」

「この間出たSoup」

「あんたにはまだ早いわよ。ピチレモンにしときなさい」

めぐみのこめかみあたりに筋が通った気がした。

ピチレモンは確かに中学生向きだけど私でもあまり参考にしない。特にめぐみは大人っぽい顔立ちをしているから余計に合わないだろう。

「お姉ちゃんレジ私がやるから。戻っていいよ」

これ以上二人を同じ空間にいさせてはいけない。

「あつそ。じゃあよろしく」

姉はあっさりと引いて住居スペースへと戻っていった。背中が見えなくなると安心したのか軽いため息がでる。

「相変わらず性格悪いなあ。絶対ナチュラルメイクにするんだから」

「ちよ、聞こえちゃうよ」

「構わないよ別に。今に始まったことじゃないしね」

めぐみはSoupを買って帰っていった。レジ締めをしてもらうためにお父さんと呼ぶ。

楽しい一日だったのに最後の最後で疲れてしまった。

\*\*\*

“ 女って買い物するのに丸一日使うのかよ。あんなもん二時間もありや充分だろ ”

“ 買い物自体はそれくらいだけど、お茶とかしてたらすぐ時間経っちゃう ”

夜、夕飯を食べ終えると日課のパソコンを始めた。最近はメールのやり取りではなくスカイプというチャットでリアルタイムに塚本さんと会話をしている。これのおかげで随分キーボードを打つのが早くなった。

“ 今度の土日にも図書館行こうぜ。その時今日買った服着て来いよ。審査してやる ”

塚本さんの審査ってちょっと怖いなあと思うつつそろそろスカイプを終わりにする旨を送信した。お父さん達との約束で、特別に調べ物や作業がない限りパソコンは一日三十分までとなっている。

「あれ、あんたパソコン使えるようになったの？」

不意に背後から声をかけられた。お風呂に入っていた姉が体を折って液晶画面を覗きこんでいる。

「スカイプ？ あんたがこんなの使えるようになるなんて。これも地主次男の仕込み？」

「なんだっていいじゃない。見ないで」

塚本くんからの返事を待たずに反射でスカイプを閉じてしまった。なんてことのない会話しかしていないけれど、見られるのは不愉快だ。

「別にどうでもいいけど、あんたパソコンなんかしてていいの？ 受験勉強しなくていい

わけ？」

中学三年生が遊んでいたら誰しもが突っ込んできそうな質問、というより詰問を突きつけられた。

「勉強もしてるよ。それに中高は今の成績で問題ないって言われてるし」

「ふうん。まああんた真面目くらいしか取り柄ないもんね」

いちいち勘に触るような言い方をされてむっとしてしまふ。じゃあ自分には一体なんの取り柄があるというのか。そんなこと言えるわけがないけれど。

閉じたと思っていたスカイプは画面内から消えただけでまだ起動しているようだった。下のタスクバーでアイコンが点滅している。返信がきた合図だ。なにか反応しないと。

「用事がないなら離れてくれないかな」

早く離れてほしくて尖った口調になってしまった。

「なに怒ってるの？ 受験でストレス溜まってんのかもしいれないけどそれをあたしにぶつけないでよ」

ストレス？ 溜まってるとしたらそれは明らかにこの人のせいだ。いきなり帰ってきて早三日。できるだけ顔を合わせないようにしようと思くと遅くに帰ったりしているけれど、少しでも話をしたら悪気のない悪意のこもった嫌味や暴言ばかり。

お母さんやおばあちゃんが高速道路問題の話をして、うんうんと聞いてはいるけれど本心ではどうでもいいと思っっているなど手に取るように分かった。なんでお母さん達は気がつかないんだろう。

店の維持問題に関わるんだからもつと真剣に聞くべきなのに。将来店を継ぐのは長女で

ある姉のはずなんだから。

なんでこの人はこんな自由にしていられるの？ やりたいことがなにかは知らないけれど、それがあれば特権のようになんでもできるの？

「ちょっと、なにか言いなさいよ」

返事をしないでいたら姉が苛ついた表情を見せた。化粧をしていない顔、久しぶりに見た。私と少し似ている。当たり前だ、姉妹なんだから。

顔は似ているのになんで中身はこんなに違うんだろう。

私だって、言いたいことくらい、言いたい。

「お姉ちゃんのせいで溜まつてるストレスを、お姉ちゃんにぶつけてなにが悪いの？」  
パソコンから目を離れた。血が昇り始めているのか、頭がぼーっとしてくる。

「はあ？」

「連絡もなしにいきなり帰ってきて、好き勝手して、デリカシーのないことばかり言つて、その上お母さん達が悩んでる道路問題には関心なし。長女としてなにか思わないの？」

この店継ぐの、お姉ちゃんでしょう？」

一度も息継ぎせずに吐き出したので少し息が乱れた。頭はすっかり冴えている。

言つてやった、という満足感はその瞬間すぐに打ち砕かれた。

「じゃあ、あんたがここ継げば？」

姉がまるで虫でも見るかのような冷たい目で私を見下ろしていたから。

「な、なに言ってるの？ うちの長女はお姉ちゃんじゃない」

「別に兄弟姉妹の一番上が店継がなきゃいけない決まりなんてないでしょ？ あたしはあ

んたが継いだって全然構わないし、お父さん達だって別に文句言わないって。それで一緒に道路の反対すれば？ 継ぎたいなら継いでいいし、勿論継いでから道路に賛成して移転させるのもありよ。多分あれ年単位で結論引きずりそうだし。そうじゃないならあたしの権限でどうするか決めるけど」

誰の都合も聞かない勝手な持論。この人はいつも自分勝手なことばかり言う。そうだ、こんな人に店を任せるより私が店を継げば。

継げば？

そこから先がなにも思い浮かばなかった。自分が店を切り盛りしているビジョンがまったく見えない。

『やりたいこと』ではないから？

「ねえ、あたしちゃんと選択肢与えてるわよね？ あんたが今なんでも言えないのか教えてあげようか。

なにも考えてないからよ。自分の未来に、なんの確証も持っていないからよ」  
姉は私と視線の高さを同じにして言い放った。

「か、んがえてなくなんか」

「じゃあどうしたいか今すぐ言ってみなさいよ」

こんな時、いつもならからかった口調なのに珍しく笑っていない。

強い視線に射殺されたような気分。

「ほら言えない。あんた、自分の人生に『自分』がちっとも備わっていない」  
絶句した。



これだったんだ、私と姉の違いは。

自分の人生に揺らがない軸があるかないか。

「いた、ちよつと千伽!」

姉を突き飛ばして廊下を走り、家を飛びだしていた。

自分の人生どころかこれからどこに行くのかすら分からずに。

外に出てしばらくひたすら走った。小雨が降っていて水滴が顔を濡らす。

習慣でか、学校までの道のりを走っていたようだった。体力がもたなくなつて立ち止まつてしまうとそこは畑の真ん中で、人ひとり居ない。

息を切らせながら周りを見回した。真つ暗。なにも見えない。

これからどうしよう。いつまでもここに立っているためにはいけない。

でもどこにも行けない。行きたいと思える場所がない。

意味もなく歩き出す。雨が冷たい。寒い。

真つ暗。目も、私のこれからも。

怖い。

「千伽!!」

背後から突然名前を呼ばれた。土の道を駆ける足音がどんどんこちらへ近づいてくる。

「こんな所にいた」

「孝士……?」

近くまで来てそれが孝士だと気付いた。

「千春さんから電話がきて、千伽が家出したっていうから。どうしたんだよ、なにがあったんだよ」

私が上着一枚着ていないのに気付いたのか、孝士は自分の着ていたパーカーを脱いで着せてくれた。大きくてあったかい。

なにかが溶けていくような、心地よい感覚。

「し、んろ」

なにも考えずに口が開いた。

「進路？」

「わたし、自分のことなのに、なんにも決められない」

頬を冷たい雨ではなく暖かい水滴が伝った。抑えていたものが決壊したように次々と溢れてくる。

きつと孝士は私になにを言いたいのかわかっていないから、ちゃんと説明しないとけないのになまく言葉にできない。

「千伽」

後頭部を孝士の手を押さえられた。そのまま押されて、頭が孝士の胸の中に入る。

「千伽がどれだけ悩んでそれでも答えが出なくても、俺は千伽を絶対に否定しないしいつか答えが出る日まで見守りたいと思う」

後頭部を持っていた手が下にずれた。両腕が背中に回る。

力、強い。

「俺はどんな千伽でも好きだよ」

弱々しいけど確固たる意志が通っているような声だった。

好きにも種類があることは当然知っている。

これは、私がまだ分からない『好き』だ。

涙が止まった。

体が離れて、一瞬だけ目があったけれどすぐに逸らしてしまった。

孝士の言葉になんて答えたらいいいのかわからない。

「こんなところでいてもしょうがねえし、とりあえず家帰ろうぜ？ 送ってくから」

家、というワードで姉が連想された。

嫌だ、会いたくない。

一步孝士から離れると、地面が一部光っているのに気がついた。

同時になにかが激しく倒れる音。

「千伽、てめえやっと思つけた！」

孝士が来た道とは反対方向から叫声が飛んでくる。

「塚本くん？」

なんで塚本くんまで。

光の正体は自転車のライトだった。今は畑の脇に派手に倒されて私達の足元を照らしている。

「いきなりスカイプの返事がなくなったと思つたらお前の姉貴が話しかけてきたんだよ」

放置したままのスカイプの存在を思い出した。終了させていなかったから塚本くん繋

がったままで。

姉がなにををしたいのか分からない。なんで二人に連絡したの？

「お前の姉貴、とんだ策士だな」

塚本くんはそう呟きながら私の背後にいる孝士を見た。

「そうだな。あの人がやりそうなことだ」

孝士も塚本くんと目を合わせる。

今まで味わったことのない空気が漂っていた。

「千伽、今日は俺ん家泊まれ」

「え？」

急な展開についていけない私の腕を塚本くんが掴んで引いた。

「詳しいことは聞いてねえけど姉とドンパチやって家帰りずれえんだろ？ だからうち泊まれ」

「え、だってそんなの、悪」

「俺がいつだって言ってるんだからいいんだよ。佐々口、こいつ今日泊めるから千伽ん家に伝えろ。どうせ家通るだろ？ 連絡とかしてこなくていいからって伝えてくれ、あとが面倒なことになるから」

塚本くんはズボンのポケットからiPhoneを出した。カバーをしているとはいえ、雨が降っているのに出して大丈夫なんだろうか。

液晶の光が塚本くんを照らした。髪が随分濡れているし、よく見れば服もあちこち汚れている。そういえば自転車、雨の中乗れないって言っていたのに。

「あ、俺。迎え来い。今？ 畑のど真ん中でよく分かんねえ。俺ら学校に近付いていくからどつかではち会うだろ。チャリ入れるからトランク空けとけよ」

塚本くんは手短かに通話を終えてiPhoneをポケットにしまった。倒れた自転車を起こし、私についてくるように促す。

「塚本」

ついて行こうとしていた足が孝士の声に止められる。

「なに」

「本当に千伽泊めんのかよ」

少し離れたら顔なんてよく見えないのに、二人はお互いの顔を見合っているようだった。

「お前の言いたいことは分かる。じゃあお前ん家に泊めるか？ 無理だろ」

孝士からの返事はない。塚本くんは自転車を押しながら歩き始めた。

私も塚本くんについていこうとしたけれど、孝士の上着を着たままなのを思いだした。脱いで孝士の方に駆けよる。

「いいよ、着てきな。風邪引いちまう」

差しだした上着をもう一度着せられる。風邪を引いてしまうのは孝士も同じなのに。

「さっき、答えが出るまで見守るって言ったけど、多分すぐかもな」

髪を撫でられる。うつすらと笑っているように見えた。

「俺はここに残ると思う。高速道路ができればいいが俺はこの町が好きだから。」

だからその時は、ちゃんと選んでくれな」

なにを選ぶの？

そう聞きたかつたけど、聞けなかつた。

\*\*\*

遠目で見たことがあるだけの塚本くんのお屋敷は中もものすごくお金がかかっていそうで、お邪魔するのをためらってしまつた。

「誰もとつて食いやしねえから入れつて」

遠慮しながらも玄関（うちの店よりちよつと狭いくらいの面積）に入ると使用人の人達は何人も待機していて、塚本くんと私を見るなりバスタオルを被せてきた。

「楓さま、なんてお姿に」

「お嬢さんも風邪を引いてしまいます」

女の使用人さん達に引つ張られ塚本くんと離れ離れに。脱衣所に連れていかれ、抵抗する間もなく服を脱がせられた。バスタオル一枚を巻かれ浴室（というより浴場）に放り出される。

「外でお待ちしておりますので。ごゆっくりどうぞ」

なぜか分からないけどみなさんとても楽しそうだった。

とりあえず好意に甘えてお風呂をいただくことにする。ごゆっくりと言つてくださったけど外で待つているなら早く出ないと。

着替えが当たり前のように浴衣だった。着物の着付けを習つておいてよかつたとおばあ

ちゃんに感謝する。脱衣所から出ると、先ほどの使用人さん達の中から二人が本当に待っていた。

「早かったですね。気を遣われなくても良かったのに」

「楓様がお待ちですわ。こちらへ」

二人の使用人さんのあとに続いた。

「あの、すみません。こんな遅くに」

ご迷惑を、と言いかけたところで口止めされた。

「迷惑なんて全く思っていないわ。寧ろ嬉しくて」

「楓さまがお友達を連れてくるなんて初めてですもんね。しかもこんなにかわいらしい女の子だなんて。あとで褒めて差し上げないと」

恥ずかしくなって俯いた。かわいいなんて言われたの幼少のころ振りじゃないだろうか。

この人達、きっと塚本くんにとってお世話になった大事な人達だ。

長い廊下を進むと、途中から建物の様子が変わったような気がした。内装を見る感じ別の建物といってもいい。

「お気づきになりました？ 楓さまは離れて生活なさってますの」

離れがある家なのかと呆然としてしまった。同時に疑問がひとつ浮かぶ。

「塚本くんだけ、ですか？」

「ええ」

苦々しい様子で答えてくれた。

その理由を私は知っている。  
角を曲がった向こう側から言い合いのような喧騒が聞こえた。使用人さん達も顔色を変  
える。

進むと廊下に塚本さんと、あと二人。

姉と同じくらいの年齢の男の人と、お母さんと同じくらいのきれいな女の人。

「奥さま、なぜここに」

使用人さんのひとりが着物の裾を持って早歩きをした。もうひとりの使用人さんは私を  
その場で立ち止まらせる。

「あら、その子が楓のお友達？」

高そうな着物を着ている女の方が私の方を見た。

目が虚ろだ。この人が塚本さんの。

「見たからもういいだろ、帰れよ」

「そうだよ母さん、もう夜も遅いし」

塚本さんと男の人が女の人を帰るように促している。

「息子のお友達に挨拶しないんじゃないや母親失格だわ。ごめんなさいね、遅いから大したお構  
いもできませんけど」

女の人がこちらに近づいてくる。

悪寒がした。

「息子とか気持ち悪いこと言ってんじゃないやねえよ、俺はてめえの腹から出てきた覚えは  
ねえ！」



塚本くんが走って庇うように私の前に立つ。

「楓さま！」

使用人さんが慌てたように叫んだ。

「千伽は全部知ってる。俺と兄貴は腹違いで、その女は親父の元愛人だってな」

時間が止まったような感覚に陥った。みんなが硬直してしまったから。

塚本くんの“お義母さん”は、顔を酷く歪ませた。

\*\*\*

塚本くんの秘密は、もし私だったらとてもひとりじゃ背負いきれないものだった。

「あの家の跡継ぎ、本当は俺だったんだよ。さつき一緒にいた兄貴は愛人の子で後継者になれるわけがねえから。けど本妻、俺の母さんな、が病気で死んだ。俺が小学校に入る少し前の話だ。そしたら親父は四十九日も待たないで再婚した。愛人とな。愛人の子どもは晴れて正式な長男になって後継者候補筆頭に、俺は次男に降格。この事実を知っているのは塚本家の人間、その中でも上の方にいる奴らだけだ。兄貴は表向き俺の母さんの息子になってる。元々病弱でほとんど外に出なかつたし、俺らも学校行きだすまでほぼ幽閉されてたようなもんだから、いつ子どもを生んだとか外の人間には分かんねえんだよ。だからばれねえ。まあそれは全然いい、あの家継ぐとかだるすぎるし。

よくねえのは二番目の本妻。自分の息子が自分の息子だと認知されなくて狂ったのか知

らねえけど、何故か兄貴じゃなくて俺を本当の息子だと思ってる。

冗談じゃねえよ。俺の母さんは母さんだけだ。

それに、母さんの死も悼まないでほしい。再婚しやがって、信じられねえ」

\*\*\*

塚本くんの私室にはあまりものがなかった。必要最低限の家具と小さめの本棚があるくらい。その本棚は参考書や問題集が大半を占めている。小説は私が勧めた本が何冊かだけ。寂しい部屋だと思った。塚本くんはなにを思いながらここで生活してきたんだろう。

小学校を変えた本当の理由が分かって辛くなった。お父さんが突然再婚したせい。小学生の間は学校がある市に住んでいる親戚にお世話になっていたとも聞いた。まったく会わなかったはずだ。

お茶を持ってきてくれた使用人さんが部屋を出てから塚本くんは一度も口を開いていない。

部屋はとても静かで、雨音がよく聞こえる。使用人さんが「今晚いっぱい降るみたいですよ」とさつき教えてくれた。

「千伽」

お茶を一口飲んだ塚本くんは初めて口を開いた。

「悪い。まさか離れにまで乗り込んでくるとは思わなかった。普段は絶対入らせねえようにしてんだけど」

「全然気にしてないよ。それより塚本くん、顔色よくない」

風邪を引いてしまったんじゃないか、そう思っただけで無意識に頬に触れようとした。その手を握られる。反射で腕を引こうとしたけれど離せなかった。

「佐々口となに話してたんだ？」

姉と同じくらいの力を持った瞳が私を映した。

姉とは違う意味で射殺いころされてしまいそう。

「それ、は」

言えない。私の中でまだなんの整理もできていないというのに。

握られる手に力が入った。

「俺は東京に行く。佐々口はここに残る。」

佐々口が言ってたな、ちゃんと選べって。

俺と一緒に来い、千伽」

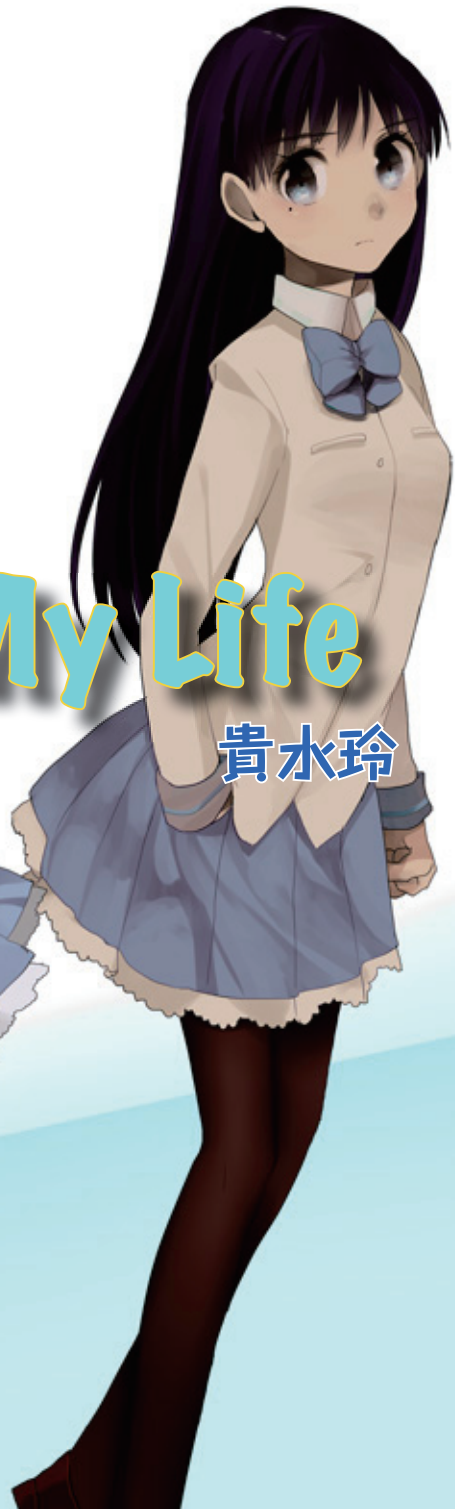
なにを選ぶの？ 孝士に言われた時生まれた疑問。

「俺は、お前と友達やめてえんだ」

答えが分かった。

選べる気が、しなかった。

**NONSTOP**



# Dear My Life

Illustration: ヒトエ

貴水玲

あ  
ら  
す  
じ

母の勧めでN市の優華女学院高等部に入学した花。自分とそっくりな旧家の娘・ありさと出会い従姉と知る。彼女の嫌がらせや噂で花は孤立するが、星流の応援のおかげで初めて友人が出来る。そして夏休み。十夢と海の家を手伝う花は事件に巻き込まれるが、星流と二人の時を過ごし少しずつ距離が縮まる。



十河 星流  
(そごう すばる)

高二。政治家一族の息子で女子に人気が高い。



西野 花  
(にしの はな)

高一。何事にも一生懸命な、素直で心優しい少女。



塚本 ありさ  
(つかもと ありさ)

高一。プライドが高く利己的な旧家の娘。

+

有川 十夢  
(ありかわ とむ)

高二。花の住むアパートの大家の息子。

第四話 ゆずれないもの

九月。新学期。

夏休みが終わり、優華女学院の校舎は久々ににぎやかさを取り戻した。

ひと夏の思い出話に花を咲かせる生徒たちの、きらきらした笑い声があちこちであふれている。眩しい青空で輝く陽射しの熱は、新しい季節を迎えてもまだ冷めることはない。忘れられないこの夏の出来事のように――涼しい秋がくるのはまだ当分先のようなだ。

「あ。おつはよー、花！」

教室に入ると、窓辺から絵里と亜樹が手を振ってきた。久しぶりに見るその笑顔にうれしくなつて、花はカバンを持ったまま二人に駆け寄った。

「おはよう、二人とも。元気だった？」

「うん、元気元気！ あたしはバレエと講習だらけだったけどね」

と、絵里。こんがりと焼けた小麦色の肌は毎日の部活の成果だろう。

「わたしは家族で沖繩に行ったよ。あとでおみやげ渡すね。花ちゃんはどうかだった？ 確か大家さんの親戚の海の家を手伝うって言ってたよね？」

「う、うん」

「そういえば結構焼けたね、花。炎天下で大変だったんじゃない？」

絵里の指摘に、「え、そう？」と花はポケットからコンパクト型のミラーを取り出した。その中に映っているのは、確かに少しだけ以前よりも血色のいい自分。もともと花は透けるように色が白いので、ようやく普通になったという感じだが。デリバリーで砂浜を走り回っていたせいだろう。

夏休みの間、花は何度かマリナのところへ手伝いに行った。予定より早く帰ってきて時間もあつたし、何より店員をしている間は違う自分になったような気がして楽しかったからだ。十夢は部活があると逃げたので、一人でバスに乗って通った。学校の許可を得ていなかったのでバイト代はもらわなかったが、マリナは交通費とお昼を出してくれた。

「忙しかったけど、楽しかったよ。私トロいから最初は迷惑かけたけど」

いいこともあつたし——星流のことを思い出して、顔が少し熱くなる。夏の暑さとは違う熱。それは二人で夕陽を見たあの日からずっと続いている。

「んー？ 何かいいことあつたの？」にやりと絵里が笑った。

「なーんかうれしそうだから。いい出会いでもあつたのお？」

「な、ないよ！ そんなの」ドキっとして、慌てて花は首を振った。もしかして顔に出てしまっていたのであるうか。そのまま急いで話題を変える。

「そ、そういえば絵里ちゃん、講習はどうだったの？ 楽しかった？」

「うー、それ聞かう？ マジで苦痛だった！ 最後のテストもギリギリ合格だったし」

もう絶対嫌だ！と絵里が頭を抱えた時、クラス委員の少女が「始業式が始まるから体育



館へ行つてくださーい」と教室内に呼びかけた。

その声に従つて花たちは廊下へ出た。ちやうど他のクラスからもぞろぞろと生徒たちが出てきたところで、その流れに乗って歩き出す。

「でもね、特別講座はけっこうよかつたよ。昇星の先生つてお固いイメージがあつたけど、話おもしろかつたし。それにね、なんと星流様に会えたの！」

「えっ、うそ！ まじで!？」

その話題にすぐさま亜樹が食い付いた。

「ほんと、ほんと。ちよつと見ただけだけど、かつこよかつた〜! なんか雰囲気違うんだよね。さすが名家の息子つて感じ。父親側は代々政治家、母親は元舞台女優なんですよ」

「頭も顔もよくて、その上お金持ちなんて、他には絶対いないよね。いいなあ、あんな人が彼氏だったら……。ねえ、花ちゃんもそう思わない？」

「う、うん……。そうだね」

興奮気味の二人に合せて慌てて頷く。――まさか夏休み、その王子様と二人きりになつたなんて口が裂けても言えない。また心拍数が上がり始めて、花はそつと胸を押さえた。

「でも、ありえないよねー。庶民には雲の上の人だもん。お金持ちで美人のお嬢様じゃなきゃ絶対釣り合わないって」

両手を頭の後ろで組み、絵里がため息をつく。その言葉に花はふと冷静になった。

――そつか。そう、なんだよね……。

手の届かない、雲の上の人。確かにその通りだ、と思つた。

星流に誘われて、夏休みの間もう一度だけ一緒に夕陽を見に行つた。あの時は当たり前

のように一緒にいたけれど……でも本当ならありえないことなのだ。

かたや、人気者で優秀な星流。かたや、地味でいじめられっこな自分。

何の共通点もない。普通なら出会うことすらないタイプ同士だ。

「あ、そういえばぎ……その時に見たんだけど」

ふいに絵里が声をひそめた。その時上着のポケットの中で携帯が震えた。

——あれ、メールかな……。

咲かもしれないと思いい花が携帯を取り出そうとしていると、

「いたっ……」

突然肩に衝撃がきて花は思わずよるめいた。

ふわり、とフローラル系のコロンの香りが目の前を過った。ありさと取り巻きたちが前に割り込んでくる。すれ違いざまの一瞥に花はギクリとした。

「うわ、感じるわーい。大丈夫？ 花ちゃん」

亜樹が心配そうに訊いてくる。「う、うん」と頷き花はそつと息をついた。

——こ、怖かった……。

夏休み前より、目つきが鋭くなったように思うのは気のせいだろうか。相変わらず嫌われているようだ。今日からまた始まるのか——と花の気持ちは一気に重たくなった。

「今の絶対わざとだよ。お嬢様だからつてお高くとまっちゃって……つて、花とは親戚なんだっけ」

絵里が口を押さえた。花は苦笑いを浮かべた。

「うん……でも、もともと交流もないし、あの通り嫌われてるから」

「でもひどい話じゃん。花のお父さんが塚本家を出たのはお母さんのせいだって一方的に言うんでしょ。それで花に辛く当たるのは勝手すぎるよ。噂流したのも絶対あの子だよね」  
塚本家からはあれきり連絡はないままで。おそらく下手に関わりたくないのだろう。このままこちらが黙っていけば終わるのだろうか。でも一方で、ありさとちゃんと向き合わなければとも思う。たぶんそれは、花のこれからを大きく左右することだから。

「あくでも腹たつ！ 色んな意味でっ」胸の前で手を握りしめ絵里が悔しそうに言った。

「だって見たのよ。講座の時、あの子が星流様と一緒にいるところ」

「えっ、なにそれ！ どういうこと？」

その時、ふとありさが後ろを振り返った。強い輝きを持った黒い瞳の中に――不敵な笑みが一瞬浮かんで消えた。

「噂なんだけど、聞いたの。二人がつきあってるみたいだって――」

――え……？

長い髪を翻し、ありさの姿が人波の中に紛れていく。急に周りの音が遠ざかっていくように、そんな感覚に花は襲われた。

「あのう……なんで私が呼ばれたんでしょうか」

始業式が終わって学校を出た後、花は十夢に呼び出されて駅前のゲームセンターにいた。

十夢はさつきから百円玉を摘みあげて、クレインゲームに熱中している。狙っているのは、女の子に人気のクマのキャラクターのぬいぐるみだ。

「しよーがねーだろ、罰ゲームで全種類コインツを取らなきゃならなくなったんだから。こんなの男が抱えて歩いてたら恥ずかしいだろ。お前が欲しがってることにしろ」

勝手すぎる言い分に、花は小さくため息をついた。

始業式の始まる前に来たメールは十夢からだった。『学校が終わったら駅前に来い』という謎のメッセージを不審に思いながらも、怒られると怖いので言われた通り来てみたら……こうして袋片手に待たされるはめになったのだった。

「……でも私には関係ないと思うんだけど……」

部活のマネージャーたちとの賭けに負けたりしいが、そんなのは十夢の事情だ。本当なら絵里と亜樹とランチに行くはずだったのに、と花はしゅんと項垂れた。

「すぐ終わるって。こういうのは得意なんだ。あと三匹！ あーっ、ちくしょう！ はずした！ おいハナモヤシ、ちよつと千円くずしてきてくれ」

「ええっ、なんで私が？ っていうか、ハナモヤシってなに！？」

「だってお前色白で貧相でモヤシみたいじゃん。女だからハナをつけた。名前も花だしな」  
ひどい！ 花はシヨックで言葉を失った。十夢の口の悪さには耐性はついてきたつもりだったけど、ひどすぎる。しかも完全にパシリだ。

「おい、早く行ってこいよ。あそこに両替機あるから」

——でも言い返せない。しぶしぶ千円を受け取って花はあたりを見回したが、

「えつと……あそこってどこ？」

「あそこだって。見えねーの？」

十夢が指差した方に目を凝らす。ようやく見つけて花は急いで両替をしに行った。

「お前、そのメガネの度合ってるの？」

百円玉を受け取り、十夢が長身をかがめた。じっと見据えてくる鋭い目に花はのけぞる。  
「え？ うん、たぶん……最近ちよつと見えにくいけど」

「変えた方がいいんじゃない？ ていうか、この際コンタクトにしたら？」

「コンタクト？ で、でもずつとメガネだったし、どうやって使うかわかんないし」

「ただ目につけりゃいいんだよ。その方が楽だぜ。それにお前、メガネとった方がもう少し明るく見えるんじゃない？ ずいぶん印象も変わると思うし」

「え？ そ、そうかな……」

今までずつとメガネだったから考えたことがなかったけれど。コンタクトにすればイメージがよくなる？ そうしたらもつとみんなとも仲良くなれるだろうか。

「買うんなら、つきあつてやるよ。これが終わったらな」

そう言つて十夢は再びゲームに戻った。

そして三十分後、なんとか全種類のぬいぐるみをゲットし二人はゲームセンターを出た。

「あー、なんか腹へつたな。昼メシ食つてこーぜ。つきあわせたからおごつてやるよ」

十夢の押す自転車のカゴに袋を乗せ、花はその後について歩き出した。

駅前の通りは学校帰りの学生たちで賑わつていた。マックでいいか？と振り向いた十夢に訊かれ、花は慌てて隣に追いついた。そして頷いた時——正面から見知った顔が近付いてくるのが見えた。

星流とありさだった。心臓がいつもと違う変な音をたてた。そのまま固まっていると、

自分とよく似た顔がにこりと笑った。

「西野さんじゃない。偶然ね。ここで何してるの？」

ありさが笑顔を向けてくるなんてありえないことだった。うろたえていると、ありさは十夢に視線を移した。

「あら、隣の人って前に海で会った人よね？　もしかして——彼氏？」

「あ？」と十夢が思い切り不機嫌そうな声を出した。びっくりして、髪の毛が乱れるのもかまわず花は思い切り首を横に振った。

「ち、違いわ。十夢くんは私の住んでるアパートの——」

「そうなんだ、知らなかったわ。全然話してくれないから。もしかして内緒だった？　ごめんね、なんか邪魔しちゃったみたいで」

花の返事なんかおかまいなしでありさが続ける。

助けを求めるように花は星流を見た。でもいつものように微笑んではくれず、星流は気まずそうに目を逸らした。

「大丈夫、みんなには言わないから。でも後でくわしく聞かせてね。じゃああたしたちも行くわ。こっちもデートだから」

星流の手を引き、ありさが行こうと促す。

——デート？

それって……二人はつきあってるってこと？　あの話は本当だってこと？

混乱と動揺で呆然とする花の前を、星流は何も言わずに通り返して行く。引き止めたいと思ったが——体も唇も動かなかった。

「……なんだ、あいつら付き合ってるのか」並んで歩く二人を見送りながら十夢が言った。「昇星のお坊ちやまと、地主の娘ねえ……。確かにお前と似てるけど、全然雰囲気違うな」海の家からの帰り道事情を説明したので十夢は花とありさの関係を知っている。だがそんな眩きも耳に入ってこない。

「そういうや、あの十河っていったっけ？ あいつの父親って偉い役人なんだろう。新しい高速道路建設にも関わりがあるとかっておふくろが言ってた気がする。地主の本家って建設反対派だったような気がするけど、いいのかね」

自転車を押しながら十夢が再び歩き出す。力の入らなくなった足で花も後に続いた。——なんで……。

星流はこつちを見なかった。黙って通り過ぎた。まるで見ず知らずの他人みたいによくわからないがショックだった。ものすごくショックだった。嘘だと思いたかった。距離が、あいていく……。今までのことが幻のように消えていくような気がした。

「花ちゃん、これからヒマ？ みんなでお茶しに行くんだけど、一緒に行かない？」

帰りのHR後、席を離れようとした花に亜樹が声をかけてきた。そばには数人のクラスメイトがいる。一緒に誘いに来てくれたらしい。

「あ……ごめん。私これからちよつと用があつて……」

「えーそうなの？ どっか行くの？」

「うん……ちよつと取りに行くものがあつて。ごめんね」

亜樹は残念そうな顔をしたが「そっかあ、じゃあまた今度ね」とみんなと行ってしまっ

た。ありがとう、と手を振って見送り、カバンを持って花は教室を出た。

今日はこれからショッピングモールに行かねばならない。始業式の日、ゲームセンターの帰りに十夢とモール内のメガネストアに寄り、その時花は思い切ってコンタクトレンズを買うことにした。でもちようどレンズが在庫切れで、今日取りに行くことになっていた。——ちよつと緊張するなあ。

咲に話したら何だか知らないが「色気づいてコノー！」とからかわれた。確かに自分でも思い切ったことをしたと思う。ずっと大きめのメガネをかけていたのは、少しでも顔を隠したかったからでもあったから。でも、十夢の言葉で「ためしてみたい」と思った。少しでも違う自分になれるなら——動き出してみよう。

校門を出てショッピングモールの方に歩き始めた時、携帯のバイブが鳴った。何だろうとカバンのポケットから引っ張り出す。ディスプレイに表示されていたのは、

——星流くんだ……。

どうしよう、と焦る。足を止め、花はおろおろと鳴り続ける携帯を見つめた。やがて電話は切れ、ディスプレイに「着信あり」の表示が残った。

ありさと一緒にいたあの日以降、星流からは何度か着信があった。でも一度も取ることができなかつた。電話がくるたび動悸が激しくなり、怖くて通話ボタンを押せない。カバンの中に携帯をしまい、花はまた歩き出した。

——初めから、わかっていた……ことじゃない。期待してもムダだって。

星流が自分なんか相手にするわけない。誘ってくれたのは「友達」だから。それ以上はない。それなのに優しくされて浮かれて、ばかみたいだ。



ありさを選んで当然だ。同じ顔でも自分より全然かわいい。お嬢様でいつも毅然としていて、うじうじして下を向いてばかりいる自分とは大違い。

忘れて離れよう——最初から何もなかったと思つて。……迷惑にならないように。唇をきゅつと結び、花は歩く速度を上げた。

——うーん、なんか変な感じ……。

何度も瞬きをしながら、花はお店を出た。

初めてコンタクトを装着したせいとか、目の中がゴロゴロする。お店のスタッフによると「慣れてくればなくなりますよ」ということだったけれど。

——でもすごい、くつきり見える。

メガネをしていた時よりも断然。世界つてこんなに鮮やかな色をしていただろうか。歩きながら、花はまわりをぐるりと見渡した。

勇気を出してよかった。他の人にしたら大したことはないのだろうけれど、花にとってこの小さな変化は大冒険の証だった。

弾むような足取りで下りのエスカレーターに乗り、一階のドラッグストアに向かう。医薬品コーナーに行き、コンタクト用の目薬をあれこれ手にとって選り始めていると、

——あれ？

入口から同じ制服を着た少女が入ってくるのが見えた。ありさだった。

とつさに花はショーケースの陰に隠れた。少しまわりを気にしながらありさは店の奥の方へ入っていく。どうやら気付かれなかったようだ。

ほっと胸を撫でおろし、見付からないうちに花は目薬を手にしずへ急いだ。だが店員はいない。姿を探して商品棚の間の通路をのぞきこむと、奥の一角にありさが見えた。

肩にかけたバッグの持ち手を握りしめ、入ってきた時のようにあたりをうかがっている。ちようど周りには花以外の客はいなかった。人気がないのを確かめると、ありさはショーケースの何かを掴んだ。そしてそれを――制服のポケットの中に素早く押し込んだ。――え？

もしかして今のは――万引き？

そこへ店員が「すみません」と走って来た。別の通路へ回り込み、ありさは何事もなかったかのように足早に店を出て行く。急いで目薬のお金を払い、花は後を追いかけた。

「塚本さん！」

モールの出入り口の手前で花はありさに追いついた。思わず手を掴んだ花を振り返り、ありさが目を見張った。

「な、何よ、あんた――」

「あ、あの、さつき……何かポケットに入れたでしょ？」

ありさの顔色が変わった。腕を掴んだまま、花は周囲に聞こえないよう小声で続けた。

「あの、よくないよ……。戻した方がいいよ」

「なによ……なんのこと？ いいがかりつけないですよ」

腕を振り払われ睨まれる。引きそうになったが、それではいけないと花は食い下がる。

「でも私見てたの。商品をポケットに入れるところ。持ってるでしょ？」

「はあ？ 何言ってるの？ 知らないって言ってるでしょ」

「じゃ、じゃあポケットの中を見せて！ 私本当に見たんだから……！」

強気で迫ると、ありさがぐっと言葉を詰まらせた。とっさにポケットを押さえたその仕事草がすべてを物語っていた。

「塚本さん、どうして……どうしてこんなことするの？」

理由がわからなかった。ありさは裕福な地主の娘で恵まれているはずなのに――。

「……あなたに関係ないでしょ」ありさの声のトーンが低くなった。

「見たからって何なの。バラすって脅したいの？」

「えっ……違うよ！ 私はただ、このままじゃいけないって思ったから……その」

「何よ、深刻な顔しちゃって。こんなのたいしたことないじゃない。誰だつてやってるわ」  
開き直り、ありさはそのまま帰ろうとする。とっさに花の足が動いた。

「よくないよ！」前に回り込み行く手を塞ぐ。

「返しにいこう。今ならお客さんも少ないし、バレずに戻せるよ。私も一緒に行くから」

「……なんなのよそれ」フッとありさが侮蔑を含んだ笑みをこぼした。

「あたしの弱みを握って偉くなったつもり？ そうはいかないわよ」

「え？――あつ！」

花の腕を掴んで、ありさが歩き出した。引きずられるようにしてそのままドラッグストアに入り、レジの前へ連れて行かれる。

「すみません！」

店員に声をかける寸前、ありさが何かを花の制服のポケットに入れた。

「この子、万引きしてました。私見てたんです。この子が盗むの――」

「わ、私はやっていません！ 本当です」

疑いを掛けられ、花はバックルームに連れて行かれた。何度目かの花の訴えに、店長だという男性も何度目かのため息をつく。完全に犯人を見る目だった。

「そう言ってもねえ、君のポケットから出てきたわけだし」

店長がテーブルから取り上げたのはマニキュア——ありさが花のポケットに入れたものだ。花が知るわけがない。だが状況は完全に不利だった。

「君、優華の生徒だろう。しかも地主さんちの血縁なんだろう？」

ありさを見て店長はすぐに塚本家の娘だと気付いたらしい。地主の家の者は市内では目立つ存在なのだ。そして花をすぐさま親類だと思つたようだ。ありさは違うと言つたが、二人の顔を見比べれば否定するのは難しい。

「大目に見てあげたいところだけど、本当のことくらいは言ってもらわないと。証拠もあるんだし。このままだと、親御さんはもちろん学校や警察にも話さないといけなくなるよ」

「そ、それは——困ります！」

咲に迷惑はかけたくない。知つたらきつと彼女は飛んで来るだろう。でもそんなことになつたら、塚本家からひどい仕打ちをされるかもしれない。

「だつたらちゃんと言わなきゃいけないこと言つたらどうだい？ それで謝つたら許してやつてもいい。初犯のようだし、地主さんちを敵に回したくはないからねえ」

——え……それって……。

見逃すかわりに白状しろつてこと？ 震える手を花はスカートの上で握りしめた。

やつてもいないことを認めるなんて、そんなこと出来ない。でも警察や学校にまで通報されたら——何もかもなくしてしまう。またみんなに白い目で見られ避けられる。絵里や亜樹にもきつと嫌われる。また一人ぼっちになってしまう。

ありさが本当の犯人だと言っても、今の状態ではきつと言いつつ一蹴されるだけだ。このまま自分の意志を貫くか、それとも嘘をついてでもこの場を逃れるか——二つの選択肢が花の中で振子のように揺れ始める。

——どうしよう……どうしたら？

鼓動が速くなり、握りしめた手の平に汗が滲んでいく。どうしたらいいか——だがその時、バツクルームにノックの音が響いた。

「——まったく、何てことをしてくれたの」

それから一時間後、花は古めかしい造りの和室の真ん中に正座していた。

両側には厳しい顔つきをした大人たちが居並んでいる。そして花の正面、床の間の前に姿勢よく座っているのは塚本家の当主の妻である花夜、以前花に会いに来た老婦人だ。

「万引きなんて。偶然私の知り合いがああショッピングモールにいて、ありさだと思つて電話してきたくれたのよ。まさかあなただったなんて——。いったいどういうつもりなの？こんな問題を起こすなんて。うまくなつみさんが対応してくれたから大事にならずに済んだけど、あのまま警察に通報でもされていたら大事になるところだったわ」

厳しい叱責の声に、花は俯いたまま身を固くした。

なつみとはありさの母親だ。事件を聞きつけ花夜の代わりに駆けつけてきたのだ。花を

見てひどく驚いたようだったが、何かを渡して店長に謝り事態を收拾してくれた。そしてその後、花はここへ連れてこられたのだ。

「驚いたわ。ありさかと思つたらこの子がいるんだもの。でも、万引きを見つけたのはあなたなんですって？ どうしてすぐ知らせなかったの」

花夜のすぐ横、花の斜め右上に座るなつみがその隣にいるありさに言った。

「……別に。面倒だったから」

俯いたままありさが呟いた。顔の前に垂れ下がる長い髪に隠されてその表情は見えない。花がこの部屋に入つて来た時から彼女はずっとそのままだ。一度も顔を上げていない。「面倒で済む話じゃないだろう！ ただでさえ圭祐の隠し子がいるっていう噂が広まってるんだ。この子がそうと知られたらこの家の評判に関わる。うちは由緒ある家系なんだ」声を荒げたのはなつみの向かいに座るありさの父親、勇祐ゆうすけ。本家の次期当主であり、花の父親の双子の弟だ。

「それなのに、こんな問題を起こすなんて。圭祐がうちを出る時、もう二度と塚本家には関わらないと言つたはずだ。なのにどうして今さら娘が出てくるんだ！」

激怒する雄祐の方を花はそっと見た。

ここに通された時、雄祐を見て花はひどく驚いた。写真の中でしか見たことのない父親にそっくりだったからだ。でも彼の表情は室内の誰よりも険しく怒りに満ちていた。

「そうよ。圭祐はともかく、あのアバズレの娘なんて冗談じゃない！ きつとこれは私たちに追い出された腹いせなのよ。うちをめちゃくちゃに掻きまわす気なんだわ。このまま黙ってる気なの？ お母さん。入院中のお父さんに知られたら大変よ」

後ろから飛んできたのは、この間花夜と一緒にやってきた父の姉・多恵だ。

「そうね」と花夜がため息をついた。「やっぱり一度、咲さんと話をしないとイケないわね」  
「だ……だめです！」

弾かれたように花は顔を上げた。「それに……私は万引きなんてしていません！」

「なんだって？」塚本家の面々がざわめいた。

「あなたのポケットから出てきたのでしょうか。じゃあ誰がやったっていうの？」

「それは……」口ごもりながら、花はチラつとありさを見た。

だが彼女は俯いたままだ。やはり本当のことを言う気はないらしい。

でも、ありさが犯人だとは——言えない。それが真実だとしても、ここで口にすれば卑怯者になってしまうような気がしたのだ。

「でも……私は本当にやっていないんです。それだけは本当です」

「よく言うわ」多恵の嘲笑が背中越しに聞こえた。

「学校の盗難騒ぎでも犯人だと疑われたそうじゃない。やっぱり泥棒は血筋なのかしらね」

「なっ……！ そんな言い方——」

「言い訳は結構ですよ」ぴしやりと花夜が遮った。

「二度とこんなことがないようきっちりけじめをつけないと。多恵の言うように引つ掻き回されても困ります。数日中に咲さんにこちらに来るように伝えなさい。さもなくば——  
N市（こ）から出ておいきなさい」

翌日、眠れぬまま花は学校へ行った。

目が痛い。起きた時目が赤かったので学校でのコンタクトデビューは先送りになった。でも今はそんなことはどうでもよかった。

授業中も休み時間も何をしていても考えてしまう。昨日の塚本家でのことを。

——ママを呼ぶか……それとも出て行くか。

花の前に突き付けられたのは究極の選択だった。人生の岐路、と言ってもいいくらいの。何とかわかってもらおうとしたけれど、結局最後まで誰も花の言うことを信じてはくれなかった。嫌悪と軽蔑に満ちた皆の眼差しに耐えきれなくなり、最後は黙ってしまった。理不尽すぎる要求——でも花には跳ねのける勇気がなかった。勇祐が脅しのように言っていた。『追い出すことなんて簡単なんだ』と。

塚本家は市のあちこちに土地を持っていて、さまざまな地域援助も行っていて威厳のある存在だ。しかも本家といったらその権力は絶大、花を追い出すなんて手の平の埃を払うように容易いだろう。大家の百合子に圧力を掛けるかもしれない。何だって出来るのだ。やっぱり、咲に来てもらうのが一番いいのかもしれない。

一人では手に負えない。さまざまな負の感情に押しつぶされてしまいそうだ。きっと咲なら何とかしてくれる——

昼食にほとんど手をつけないまま、花は席を立った。「どうしたの？」と心配する亜樹たちに「ちよつとおなか痛くて」と嘘をついて食堂を出ると、人気のない校舎裏へ行き携帯の発信ボタンを押した。

『もしもし？ 花あ？』何コールかの後、眠そうな声で咲が出た。

『どうしたの、今学校でしょ？ ていうか昨日何で電話でなかったのお。心配したのよ』



「あ……うん、昨日はちよつと出かけてて……ごめんね、寝てた？」

いいのよお、と咲が笑う。耳をくすぐる優しい響きに胸がきゅつと締めつけられる。

「あ、あのねママ」思い切つて花は切り出した。さあ——言うのだ。そう心の中で自分に呼びかける。でもすぐに次の言葉に詰まり、続かなくなつてしまう。

『ん？ どうしたの、花？』

言えない——花はぎゅつと目をつむつた。助けを求めたい。でも、本当にこれでいいのだろうか。

『花？』それ以上何も言えず黙り込んでいると、咲が柔らかい声で呼んだ。

『無理しなくていいのよ？ もし辛いことがあるなら……帰ってくる？』

込み上げてきたものを、花は震える唇を必死に引き結んで押し殺した。「大丈夫、またかけるね」と気丈なふりをして電話を切る。だがその途端、崩れ落ちるように座り込んだ。

——こんなのは……嫌だ。

両腕を抱え込み、その間に顔を埋める。

咲に話せばきつとすぐに駆けつけてくれる。花を守ってくれる。でも今度は咲が犠牲になつてしまう。——だったら逃げ帰つた方がいい。東京に戻つてもう一度やり直した方が。

でも——それでは何も解決しない。今逃げたら、花は一生無実の罪を着せられたままだ。やり直したつて、すべてがリセットされるわけじゃない。ずっと疑われたままなのだ。

——それじゃ、ダメだ。

自分が正しいと思うなら、自分を信じられるなら、流されちゃダメだ。

あの時だつて、自分の力で一步を踏み出した。そして大切な友達が出来た。かけがえの

ない思い出がたくさん出来た。ここでそれを全部、なくしたくない。それならばあきらめちゃだめだ。立ち向かわなくては。

どちらの道を選んでも、きつと後悔する。ならば、もう一つ道を切り開こう——  
ゆずれない、絶対に。

顔を上げ、雲の流れる青空を見上げる。花の胸の中に一つの決意が生まれた。

学校が終わると花はすぐに校舎を飛び出した。

ありさと話をしようと思っただが彼女はもう帰ってしまったということだった。だったら直接家に行って話すまで。近くまで行けるバスを探そう、運転手さんに聞けば教えてくれるだろう——決意を握りしめ、花は校門を抜けようとした。

「——花ちゃん」

だが門を曲がろうとしたところで突然腕を掴まれた。驚いて引き止めた相手を見上げると——それは星流だった。

「ちよつといい？」

にこりともせずそう言うのと、星流は花の手をぐいっと引いた。後ろから黄色い声が次々と上がる。だがまるで何も聞こえていないかのようにそのまま星流は歩き出した。

「ちよ、ちよつと待って！」 足に力を込め、花は先に進もうとする星流を止める。

「こ、困ります。私これから行くところがあつて——」

「どこへ行くの？ そこまででいいから、少し話せないかな」

「……バス停」と呟くと、星流は手を離し「わかった、行こう」と促した。——気まずい。

でも逃げることも出来ず、花は仕方なく星流の隣に並んだ。

「電話、出てくれないからどうしたんだろうと思って。メールも送ったんだけど」

「……うん、ごめんなさい。返さなくて」

星流の顔が見れない。こんな時に会うなんて——ものすごくタイミングが悪い。

「大事な話があって電話したんだけど。……もしかして避けてた？」

凶星を突かれますます顔が上げられなくなる。妙な緊張感が足元から這い上がってきた。

「あの時ぼったり会ったことが原因だよね。それなら説明させてもらいたいんだけど——」

「あああの、ごめんなさい！」立ち止まり、花は星流に向かって勢いよく頭を下げた。

「電話出なくて、気にかけてやってしまっでごめんなさい！でもこれ以上一緒にいると迷惑になるから、もう構わないで。塚本さんに誤解されたら困ると思うしっ」

「え？ いや、違うんだよ」星流が困ったような声で弁解する。

「塚本さんとはつきあってない。あれは……事情があって一緒にいただけ。デートって言ったのは彼女の冗談だよ」

えっ？と花は顔を上げた。

「あの時はどうしていいかわからなくて変な態度とってごめん。でも全部誤解だから。親同士の接点もあるから彼女とは顔を合わせることが多いけど、ただの友達だよ」

「そ、そうなの？」

つきあってない？ 本当に？ 一気に肩から力が抜ける。歩道のガードレールにもたれてぼっと息をついた花を見て星流がくすくすと笑った。

「やっぱ誤解してたんだ。それで連絡くれなかったわけ？」

「ご、ごめんさい。もしかして……それを話してくれようとしたの……？」

「うん、それもあるけど別の話もあって——って、あれ、バス来ちゃったよ。走る？」

少し先の停留所に滑り込んだバスを星流が指差す。花は迷った。

「あ……うん。あれで行けるかわからないから、一回駅のバス停に行こうと思って」

首を振った花に星流は首を傾げた。

「そうなの？ いったいどこへ行きたいの？」

「すみません、そこで停めて下さい」

大きな門構えの家の前で、星流はタクシーを止めた。後部座席のドアが開く。

「着いたよ。行ってきなよ」とん、と肩を押されて花は隣の星流を見た。

どこに行くのかと星流に訊かれ、花は正直にありさの家に行くのだと話した。すると星流が「それならこっちの方が早い」と言ってタクシーを拾ってくれたのだ。

「あの、ありがとう。……一緒についてきてくれて」

しかも星流と一緒に乗り、ありさの家までの道案内をしてくれた。父親と何度か来ているらしい。

「いいよ、別に。“友達” だろ。ほら、行きなよ」

にこりと微笑まれて、チクリと胸が痛んだ。不思議に思いつつ花はタクシーを降りた。

「あつ、そういうえは大事な話があるって——まだ聞いてないけど」

「いいよ、後で。帰りはどうする？ 待つてよっか？」

「ううん、大丈夫。先に帰って。ありがとう」

「あ、花ちゃん」ドアから離れようとした時、星流が言った。

「何があったのかわからないけど……頑張れ。君の人生は、君だけが決める権利がある」

走り去ったタクシーを見送って、花は小さく頷く。そして荘厳な造りの門を見上げた。

ありさと話をするために花はここへ来た。彼女のことを責めるつもりはない。でもせめて知りたいのだ。彼女があんなことをした理由を。

——あの時塚本さん、一度も私を見なかった。

気まずかったからだろうか。花が本当のことを話すのが怖かったから？ でも顔を伏せて小さくなったあの姿はいつもと別人のようで、それも気になっていた。

門をくぐって庭を抜け玄関の前に着くと、深呼吸をして花はインターホンに手を伸ばした。だがその時、家の中から激しい物音がした。

チャイムを押すのをやめて花は引き戸に手を掛けた。鍵はかかかっていなかった。おそるおそる開けてみるとまた聞こえた。何かが割れるような音。それから争う声。

「やめて……！ やめてよ！」

それがありさの声だと気付いて花は「お邪魔します」と廊下に入った。そして音が聞こえた手前のガラス戸を開けた。

居間であるその部屋の中はめっちゃくちゃだった。畳の上には物が乱雑に散らばっている。倒れたテーブルの向こう側では勇祐となつみが怒声を飛ばし合っていた。

「うるさい、いちいち口応えするな！ 俺はこの家の次期当主だぞ。女は黙ってる！」

「怒鳴らないでよ！ ちょっと意見を言っただけじゃない。あなたってばいつもそう。気

に入らないとすぐに怒って……！」

勇ましくなつみが勇祐に掴みかかる。二人の間に部屋の隅にいたありさが飛び込んだ。

「やめてよ、二人とも！ もうケンカしないで！」

「うるさい、お前は黙ってる！」

勇祐に突き飛ばされありさが畳の上に倒れた。慌てて花は部屋に飛び込んだ。

「つ、塚本さん、大丈夫！？」

起き上がったありさが「あんた」と目を丸くした。勇祐となつみも花に気付いた。

「お前、何でここにいるんだ」

勇祐がこちらに体を向けた。なつみが「ちょっと！」と引き止める。

「やめなさいよ子供に手を上げるのは！」

「なんで止めるんだ。うちの財産を狙うコソ泥だぞ！ かばうのか」

「何言ってるの、大人げない！ お義母さんたちもあなたもちょっと騒ぎすぎよ」

「なんだと——？ そうか、お前」勇祐の顔色が変わった。

「圭祐の子供だからかばうのか。お前、あいつが好きだったもんな」

「はあ？ 何を言ってるのよ」

「とぼけるな。いつもあいつの後くつついてたじゃないか。もしかしてデキてたのか？」

「ふざけないでよ、子供の前で何言ってるの！」

声を張り上げるなつみを鼻で笑い、勇祐はありさと花の方を見た。

「そういえばありさが出来たのは圭祐が出て行ってすぐだったな。もしかして、圭祐の子なんじゃないのか？ 同じ顔した兄弟の子なら父親がどっちだってわかりやしない」

とんでもない言葉に花は啞然とした。なつみも青ざめて声を失っている。「パ、パパ……」とありさがかすれた声を押し出した。

「何言ってるの？ 本気なの？ そんなわけないじゃない。あたしはパパの子でしょ？」  
ねえママ、とありさがなつみに呼びかける。

「当たり前でしょ！ いつもそんな話持ち出して！ 自分が圭祐さんにコンプレックス持っていたからって、言いがかりにもほどがあるわ。ああ、もう嫌！」  
髪を振り乱しなつみが叫んだ。

「もうウンザリよ、あなたには！ 昔からちつとも変ってない。もう耐えられない」  
「なんだ、出て行くっていいのか？ 勝手にしろ！」

言い捨てて勇祐が部屋を出て行こうとする。ありさが後を追いかけた。  
「待ってよパパ！ さっきの冗談でしょ？ 冗談よね」

シャツの袖を掴み必死に揺さぶる。だが勇祐の眼差しは冷たかった。  
「ありさ。お前も行くなら好きにしろ。くだらない話はうんざりだ」

手を振り払い、勇祐が背を向けた。ありさがふらりとよるめき、畳の上にぺたんこ座りこんだ。小さく震えるその細い肩が――花の目に飛び込んだ。

「くだらなくなんかない！」 廊下に出て行こうとした勇祐の背中に向かって花は叫んだ。  
颯爽と立ち上がり、庇うようにありさの前に立つ。勇祐が立ち止り、振り返った。

「大事なことです、くだらなくなんかない……！ 大切な家族に、どうしてそんなこと言うんですか。どうして遠ざけようとするんですか。取り消してください！」

「君には関係ないだろう」 勇祐が苛立った口調で言う。だが花は引かなかった。

「関係ないかもしれないけど、黙っていられます。だって家族って望んで一緒にいるものでしょう。当たり前存在かもしれないけど、一緒にいたいから作るものでしょう。代わりのない特別なものだから、大切なんでしょう。それなのにどうして乱暴に壊そうとするんです？ そんなの間違ってる。失ったら二度と戻らないんだから、傷つけないで！」

無我夢中で花は勇祐に向かって訴えた。——悲しかったのだ、まるで父に言われたような気がして。座り込んだありさが自分のように思えて、熱いものが込み上げた。

勇祐の眼差しが戸惑うように揺れる。その時、後ろでありさが立ち上がった。

「あ……塚本さん！」

止める間もなく部屋を走り出ていく。すぐに花もその後を追った。

玄関を飛び出し、ありさは広い庭の端にある納屋の方へ走って行く。日が暮れて辺りは暗くなり始めていた。足元に気をつけながら花は走った。

ありさは納屋の裏に立っていた。長い髪が夕風をはらんで揺れている。

「……いい親でしょ」背を向けたままありさが言った。

「毎日毎日あんなことばかり。ちよつとしたことで言い争ってケンカして。止めたって聞いてくれない。あたしのことなんて全然眼中にないの」

何を言おうか花は迷った。そうしているとありさが言葉が続けた。

「……バラしに来たの？ 本当はあたしが犯人だって。濡れ衣着せられたんだって」

「そんな……つもりじゃないよ」

「じゃあ何？ 言わないかわりにお金でもたかりにきたの？ ちよつどかわいそうなところも見ちゃったし、いい弱味も握ったしね。誰も知らないことだもの」



「え……誰も知らないの？ 友達にも？」

意外な言葉だった。いつもありさは誰かと一緒にいるから。

「……言えるわけじゃないじゃない、こんなこと。それに言えるような友達なんていない」

「え、だっていつも一緒にいる人たちは」

「あんなの友達じゃないわ」強い口調でありさが言い切った。

「あの子たちはただ、私が地主の娘だから一緒にいるだけ。何かあれば便利だと思ってるんでしょ。口答えもしないし、人形みたい。あんなの友達じゃない」

だが声はじょじょに小さくなっていく。最後は消えそうなほど。いつもの自信に満ちた少女の姿も一緒に消えてしまったようだった。

「じゃあ……ずっと我慢してきたの？」

ずっと一人で？ 誰にも言えず、ああやって小さく震えながら……。

「私……塚本さんのこと責めにきたわけじゃないよ」

ありさのそばに花はゆつくりと近づいた。

「そうじゃないの。ただ……どうしてなのか、理由が知りたくて」

「理由？」潤んで光る瞳でありさがにらみつけてきた。「そんなの決まってる。あんたが大嫌いだからよ！ 同じ顔していきなり現れて、星流先輩とまで仲よくして！ なんなの、なんなの、なんなの！ あんたなんか大嫌い。あんたがきてから全部めちゃくちゃよ！」大嫌い——刃物のような拒絶の言葉が突き刺さる。それでも花はこらえた。

「塚本さん、私……誤解解きたいの。あなたの家族を困らせたいんじゃない。財産なんていらない。今のままでいい。迷惑なら関わらないようにする。でも」

両手を握りしめまっすぐにありさを見つめる。

「私はここから逃げない。下を向くのもやめる。だって私もママも間違ったことはしてないもの。二人で力を合わせて一生懸命生きてきたの。だから逃げないで立ち向かう……！ 告げ口なんて卑怯なことほしくない。でも私は自分に嘘はつかない！ だって、頑張るって自分と約束したんだもの」

急に視界がぼやけた。泣いちゃだめだ——でも胸がいつぱいになっっていく。  
「なによ」ありさの顔が歪んだ。

「何なのよ、あんた。なんでそんなにまっすぐなのよ。これじゃあたしが……バカみたいじゃない。あたしが……かわいそうみたいじゃない」

両手で顔を覆いありさが崩れ落ちた。しゃくりあげるその肩を見て花は気付いた。

自信に満ちて堂々としたありさ。何でも持つていて強いと思ってた。

でも——違わない。同じなのだ、彼女だつて。

傷ついて泣いたりもする。弱いところもある。……自分と同じ。

——本当は……寂しかったんだ。

何も聞かずとも、理由はわかった気がした。蹲っているありさのそばにしゃがみ、その肩に花はそつと手を触れた。「——行こう。塚本さん」

涙で濡れた顔をありさがおおずと上げた。「え……？」

「お父さんとお母さんのところ。ちゃんと——気持ち伝えよう。大切なものはなくしたら戻らない。だからなくしそうな時は……逃げちゃだめなの。それじゃ何も変わらない」

それを花は教えられた。負けるな——その言葉が。誰でもない、自分のためにと。

「絶対に伝わる、塚本さんの気持ち。だから伝えにいこう。今から——変えよう」  
ありさの前に花は手を差し伸べた。取ってくれないかもしれない、でも。自分がもらった小さな勇気をわけてあげられたら。

「……………うん」

呼吸の音かと思うほど小さな声でありさが頷いた。

その指先がぎこちなく上がっていき——やがて花の手にそっと、触れた。

塚本家の門を出て、花はほっと息をついた。

今一度振り返り、ありさのことを思う。

——ちゃんと、言えてるかな……きつと言えてるよね。

預けてくれた手をしっかりと握って花はありさを玄関まで連れて行った。花の中には入らなかった。自分はいない方がいいと思っただのだ。しばらく外にいたが、物音や争う声は聞こえなかった。だから大丈夫だろうと判断して、帰ることにしたのだ。

バス停はあるだろうか。とりあえず大通りまで行こうと決め、花は歩き始めたが……

——え……………？

道路の縁石に——星流が座っていたのだ。驚いて花は駆け寄った。

「星流くん？ どうして……帰ったはずじゃ」

「途中まで行ったんだけど、引き返してきた。暗くなってきたし、それに心配だったから。——用事は終わったの？」

ブレザーのポケットに手を入れたまま星流が立ち上がった。驚きがおさまらないまま、

花は「うん」と頷いた。

「うまくいった？ ……ていう言葉で合ってるのかわからないけど」

星流の口元に小さな笑みが浮かぶ。何も話していないはずなのに、まるですべてわかっているような言い方だった。

「……たぶん。ううん、そうじゃないかも。あはは、よくわからないよね」

結局自分の疑いはまだ晴れないままだ。でも心はすつきりしていた。

別れる前、ありさは小さな声で「ありがとう」と言ってくれた。そして「本当のことを話す」とも……。どうなるかはわからないが、今はそれで十分だと思った。彼女と——初めて気持ちを通じ合った気がしたから。

「そっか。じゃあ帰る？ タクシー呼ぶよ」

携帯を耳に当て星流が歩き出す。後に続きながら花はすっかり暗くなった空を見上げた。

星が近い。今にも手が届きそうだ。まるでプラネタリウムみたい——ビルに囲まれた東京ではこんなに見えない。

大通りまで歩こう、と言われ花は星流の横に並んだ。道路脇の古い外灯が弱々しく点滅を繰り返している。静かな夜道に二つの足音が重なって響いた。

「……あの、ありがとう。色々」

「いいよ、オレが勝手に世話焼いたことだから。気にしないで」

——それでも、うれしいな。

こうして星流の近くにいられるのは。もう二度とこんなことはないと思っていた。でも

手の届く距離でこうして一緒に同じ道を歩いている。……またそばにいてもいいのだ。

「そういえば……話って何？ 大事なことだと言って言ってたよね」

「ああ、うん……」ためらうような返事をし、星流は首を振った。

「……いや、いいんだ。今度にするよ」

どうしたんだろうと不思議に思ったが、今度でいいなら大した話ではないのだろう。あまり深くは考えず花は「わかった」と頷いた。

「一つ訊いていいかな。花ちゃん」

「うん、なに？」

「もし、自分の夢が叶うチャンスがきて、でもそれと引き換えに、したくないことをしなければならなかったり、誰かを傷つければ……どうする？ それでも夢を選ぶ？」

「え？」

星流が見つめてくる。すぐく真剣な眼差しに花はどきりとした。

素直な、ありのままの気持ちでいいのだろうか。少し考え、花は「えっと……」と切り出した。

「そうだな、私は……誰かを犠牲にしてまで何かが欲しいとは思わない。でもそれくらい大切な夢なら、諦めたくもないと思う。だからどちらか一つを選ぶんじゃないって、誰も傷つけないで済む方法はないか頑張ってみる。だってその選択がすべてじゃないでしょう」

今回だってそうだった。押しつけられた選択肢ではなく、花は自分で考え行動した。どちらも自分の望む答えではなかったから。自分の心に嘘をつきたくなかったから。

「そっか。……君ならそう言うと思った」

小さく微笑み、星流は小さな星たちが散りばめられた夜空を見上げた。そして何か決意したようにきゅつと口元を引き締め、再び花を見下ろした。

「ねえ、お腹すかない？」

「へっ？」

「駅の方に戻ったら何か食べにいかうか。もし花ちゃんに予定がないなら」

「な、ないよ！ 予定なんて全然ない！」

思わぬ誘いに一気に舞い上がりながら、花は力いっぱい首を横に振った。「じゃあ決まりだ」と星流は笑い、前を向いた。

——なんだか、まるで夏休みの続きみたい……。

その横顔をそっと見上げながら、花はこれが夢ではないようにと祈った。

——でも、どうしてあんなこと訊いたんだろう。

不思議に思う。けれどすぐに小さな懸念は消え去った。

ただ今は星流との距離を大切にしたい。隣にいられるこの時間が、何よりも今は花にとつて心地よかった。



# やるうぜ!

土本強

Illustration:U35

あらすじ

田尻すなおと中村ひかるは高校一年生。ふとしたきっかけからゲームを作ることになった。次々と巻き起こる難問、社会からの軋轢、そして恋。二人は努力、友情の果てに勝利をつかむことが出来るのか……！（内容には若干の誇張があります。申し訳ありません）



横井ひろこ

今年の春大学を卒業したばかりのびちびち女教師。22歳独身。



田尻すなお

自称「どこにでもいる平凡な高校生」。昔ゲームをやっていたことはあったが最近は無沙汰。



中村ひかる

孤高の眼鏡。古いコンピュータを未だに愛用する不思議なコンピュータマニア。ただし勉強はいまいち。



第四話 ショコラ

その日、その女子生徒は市立中央高校の視聴覚教室の前に立っていた。その前にはもう一人の女子生徒。背は初めの女子生徒に比べて低い。うつむいて顔を赤くしている。

中村 ひかるはその光景を廊下の端から見ていた。背の高い女子生徒の顔は見えない。背の低い方の女子生徒は何かぼそぼそと喋っているのが判るが、何を言っているのかまでは聞き取れない。

中村は無感動に二人の隣を通り過ぎた。目的地は視聴覚教室だ。二人には用はない。「わたし、すみこ様のことが……」

中村にはその声に聞き覚えがあった。ふと目だけで声を発した背の低い女子の顔を追いかけてようとしたところ、勢い余って背の高い方の女子と目が合った。

背の高い方の女子生徒は中村の顔を見るなり、それまで興味なさげにしていた顔を真っ赤にして、一瞬遅れて眉をつり上げた。

「あの、これは……!!」

背の高い方の女子生徒が、背の低い女子生徒の言葉を遮った。そのまま言葉を続けられずにいる間、中村は片手を上げてそれを制した。

「いや、気にせず続けてくれ」

「違うの！」背の高い方の女子生徒は叫んだ。「私は……」

また言葉が途切れる。中村は少しだけ根気よく待ったが、女子生徒が続ける気配はない。

中村は手を挙げたまま二人に背を向けて歩き去ろうとした。

「ちよっと！」背の高い方の女子生徒が挙げていた中村の手をつかんだ。「待って！ 一緒に来て！」

背の高い方の女子生徒は中村を引っ張って走り出した。中村もつられて走る。廊下を走ったなど何年ぶりだろう。

「いいのか？ あの子は」

中村は首だけで振り返って背の低い方の女子生徒を見た。視聴覚教室の前であっけにとられて立っている。

「いいのー！」

背の高い方の女子生徒は振り返りもしなかった。

☆

「あ、中村。いま屋上にでも迎えに行こうかと……」

視聴覚教室には田尻 すなおと、真島 まこが既に来ていた。田尻はいつになく乱暴に開けられた引き戸に振り返って声を発したまま、一瞬固まった。そこにいるはずだった者がいない。正確には、中村も一応いる。が、引き戸を開けたのは中村ではなかった。

「あなたがゲーム製作同好会の会長ね」

引き戸に手をかけたままの背の高い女子生徒が問いかけた。髪は長い。目はつり上がっており、まつげは細くかき込まれている。勢いはあるが怒っているようではない。表情が独特な人間と何ヶ月も過ごしてきた田尻にはそれが判った。

「うん」 田尻は答えたあとで中村を見た。「この方は？」

「知らん」

中村はいろいろなものをあきらめた表情で答えた。小さいシンセサイザーを両手で抱えている。音楽の時間に使ったもののような気がする。

「わたしは、小沢 すみこ」

中村への質問を背の高い女子は横取りして答えた。

「ゲーム製作同好会に入会させてもらいます！」

背の高い女子生徒——小沢は高らかに宣言した。

☆

「えーっと、音楽？」

田尻はあいているパソコンの前に座った小沢に話しかけた。残りの二人もどこからか椅子を持ってきて小沢を囲んで座っている。

「ええ。見せた方がはやいわね」

小沢は机の方に向き直るとシンセサイザーの電源を入れた。いくつかのランプが点灯し、数字が赤くともる。そのままあちこちのボタンを押す。手慣れた動き。

小沢は軽く息を吐くと、左手の小指から順に鍵盤に指を置いていった。

シンセサイザーの薄いスピーカーから聞こえた音はハーブだった。不思議な音階で上がっていき、下がる。また再び上がっていき、下がる。

田尻は息を呑んだ。部屋の温度が一気に数度下がったかのような感覚がある。空気が澄み、何かが張り詰める。

小沢は最後の高い一音を余韻たつぷりに引いてから田尻に向き直った。

「こんな感じよ。どう？」

「どう、って」田尻は答えるのに時間がかかった。「凄いよ。何、今の」

「クリスタル……」

真島がうわごとのようにそう呟いた。思い当たる曲があるらしい。

「でも、小沢」中村は空気に飲まれた頭を振り払うように息をついてから聞いた。「既存の曲ではゲームには使えない」

「判ってるわよ」小沢はこともなげに答えた。「ゲームに合わせて作らないと」

三人は顔を見合わせた。どこかで聞いたような台詞。

「な、何よ」

「あ、いや」田尻は怪訝な顔をした小沢に慌てて答えた。「うん、そうだね。決めないとね」

「どんなゲームなの？」

「ええっと」田尻は再び答えに詰まった。「まだ決まってないんだ」

「あきれた」小沢は大げさに肩で息をついた。「夏休み開けてもう一週間よ。文化祭はもうすぐなのに、何やってたのよ」

「やっぱ、出さなくちゃ、ダメかなあ」

田尻は真島と中村に問いかけた。

真島は黙ってうなずいた。中村は少し考えてから答える。

「出す分にはいいんじゃないのか？ 新作を作るかどうかはともかく」

「何言ってるのよ」小沢は身を乗り出した。「せっかくの機会なんだから作らないとダメに決まってるでしょ」

「あー、やっぱ、そうだよね」田尻は頭をかいた。「いや、ね」

田尻は傍らの机からいくつかのレポート用紙を切り取ったものを取り上げて小沢に見せた。

「何、これ？」

「企画書。今までちょっと勢いで作りすぎたんでちょっとは考えようかなって」

小沢は手書きの企画書を取り上げた。割と達者な絵で仮画面が書かれているものが数枚。それぞれ違うゲームらしい。

「あまりおもしろそうじゃないわね」

小沢は無慈悲にそういった。田尻は頭をかいた。

「だから言っただろ、これダメだって」

中村が田尻に突っ込む。真島も大きくうなずいた。

「あー、ダメなのは判ってるんだけどね」田尻は一瞬宙を見てから続けた。「じゃ、どんなのがいいかなーって。ちょうど悩んでるところ」

「今まではどうしてたの？ この間の格闘ゲームとか」

「あれは勢いで……」そこまで言ってから田尻はやっと小沢の言葉の不自然さに気づいた。

「ちょっと待って、あれ、やったの？」

小沢は一瞬ためらってから答えた。

「ええ。ちょっと、知り合いが買ってた」

「うわー、うれしいなー！」 田尻はいつの間にか立ち上がっていた。「どうだった？」

「凄く、楽しかった、わよ」

小沢は自分を見ている六つの目が輝いていることに圧倒されながら答えた。

「ほら、やっぱり俺たちは勝ったんだよ！」

「ま、あれだけ売れば、うちの生徒が買うことも考えられるな」

中村は知らずに被った言葉に気づかずに小沢を見た。

「小沢から見て、音楽は不満か？」

「そうね」中村の問いに小沢は少し考えてから続ける。「スーパーの店内みたいな音楽。もうちょっとひねりが欲しいわね。声がいいだけになおさら」

「うわ、そうか」田尻はうめいて椅子に座り込んだ。「あれやってるってことはボイス聞いちゃったんだ。恥ずかしいな」

「どの子が好き？」

真島はかつて無いほど熱心に聞いた。普段と調子が違うのに気づいたのは二人だけだったが。

「そうね」小沢は答えた。「やっぱりウォン大人たじんが好きね」

「俺か」

中村はまじめくさって答えた。小沢は赤くなつて否定する。

「中村くんじゃなくて、だからゲームの……」

「うん。判った!」

真島は満面の笑みを浮かべ、そう断言した。

中村と田尻は真島の笑みにあっけにとられた。小沢には何が起こっているのか判らない。

☆

翌日、小沢を除いた三人が持ってきたゲームは、細かな違いを無視するとおおむね同じような内容だった。

少しだけパンする一枚絵の背景の上に複数のキャラクターが乗って、周りからやってくる敵を倒す。基本的には協力しながら先に進む。だが、総合得点で最後の勝敗が決まるため、足を引つ張りすぎると先へ進めず、かといって相手に突出されると負けるので適度なバランスを要求される。

小沢は田尻の手によってさらさらとできあがっていく企画書以上に相談する前に同じ物が出てくる三人に驚いた。

「これ、背景どうするの?」

「3Dで書へ」

中村の言葉に真島は眉を寄せた。

「だめ、間に合わない」

真島は一瞬の間に習得にかかる時間と一枚当たりの作業時間を割り出したらしい。

「いきなりポリゴンは無理だと思っようよー」

「ポリゴン？」

小沢は田尻の言葉を繰り返した。

「ええと、立体？」 田尻にもうまく答えられない。「みたいな感じ」

「じゃあ、背景のデータと構図をこっちで決めて色を置くのはどうだ？」

「構図、わたし、決めていい？」

「わかった。じゃ、それで行こう」

中村は企画書にその旨を書き込んだ。田尻が書いてきた画像表に一枚当たりの時間を真島が書き込む。

「キャラクターはどうする？」

「基本、前回のものを応用するしかないだろうな」

「モンスターは書きたい」

真島が提案した。

「大丈夫？」 田尻は真島を見た。「授業もあるし、一日辺り十枚くらいが限度だよ」

「ん」 真島は答えた。これは否定の意味らしい。「一枚が小さいからもつと行ける。一日二キャラくらい」

「ってことはモンスターは最高で十体か……」

「マスターを十月半ばとすると、 $\alpha$ と $\beta$ は一週間くらいでいいかな」

「わかった。わたし、タイトルとかは書くけど、ユーザーインターフェースは田尻お願い」 小沢は三人の手際にあっけにとられていた。目の前で次から次へと様々なことが決まってい



「私は、何すればいいの？」

三人はふいに疑問を發した小沢のを見た。代表して田尻が答える。

「何ができるの？ それにあわせるけど」

小沢は答えようとして自分が何も答えられないことに気づいた。作曲のまねごとをしたことはある。ピアノも弾ける。でも、一曲を何日かけて書いたかなど気にしたこともない。「……やってみないと判らないわよ」

「ま、そうだねー」田尻は小沢の焦りなど気づかぬように笑って答えた。「まずはやってみようよ。時間配分はその後」

そこに顧問の横井 ひろこが引き戸を開けて入ってきた。

「申請書、持ってきたわよー」

小沢は横井がこんなに晴れやかに笑うのを初めて見た。

「また女の子ですって。ちよつとは男の子も誘いなさいよ」

「いや、誘ってません」

「小沢です。よろしくお願いします」

中村ににやにや顔で話しかける横井を見て小沢は無然とした表情で割り込んだ。

「よろしくね。顧問の横井よ。小沢さんのクラスは授業があるわね」

「はい」小沢は無然とした声をさくさく無視されたことに驚いた。「先生は覚えてるんですか？」

「そりゃ覚えるわよー」横井はコロコロと笑った。「一学期の間授業やってればだいたい生徒の顔と名前は一致するってば」

小沢は横井に感心した。未だに名前を覚えていない先生はたくさんいる。自分が目立つ生徒であるという認識はあったのだが。

「今回はどうするの？」

「あ、今回はですねー」田尻は先ほどまで四人で見えていた企画書を横井に渡した。「小沢が音楽作ってくれるっていうのでちょっと豪華なやつにしました」

「RPGさー」

「そこまでのものじゃないです。ストーリーないし」

「別にストーリーなくてもRPGじゃない？」

「そう、なんですか？」

四人はあっけにとられた。

「RPGって、ロールプレイング、つまり、役を演じるゲームのことをいうのよ。その世界の中で、の役を演じられれば何だってRPGよ」

「戦闘シーンとか、ストーリーとか……」

「無くてもいいの」真島が指折り数えていたのを遮って横井は続けた。「それはたまたま役を演じるのに便利だったからそうなるってだけ。あんなのは日本だけだそうよ」

「先生、あいかわらず詳しいですね」

「まあねー。私もハマってたクチだから」

横井は再びコロコロと笑った。違和感を感じているのは自分だけらしいと小沢はやっと気づいた。

「マルチプレイにこだわるのはあなたたちらしいわ。ネットゲーム？」

やろうぜ！

「いや」中村は眉にしわを寄せた。「それは……」

「今回はなし。また今度。ね、中村！」

慌てて田尻は中村の思考を押しとどめた。たきつけると本当に作ってしまう。時間がいくらあっても足りない。

「ああ」中村は息をついた。「そうだな」

その姿は小沢にはどこか見覚えがあった。

☆

「ちよつと、聞いてもらいたいんだけど」

「何を？」

「なに？ そのおもちゃ」

「ピアノよ。電池で動くの。作曲してきたんだけど、これでいい？」

☆

「デッサンが狂ってる」

「いや、これ計算でレンダリングしたんだが」

「ううん、消失点が変。何となくおかしい」

「画角のせいかな。ちよつと調べてみよう」

☆

「ねえ、何人まで？」

「二人です。キーボードが対応してないから」

「四人までやれるようにしない？ あとチャットも」

「あーもう、中村に変なこと吹き込まないでください！ 中村も検討しない！」

☆

α 版前日。

その日は朝の折り込み広告で駅前ショッピングモールに入っている家電量販店でCDRの束の安売りをしているとの情報を仕入れ、田尻と中村は買い出しに出ることにした。

九月下旬。まだどこもなく夏の暑さが残っている昇降口で田尻は「野暮用を済ませてくる」という中村を待っていた。

ふいに人がかけてくる音が遠くからする。ショートカットの女子生徒だった。左手に持ったハンカチを目に当て、右手にはファンシーな柄の封筒を持っている。田尻は女子生徒を見送った。

「ありや、振られたな」

田尻は女子生徒の目にわずかな涙を認めていた。

「待たせたな」

「え？」

女子生徒が来たのと同じ方向から中村がやってきた。

「え？ え？」

「見たのか？」

「やっぱり、中村？」

「恥ずかしいところ見られちゃったな。あいつは見なかったことにしてやってくれ」

☆

駅前へ向かう道すがら、中村は田尻に事情を語っていた。

「よく女子に告白されるんだ」

「よく?」中村から発されたとは思えない不思議なセリフに田尻は一瞬絶句する。「前にもこんな事が?」

「ああ、夏休み前は二日に一回ぐらい。夏休み明けてもう無いだろうと思ってたが、まだ残っていたとはな」

「はあー」

田尻はどうコメントしていいのか判らなかつた。

「じきに収まるさ。女子生徒の数は有限だしな」

「昔からそうだったの?」

「ああ」中村は遠い目をした。「どこに惚れられてるかさっぱり判らない。ほとぼりが醒めるとだいぶ間が開くが、また思い出したように連続してやってくる。女子は結託してるのかな」

田尻は中村の後悔とあきれと何かが混ざつたような不思議な表情に見入つた。

「つきあたりしないの?」

「なぜ?」中村は心底驚いたように答えた。「つきあう理由がない」

「ほら、別に好きじゃなくても告白されるだけで嬉しいじゃん? 告白されたことなんかないけど」

「それでもない。俺は田尻達と一緒にいる方がいい」

「僕？」

「いやなのか？」

「そうじゃなくて、じゃ、真島とか、小沢とかは？」

「好きだ。当然だろ？」

田尻はのど元まででかかったセリフを慌てて飲み込んだ。じゃ、僕も好き？

答えが容易に予想できるだけに洒落にならない。

☆

その頃、視聴覚教室では真島が一人ポリゴンの背景モデルを元に彩色を続けていた。ゲームに必要なデータはおおむね揃っているが、背景は遊べる最低限なので絵としてのクオリティはまだ高める必要がある。

「あれ、田尻達は？」

引き戸を開けて入って来るなり小沢は真島にそう問いかけた。真島はマウスから手を離さず小沢を見た。

「買い物。今日は戻らない」

「ふーん」

小沢はいつものようにパソコンの前にゴム張りのピアノ鍵盤を広げた。ぎりぎり教室の机に収まるサイズの携帯用ピアノ。普段は丸めて持ち歩いている。毎回音楽室からシンセサイザーを借りるのが面倒になって小沢が家から持ってきた。

パソコンの電源を入れる。起動するまでに少し時間がかかる。ハードディスクのかりかりという音が静かな教室に響く。

「ねえ、ちょっといい？」

小沢の声に真島は手を止めて小沢を見た。小沢の目に真剣な色を認めてマウスから手を離して向き直る。

「真島さんって、中村の何？」

「何？」

真島は首をかしげた。言われている言葉の意味がわからない。

「ほら、仲いいじゃない。横井先生は中村が真島さんのこと拾ったって言うし」

「ううん。わたしの絵を拾ったのは田尻」

話がかみ合っていない。

「もうー！」

小沢は巧妙にバレッタを避けて両手で頭をかきむしった。思ったよりも髪は乱れていない。

「単刀直入に聞くわね」小沢は真島を見つめた。元々身長でもだいぶ高いので座高も高い。

「真島さん、中村の彼女？」

「かのじょ？」

何を言われているのか判らないらしい。

「中村と仲がいいみたいだけど、私取っちゃっても怒らない？」

「かのじょ……」

小沢はいまいち伝わっていないか不安になってきた。

「ほら、田尻とかいるし。別に中村も直接真島さんを気にかけているようじゃないし……」

「かのじよ！」

真島は得心した顔でそう叫ぶとおもむろに立ち上がった。

「え？ え？」

小沢は急に高くなった真島の顔を見上げる形になった。

「ライバル？」

「ええ？」

「強敵と書いて、ともと読む？」

「ええ」 小沢はやつと真島が何を言わんとしているのか判った。「そう、ライバルよ」

「ライバル……」

その響きを真島はしみじみと味わっていた。しばらく黙りこくった上で、口元に大きな笑みを浮かべ、眉をつり上げて真島は片腕をかかげた。

「ライバル！」

「そう、負けないわよ」

小沢も立ち上がった。二人は腕をぶつけた。

☆

「もつと、なんて言うんだっけ、プログレ……みたいな方がよくないか？」

「判った。こんな感じがいい？」

「……うん、そうだな……」

「中村、追加デザインはこうなった。見て」

「……小沢、真島、何も昼休みまで教室にこなくても……」



☆

「ゲームバランス直さないかね。人数多いと簡単すぎるね」

「そうだな……」

「ちよつと、何考えてるの？ いや、何となく判るんだけど……」

「ちよつと見てもらえるか？」

「うわー、見たくないよー」

「だめ！ 中村の苦心の作を見てあげて！」

「見てあげて！」

「君ら、知ってたの……？」

「いいえ、全然！」

☆

視聴覚教室では一つの曲が微妙にずれて流れていた。

音源は四台のパソコン。それぞれの画面では、自分を中心とした世界が広がっていて、ゲーム自体は何となく同期している。

四台とも、マップの中心には大きめのモンスターが暴れていた。格闘ゲームから持ってきたキャラクターはそれぞれ技術を応用しながらモンスターの体力を削っていった。

やがて轟音を立てて倒れるモンスター。

小沢渾身のハーブが響き渡る。

「やったな」

「なぜこういう重大なことをβ直前に言うかなー」

「ねえ」小沢がスタッフロールを横目に見ながら聞いた。「この間から気になってたんだけど、βって何？」

「マイルストーン」田尻は宙を見ながらプロジェクト運営の本に書かれてあることを思いだした。「ええと、日本語では一里塚っていうんだっけ？ この日までにここまでできてるように、というのを決めたものだね」

「βは全機能実装。あとはバグ取りだけという状態だ」

「なのこいつと来たら」田尻は中村の背中をぐりぐりと押した。「どうしてこう、重要なことを後回しにするかな」

「後回しにしたんじゃない」中村は田尻を見据えた。「ゲーム本編は作って、どうやってネットワークで動かすのかをずっと家で探っていた」

「グラフィックとサウンドが揃っていたから何とかなっただよ。もうやらないでよね」  
「考えておく」

中村は立ち上がった。パソコンはすでにシャットダウンがすすんでいる。

「ちよつと先に帰るな」

「野暮用？」

田尻がにやにやしながら聞いた。中村は微笑と共にため息をつく。

「そんなもんだ」

真島と小沢には何のことか判らない。

☆

「あー、やっぱり中村君モテるんだ」

職員室で鍵を横井に渡した田尻は「やっぱり」という聞き捨てならないセリフに気づいた。

「先生も気づいてたんですか」

「そりゃねー。女の子の間では話題だったし」

「どこら辺が」田尻は身を乗り出した。「中村がモテるなら僕も」

「あ、それは無理」横井はさくつと否定した。「中村君は天性のモテ。努力してもああはならないわよ」

「そう……何です、か？」

田尻にはいまいち釈然としない。

「中村君が教室で誰かと話しているところ見たことある？」

「いえ」

夏前に喧嘩をしたとき思い知った。中村は人から話しかけられるまで決して話そうとしない。

「中村君はね、孤高の眼鏡なのよ」

「はあ」

田尻には何のことか判らなかつた。

「オーラが出てるっていうか。中村君、気づいているんでしょうね、やっぱり、自分で」

「ああ、だから自分から話しかけない」

「モテるから孤独って、皮肉よね」

そこまで聞いてからふいに疑問が湧いた。

「中村、教室ではともかく同好会では結構話しますよ」

「そこよねー」横井は指を立てて自分のおでこに当てた。「何で中村君は田尻君になんかについてっちゃったのか」

「さりげなく酷いこと言われています?」

田尻は口の端を引きつらせた。

「あー、そっかー」田尻は我に返った。「そのせいで二人ともやられちゃったのか」

「あら、三角関係?」

「三角というか、なんというか」

田尻は頭をかいた。

☆

「来たぞ」

校舎裏には女子生徒が立っていた。中村には見慣れた光景だった。ただ、今日の女子生徒はいつもと雰囲気が違った。殺気立っている。

「すみこ様を返してください!」

「すみこ様?」

中村には名前が指し示す者が判らなかつた。いわれてみると、小沢がそんな名前だったような気がする。

「返せっっていわれてもな」

「知ってるんです。すみこ様が好感度マックスだつて事。気づいてないんですか?」

不思議な単語、中村の脳裏に昔のゲーム雑誌の攻略の記事がよぎった。

「慶野、もしかしてゲーマーか？」

女子生徒は口を押さえた。いろいろと聞くべきことが去来する。しかし、口から出たのはまったく別の言葉だった。

「すみこ様の曲聞きましたか？」

「聞いてたんじゃないのか、教室で」

「やっぱり！」女子生徒は凄い剣幕で叫んだ。「気づいていたんですね。悪趣味！」

「と、いわれてもな」中村は頭をかいた。「初めて見たときから何となく見た記憶があったんだ。どこで見たかまでは覚えていなかったんだが」

女子生徒——慶野は中村を睨んだまま離さない。中村はため息をついた。

「格好いいよな。小沢の曲。音楽のことはよくわからないけど、あれがあるのとないのじゃ全然違う」

「返してください、私のすみこ様を」

「だからどうしてそうなる」

「中村さんが一言、嫌いだといえ丸く収まるんです」

「いや、小沢のことは好きだぞ」

「異性として？」

「おいおい、じゃあ慶野はどうなんだよ」

「異性として好きです！」

中村は心の中で、おいおいと突っ込んだ。お前、同性だろう。

「じゃ、真島さんはどうなんです？」

「好きに決まってる」

「じゃ、田尻さんは」

「そりゃ」そこまで言っただけで我に返った。「慶野、何を言わせようとしてる？」

「別にー」

慶野はすねたように目をそらした。

☆

校門前で小沢と真島は別れた。だが、学校のすぐ前が家になっている真島が門扉を開けたところで、すでに歩き始めていたはずの小沢が遠くから呼び止めた。

「ん？」

「ねえ、ちよつと、いい？」

「ん」

真島が振り向く。小沢は門扉のところまで駆け寄った。

「前の部活の知り合いに、いいこと聞いたの」

「何？」

「今度の木曜日、中村、誕生日なんだって」

「そう？」

小沢にもだいぶ真島の表情が飲み込めるようになってきた。これは最大限驚いている。

「ねえ、勝負しない？」

「なにを？」

「誕生日のパーティーに呼ぶの。パーティーで告白。負けた方が身を引く」

「でも、田尻は？」

「やっぱり、呼ばなくちゃダメよね」小沢はため息をついた。「四人でやってるのに、一人だけいないなんてのは中村悲しむわよね」

「ん」

多分肯定。

「でも、なんでわたしに？」

「だって、ライバルなんでしょ？ 堂々と勝たないと」

「ん」真島は手をかかげた。「ライバル。強敵と書いてともと読む」

「そうね」

小沢はすっかりおなじみとなったポーズで腕を打ち合わせた。

真島が笑う。小沢も笑う。

☆

翌週、市立中央高校はかなり浮き足立っていた。水曜日から学園祭の準備が行われ、木曜日中には設営を終わらせる必要がある。

前の週からデバッグを行っているが、結局最後までバグが残っていたのはネットワーク周りだった。他の部分はさておき、ネットワークに関しては実際に視聴覚教室で複数人でチェックしないことには再現することができない。ぎりぎりまでデバッグを行う必要がある。

火曜日、視聴覚教室の最後の一台をシャットダウンして荷物を片付けた中村に小沢と真島が話しかけた。

「中村、ちょっといい？」

「ああ」中村は眼鏡を外して目頭を押さえていた。前の晩も徹夜だったらしい。「どうした？」

「あさつての木曜日なんだけど、お誕生日でしょ？」

「あー？」中村は慌ててカレンダーを頭の中で開いた。そう言われてみればそんな気もする。「そうかもしれないな」

「お誕生日おめでとう」

気の早いセリフを真島が言った。小沢はさくさく無視して続ける。

「木曜日、ささやかだけど誕生パーティを開こうと思って。プレゼントも用意するから」

「田尻も来るね？」

想定外の斜め上の展開を見せていた女性二人の話を口を開けて聞いていた田尻に真島が問いかけた。

「そりゃ、いくけどさ……」

田尻は歯切れ悪く言って中村を見た。

中村はしばらく目を瞬かせたあとで答えた。

「何言ってるんだ、小沢、真島」

中村はまじめな顔をして答えた。

「木曜日は修羅場だよ。プログラム以外することなんかない」





# From · N

番棚葵

Illustration: 伊藤由希

## あらすじ

幼なじみの来夢から、N市の名物作成を持ちかけられる隆也。彼女は地元のN市をこよなく愛しており、町興しをしたいと思っているのだ。N市が嫌いな隆也は、しかし彼女に仕方なく協力する。ミステリースポットを名物にしようと肝試しを行う二人だが、本物の怪奇現象が起き、諦めるのだった。

谷川来夢



地元をこよなく愛する少女。隆也の幼なじみ。元気はいいが、思慮は浅い。

新井隆也



地元嫌気がさしている少年。進学校に通っている。意外と流されやすい。

第四話 休日のしつとダウン

生まれ故郷であるN市を嫌うようになったのは、いつからのことだったか。彼がそのことに思いを馳せるたび、小学生の頃に仲の良かった友人を一人思い出す。

その友人は親の事情で、より栄えた市街へと引っ越したのであった。そして、しばらくしてから一度N市に帰ってきて、彼にこう言ってみせたのだ。

「ここって、やっぱりなにかと不便だよな。向こうに比べると、コンビニとか自販機とか少ない。田舎だよ、田舎」

その時には、同じく都会に行ったことのある彼にとつて、N市の存在は若干のコンプレックスになっていた。それが友人の言葉で、駄目押しされたのである。過剰な劣等感、嫌悪感へと変わる。彼がN市に愛想を尽かすのに、そう時間はかからなかった。

気がつけば彼は、やがて自分も都会に進出すべく、勉学の道を選んでいった。

「……選んでいたはずんだけどな」

隆也はつぶやくと、はあ、と机の前で大きなため息を吐いた。短く貴重な秋の夕日が、

自室の窓から差しこんで、その直線上にある本棚と絨毯の一部、そして彼自身を照らしている。無地の長袖のシャツと、やや値の張ったジーンズが、セピア色に染まっていた。

彼の手には数枚のプリントが握られていて、そこに鮮やかな赤のインクで、楕円形に歪んだ丸や、レ点に似た×印が書かれてある。思ったより、レ点の数が多し。

隆也が通っている私立の進学校、その実力テストの結果であった。

彼はそれを見てから、もう一度息を吐くことにした。思ったより動揺しているのか、室内に誰もいないのに、独り言が勝手に口をついてくる。

「まずいぞ、これはまずい。点が悪いとか、そういうレベルじゃない。明らかに、俺の学力そのものが低下している。夏休み前は、こんな点数取らなかったのに」

「一体、どうして？」とは続けなかった。心当たりがあるのだ。

「やっぱり、原因は……」

彼はつぶやいたが、これ以上そのことを気にしていても仕方ないと思い、気分転換に愛用のPCを起ち上げた。インターネットで情報を見ようと思ったのだ。

適当にネットサーフィンを続けていると、ふとプロフィールを紹介するサイトで、コスチュームプレイを趣味とするコミュニティに遭遇する。ライトな「オタク」を名乗る人々と、海外のコスチュームプレイヤーが作り上げたコミュニティで、規模も結構大きい。似たようなコミュニティを合わせれば、相当な人数がネットを利用しているようだ。

自作衣装を着た写真を公開している者もいる。現実離れた衣装を身にまとう彼らは、にこやかに笑い、とても楽しそうだ。

隆也は何となく気になって、コスプレに関するニュースを追いかけてみた。すると驚い

たことに、アメリカのロスアンゼルスでコスプレの大会が開かれ、なおかつそれに世界的に有名なハリウッドスターも数名参加したことで、コスプレは特に海外で今静かなブームを呼んでいるのだという。

タンクトップとアーミーパンツの兵士に、ラバースーツを着込んだ超能力者、果てはファンタジー世界の戦士まで。自分が出演した映画のコスチュームプレイヤー―それをコスプレと呼ぶのかはなはだ疑問だが―をするスター達が、笑顔で写真に写っているのが印象的だった。

「いいな。こういう奴らって、悩みとか少ないように見えるもんな」

ため息と共にそこはかとなく暴言を吐く隆也は、やはり下降した成績のことが気になって、仕方ないのであった。

そんな時である。

部屋のドアがノックされた。扉越してくぐもった声が、それでも持ち主の明るさを象徴するように、威勢良く響く。

「隆くん、いる？」

「あ、ああ。いるぞ」

隆也は驚いて答えた。声の主が誰かはわかっている。お隣の少女にして幼なじみの来夢だ。ご近所さんの気安さから、また勝手に家に入ってきたらしい。それはいいのだが、彼女の侵入に気づかないほど成績のことを考えていたのかと思ひ、隆也は少し疲れを感じた。

しかし、彼のそんな感慨を知るよしもなく、扉は開かれた。入り口に立っているのは、

ショートカットの元気そうな少女だった。ワンピースの上に、パーカーを羽織っている。くりくりとした大きな目を隆也に向けて、片手を挙げてみせた。

「こんにちは！」

「ああ、こんにちは」

対する隆也は冷淡であった。不機嫌な声で応じると、こつそりと舌打ちをする。実力テストの結果を思い出したのだ。彼女だけが悪いとは言いつれないが、彼の成績低下の原因は、八割くらい来夢にあるのだ。

しかし、隆也の微妙な空気にも気づかないものか、来夢はにこにここと笑顔を浮かべたまま彼に近づくと、猫なで声でこう言った。

「ねえ、隆くん。お願いがあるんだけど……」

「断る」

素早く隆也は答えてから、真剣な表情で人差し指を来夢に突きつけた。

「どうせまた、町興しのために名物探しを手伝って言うんだらう？」

「うん」

「そのせいで俺は、今ピンチを迎えているんだ。これ以上つき合ってられるか！」

隆也は叫ぶと、プリントを来夢に突きつけてみせた。来夢は目を丸くすると、

「わ、すごい。隆くん、全部七十点以上取れるんだ」

「前は平均点がさらに十点以上上回っていたんだよ！それが、いつの間にかこの体たらくだ。それというのも、夏休み中お前につき合って、名物探しをやっていたから！」

そうなのである。地元を愛する来夢に無理矢理引き込まれ、N市が嫌いな隆也は名物探

しを手伝わされていたのだ。しかも夏休みで来夢が暇をもてあましていたせいとか、心霊現象が起きそうなミステリースポットの開拓を皮切りに、主人があんパンしか作らないことで有名なパン屋、一度マイナーな雑誌に取り上げられたことのある寂れた旅館、果ては蛍の群生地など、一ヶ月以内で数個以上の名物を探すはめになった。

これだけ急ピッチで作業を進めていけば、もちろん他のことがおろそかになる。隆也の場合はそれが勉強だったのだ。かくして、今回の実力テストの点数につながるわけである。隆也はそれらすべてのことを来夢に説明し終えると、

「いいか、しばらくの間俺は勉強に徹する。名物探しは手伝えない。というか、もともとイヤだって言ってるのを、お前の顔を立てて無理矢理手伝ってやってたんだからな。とにかく、今回くらいは自分一人でやれ」

「あう」

来夢は心細そうにうめいたが、さすがに隆也の目が真剣なものだと感じ取ったのか、それ以上食い下がりはしなかった。さすがごと、部屋の入り口へと戻る。

「ごめん、隆くん。そんなつもりはなかったの……今回は私一人で何とかするから、気にしないで勉強しててね」

「当然だし、そのつもりだと言ってるだろ」

ドライな隆也の返答に、来夢はもう一度「あう」とうめいた。

と、彼女は振り返ると、少し真剣な目で隆也の方を見つめる。

「……なんだよ？」

「ううん。隆くん、勉強好きだなんて思って」

「別に好きなわけじゃない。ただ、都会のいい大学に入るには学力がいるんだ」  
「そう」

来夢がつぶやく。彼女にしては、やや小さく、か細い声だった。そこに含まれる感情がどういったものか、隆也には想像しかねた。ただ、どこか寂しうではある。

ふと隆也は、彼女が町興しの理由の一つに、自分を引き留めることもあると言っていたのを思い出した。N市が賑やかになれば、隆也もここに留まってくれるのではないかと。自分は毎度、それを無下にした発言ばかりしている。考えてみれば、酷い話かもしれない。だが、それでも自分はN市を出るつもりなのだ。どうして？　こんな田舎にいつまでもいられないから。いたくないから。

(本当にそうか?)

脳裏に一瞬、そんな自身の声がよぎって、隆也は驚いた。首を軽く振り、かき消そうとする。その疑問は、持つてはならないものだ。何となくそんな気がする。

が、それよりもいち早く、来夢の言葉が響いた。

「ねえ、隆くん」

「なんだよ？」

「やっぱりN市を出るつもりなの？」

「……当たり前だろ、ずっとそうだって言ってるじゃないか」

「そう」

つぶやくなり、来夢は部屋を出た。声には相変わらず覇気がなかった。



彼女が開きっぱなしにした扉を、隆也はぼんやりと見つめ続けた。いつの間にか実力テストの結果は気にならなくなっていたが、それでも彼は心に誓っていた。

「今回は、絶対に力を貸さないぞ。絶対にだ」

いつもなら自信を持ってないその言葉を、巖の精神で断言と為した。

○

来夢を追い払ってから数日の間、隆也は極力彼女に会わないことにしていた。顔を合わせる情が動いて、また手伝ってしまうことになりかねないからである。

「俺は何かと、あいつに甘いところがあるからな」

これが目下の所、彼が抱く来夢に対する感情への見解であった。だから来夢に会うのを避けることで、不思議と胸の中がもやもやするのは、彼女を案じる自分の優しさなのだろうと隆也は思っていた。

そんなある日の日曜日。隆也は駅周辺にある、N市の中でも比較的大きな町に出かけていた。家からだど徒歩で数十分かかる距離だ。今回はバスを利用した。

目的はやや大きめな雑貨屋においてある、日用品である。それを買収込み、時間的にちょうど人が来ない時期にあるのか、人気のない駅前のロータリーに向かった。

そこにあるバス停で、バスを待ちつつ佇んでいると、

「へえ、そうなんだ。格好いいね、三上君って」

「ふふ、照れるな。よかったら一度、家に来てよ」

「うん、ぜひお邪魔させて！」

背後で年頃の男女の声がした。会話の内容から言って、かなり仲がいいらしい。それは結構だが、天下の往来をイチャイチャしながら歩くのはいかがなものか。

(まったく、どこのバカツプルだ?)

隆也は心中でつぶやくと、ふと気になってこっさり後ろを振り返ってみた。

瞬間、全身が硬直する。

「え」

絞り出すような声でうめく彼の前、数メートル向こう側を、予想通りに少女と少年が歩いてた。そして予想外なことに、そのうち一人は来夢だったのだ。

彼女はこちらに気づいていない。気づかないほど、隣の少年に対して屈託のない笑みを振りまいている。少年の方もまんざらではなさそうで、どこか得意げにその笑顔を受け止めていた。

隆也はとりあえず、慌てて顔を隠すように前方に向き直った。反射的に取った行動だが、何だか虚しくなってきた。

(な、なにやってるんだ俺は。何も後ろめたいことはないのに)

そんなことを考えながらも、後ろを振り返ることはできない。ただ、楽しそうな会話が、少しずつ遠ざかっていく。

「三上君ってば、面白いよね」

「は、谷川さんほどじゃないと思うけど」

「えー、そんなことないよ」

その談笑を耳にしながら、隆也は釈然としない気分で立ちつくす。

（誰なんだよ、そいつ。三上つて。どうして来夢が、あんなに楽しそうに話してるんだよ。いや、あいつは元から明るいけど、それでも今のは親しすぎるだろ……くそ、意味がわからねえ。なんだよ、どうしてあいつはあんなに嬉しそうなんだよ）

自分でも、言いがかりに近いと思いつつも、隆也は暗い思考に走らずにはいられなかった。それは彼の意識を、体ごとその場に金縛りにし、

「兄ちゃん。乗っていかないのか、おい？」

ついにはバスを一台分、見送らせししまうのであった。

家に帰ってから、隆也は机の前で暗澹たる気分であった。彼が納得できないのは、三上と呼ばれる少年と親しげにしていた来夢の姿もだが、それを見ただけでここまで落ち込んでいる自分自身もそうであった。

冷静に考えれば、何もおかしいことはないはずなのである。来夢ほど屈託のない少女なら、異性同性に関わらず仲良くすることに抵抗はないだろう。だから、あれはいつもの来夢の姿なのだ。

それなのに、隆也は衝撃を受けていた。それは一種の不安でもあった。来夢とあの三上という奴がつき合っていたら、どうしようかという――

「……不安？」

ぼそり、とつぶやき、隆也は首を傾げた。次の瞬間、顔を赤くして首を振る。誰にというわけでもないが、大声を出して否定した。

「いやいやいや、おかしいだろ！ どうして俺が、あいつの人間関係まで気にしなくちゃいけないんだよ！ あいつが誰とつき合っているかというと、勝手だろ……大体俺は」

いずれ、N市から出ていくのだから。

そこまで思考を進めた時、隆也は今さらながら気がついた。

それは、来夢とも別れるということだと。彼はため息を吐くと、椅子から降りてベッドに仰向けに寝転がった。蛍光灯がやけに明るく見える。うざったいくらいに。

（そもそも、あいつが悪いんだ。ずっと俺に頼り切りで、思わせぶりなことも何回か言っておいて。結局、他に好きな奴がいるとか。何だよ、俺をからかって楽しんだのかよ）

毒つけば毒つくほど、しかし隆也は認めるしかなかった。自分が、来夢のことをはっきりと意識している。

そんな時、扉がノックされたかと思うと、母親が声をかけてきた。

「ちよつと、隆也。さつきから呼んでるのに、いないの？」

「え、なに？」

「やっぱりいるんじゃない。来夢ちゃんが来てるわよ」

そして有無を言わずドアが開き、歩き去る母親と、相変わらずの笑みを浮かべる来夢の姿が、隆也の目に映った。

「で、何の用だよ」

いつも以上につんけんどんに、隆也は来夢に尋ねた。今まで彼女のことを考えていたの

が、気恥ずかしいせいである。もちろん、昼間の男子生徒の一件も考慮にあつた。

しかしそんなことを知らない来夢は、空気も読まず相変わらずの笑顔を浮かべると、  
「えへへ。隆くん、次の祝日は暇？」

三日後にある勤労感謝の日のことらしい。特に用事はないが、隆也は少し警戒した。来夢に対する感情はさておくとして、彼女のこの笑みは何か企んでいる顔だ。

「何だ、俺に何かさせたいのか？」

「うん」

悪びれもせず、来夢はうなずくと、細くて白い指を一本立てて言葉を続けた。

「あのね、いい名物が見つかりそうなの。それで、隆くんにもやっぱり見て欲しいなと思つて。私一人じゃ、色々足りないとところがあるかもしれないし」

「また、それかよ。俺は今回手伝わないって言っただろ」

多少うんざりしながらも、心のどこかでほっとしている隆也であつた。やはり自分が頼られていたということに、安堵したのかもしれない。

しかし、その心の小康状態は、次の来夢の言葉を聞いた瞬間に崩れた。

「大丈夫、絶対に手間は取らせないから。隆くんは確認だけしてくれればいいの。今ね、クラスの友達に手伝わってもらってるから。三上君って言って……」

一瞬だけ。隆也の目の前が白くなる。彼の頭に、多量の血液が送り込まれた。

気がつけば、彼は荒々しい声で叫んでいた。

「じゃあ、そいつに全部やってもらえばいいだろっ！」

「きやあっ？」

あまりの剣幕にたじろいだか、来夢が尻餅をつく。それを見た隆也は、自分の態度に狼狽と後悔を覚えたが、胸に渦巻く黒い感情が来夢に対する謝罪を許さなかった。

腕を組んでそっぽを向くと、

「俺は、成績が大事なんだ！ これ以上下げたくないんだよ！ それに何度も言っているはずだ、N市なんて大嫌いだってな！ もうこれ以上、お前の遊びにつき合ってもらえない。やりたきゃ自分か、そのクラスメートに手伝ってもらえ！」

「隆くん……？」

呆然と来夢がつぶやくが、取り合わない。彼女と視線を合わせないようにする。きっとこれが、互いにとつていい方法なのだろうから。

しかし。隆也は内心ぎよつとするはめに陥った。来夢の声のせいである。

「うん……ごめん。私、わがままだったね」

(えっ?)

「もう、迷惑かけないから。それじゃ」

そして去っていく足音。彼女の寂しそうな声、悲しそうな声はこの間聞いたし、今までにも何回か聞いたような気がする。

しかし、かすれたようなそれは、一体いつから耳にしていなかったのだろうか。

「……あいつ、今泣いていたのか？」

まさかと思いつつも、彼女のいない空間をいつまでも凝視し、動くことのできない隆也なのであった。

○

翌日の放課後。制服から着替えた隆也は、来夢の家の前まで来ていた。さすがに昨日の態度は、自分でも大人げなかったと反省したのである。

(とにかく、一度謝らないとな)

彼はそう決め、そしてチャイムに手をのばす。が、音が鳴ってしばらくしても誰も出なかった。

「何だよ、来夢の奴出かけてるのか？」

それとも、自分とはもう会いたくないと考えているのだろうか。そう思い当たり、隆也は首をのばして、来夢の部屋の方を見ようとした。窓から彼女が見てるのではないかと考えたのだ。

その時である。

「誰だ？ 怪しい奴め」

そう言われて、びくつと肩をすくめた。すわ、警察官にでも声をかけられたのかと思っただのである。確かに今の自分は変質者に見えても仕方ない、慌てて言い訳しようと振り返ると、そこには私服を着た一人の少年が立っていた。

来夢と話していた、三上某である。

「あ……あんたは」

「あれ、君は」

三上少年はそうつぶやくと、まじまじと隆也を見つめた。そして、合点がいったという

ように笑う。

「ああ、そうか。君が新井隆也君だね」

「え！ どうして俺のを知ってるんだ？」

「谷川さんから何度も聞いたよ。とても頼りになるお隣さんがいるって。携帯で撮った写真も見せてもらったからね……ふむふむ、そうか君なのか」

意味ありげにうなずくと、ふと深刻そうに眉を寄せて、三上は改めて隆也を見た。

「ちょうど良かった、君になら頼めるかもしれない。谷川さんはどうも様子がおかしいみたいだし」

「は？」

「町興しについてだよ。話を聞いてくれないかな」

その申し出に、隆也はきよとんと目を瞬かせた。

隆也は、とりあえず自分の部屋に三上少年を通すと、インスタントのコーヒーを入れて運んできた。「ありがとう」と彼が一口すすめるのを見計らってから、本題を切り出す。

「で、どういうことなんだ？ 俺に手伝って欲しいって。何を手伝って欲しいんだ」

「あれ、谷川さんから聞いてないの？」

三上は意外そうに言うてから、持っていた鞆から一冊のパンフレットを取り出した。そのまま隆也に手渡す。

「なんだこれ……『三上工房』？」

「うん、家のパンフ。我が家は代々、職人をやっているんだ」



そう言って、得意そうに三上は胸を張った。なんでも彼の家では、金属を加工して工芸品を作る仕事を生業としているのだという。生活用品も請け負うが、それだけでは生計が立たないので、土産物なんかも作っているらしい。

「僕もその跡を継ぐため、一生懸命修行してるんだけど。でもほら、やっぱりそういう昔ながらの工芸品は、今の時代じゃ廃れつつあってさ。学校でそのことを愚痴ってたら、ちょうど谷川さんが聞きつけたらしくて」

「……ひよつとして、その工芸品を名物にしようと言ってきた？」

「うん。僕としても家の宣伝を手伝ってくれるのはありがたいからね。すぐに飛びついたよ。で、今まで何かと打ち合わせしてきたんだけど」

今日は来夢の様子がおかしかったので、話も出来なかったのだという。具体的にいうと、放心状態にあったそうだった。

「彼女、何かあったの？ 元気の塊みたいだったのが、嘘のようにしおれてたけど」

「あ、いや……」

心当たりはもちろんあるのだが、その前に隆也は三上に確認しておきたいことがあった。

「えっと、三上だっけ？ あんたと来夢はずっと打ち合わせするために、一緒に行動していたってことか？ えっと、その……つき合ってるとかじゃなくて？」

その言葉に、三上はぼかんと彼の顔を見つめた。次の瞬間には、弾けたように笑う。

「違うよ、そんなわけではない！ 僕には他人の彼女を取る趣味はないよ！」

「はあ？ 他人のって、あいつもう誰かときき合ってるのかっ？」

「え？ 谷川さんって新井君とつき合ってるんじゃないの？」

一瞬の沈黙。隆也は呆然と、言葉を返した。

「……いや、つき合っていないけど」

すると、三上は驚きと呆れをミックスした表情で、それを迎え撃ってきた。

「え、嘘でしょ。あんなに好かれてるのに、つき合っていないの？ しかも、友達付き合いは長いのに。うわ、もったいない。僕が君だったら、自分で指輪作って渡してるよ」

最後は金属工芸職人なりのジョークなのか、くすくすと笑う。だが、隆也にとっては、今のセリフは笑い事ではなかった。特に前半、聞き逃せないものがある。

「いや、ちょっと待て。来夢に好かれてる？ 俺が？」

「そりやそうでしょ。耳にタコができるくらい、君のことは聞かされたよ。一発でわかったね、この子はその隆くんとかいうのが好きなんだって……それに君だって、谷川さんのことが好きなんでしょう？」

「ば、バカ言うな。そんなことは……」

「じゃあ、どうして僕と谷川さんがつき合ってるかどうか聞いたのさ」

「ぐ」

相手の言葉が正論なため、隆也は言葉に詰まって何も言い返せなくなった。同時に、三上の言葉に安堵している自分がいるから、嫌になっってしまう。このままでは、認めざるを得ない。今まで蓋して押さえつけていた感情を。

だが、彼はその蓋を開ける前に、話題を変えるためにも三上に向かってこう言った。

「そ、それで。俺に頼みたいことって何なんだよ？ 町興しについてって言ってたけど」

「ああ、そうだった」

三上は両手を叩くと、少し渋い表情をこしらえる。

「実はさ、谷川さんと色々と名物にたり得る工芸品を作るようにアイデアを出していたんだけど、どうにも難しくてさ。若者向けにシルバーアクセサリーとか作ってみても、今一ピンと来ないし。どこにでもあるからね、そういうの」

「まあ、そりゃそうだな」

「そういうわけで、一度君に見てもらって意見を聞こうってことになったんだ」

「何じゃい、そりゃー！」

結局来夢がしたことは、金属工芸品を名物の候補に定めただけである。後は隆也に任せようという腹らしい。ほとんど彼が名物を作ろうとしているようなものである。

「あいつ、昨日妙にしおらしいと思っていたら、最初から全部俺に投げるつもりだったんだな。まったく、太え奴だ！」

いきり立つ彼を見て、三上は感心したように首を傾げる。

「新井君、器用だね」

「は、何が？」

「嬉しそうな顔でそこまで怒る奴、初めて見たよ」

「ほっとけ」

隆也はばつが悪そうにうめいた。どうも目の前の少年は、眼力が鋭いらしい。職人の卵だけはある。

それにしても。彼はふと、軽くなったはずの胸が急に重くなるのを感じた。来夢に頼ら

れていたからと喜ぶのはいいが、自分はその来夢に酷いことをしてしまったのだ。勝手に三上との仲を邪推して、一方的に切れて、彼女を邪険に扱った。

その理由は、いたってシンプルな感情だ。シンプルすぎて、幼稚とも言える。

(……やっぱり俺は、あいつのこと)

その先は、あえて踏み込まないようにする。どこか素直に認めたくないという気持ちもあるのだが、それ以上に今は、他に考えなくてはならないことがあった。

「おい、三上」

「何だい？」

「俺は、N市が嫌いなんだ。こんな田舎な町、不便なだけだしな。よって、その名物を考えてやる義理はない」

三上の表情が落胆しかける、その前に。彼はこう付け加えた。

「だから……今回だけ特別だ。特別に名物を考えてやる。いいか、今回だけだからな」

毎回、口になっている言葉を。それは普段、彼にとつてもつとも親しい少女にかけている言葉であり、今も隆也はその言葉を三上に宣言したつもりはなかった。

もちろん、そのことを知らないであろうが、しかし三上は嬉しそうに笑うと、

「うん、お願いするよ」

頼もしそうに、隆也のを見たのであった。

とりあえず、二人は三上工房へと向かうことにした。どんな作品があるのか見てみたいと、隆也が申し出たからである。

駅から少し歩いたところにある、やや古びた商店街。少ない観光客目当てなのか、土産物屋などがちらほら置いてある。そこからさらに外れた場所に、ぽつんと置かれているのが、三上家の家屋と一体化した工房であった。

なお、ここまで歩いてきて隆也は一つ納得した。昨日、来夢と三上が駅前を並んで歩いたのは、この工房に向かうためなのだと。

「言っちゃ悪いが、辺鄙な場所にあるんだな」

「おかげで学校に通うのが大変だね」

隆也の率直な意見に、三上は気分を害した風もなく、工房のガラス戸を開けた。中はコンクリートを敷いた二十畳ほどの空間で、周囲に金属加工用の機械が並んでいる。今は終業時間なのか、作動してはいないが。

「いつもはこういうのを作ってるんだよ」

そう言って三上が見せてくれたのは、アクセサリーや、古めかしい鉄器、金属を加工して作った玩具など。他には土産物だけでなく、日用品なども作っているようだ。

「ふうん」

隆也はつぶやくと、それらの土産物をためつすがめつした。確かにこういうものは土産物として適切だろうが、どうもしっくり来ない。

「こういうのって、よその土産物屋でも扱ってるんだろ？」

「まあね。だからそんなに珍しいものでもないんだよ」

つまり、話題を呼ぶほどではない。故に宣伝しにくい。名物なのだから、それこそ目玉になるような商品を考えなければならぬのだ。

(まあ、そんな商品、簡単に思いつけたら苦労がないわな)

隆也は心中つぶやきながら、今度は鎧兜を着込んだ五月人形を見た。本当に手広く扱っているようだ。ただし人形は、当然ながら違う細工師が作ったもののようなのだが。

「これって、周りの鎧とかをここで作ったのか」

「そうだよ。その刀なんか、よくできてるでしょ」

人差し指と親指で柄をつまみ、小さな鞘から小さな刀を抜き出して、隆也は感心したようにうなずいた。そして、驚いたように三上を振り返る。

「まさか、これ作ったのお前なのか？」

「あ、うん。刀身だけだけどね。鞘とかの細かい装飾は、僕にはまだ無理だから」

恥ずかしそうに三上が答える。自分がまだ、職人として未熟であることを恥じているのだろう。しかし、それだけでも隆也にとっては衝撃的だった。

「へえ。本当にお前、職人やろうとしているんだな」

「まあね。小さい頃は、親に強要されてたからすぐく嫌だったんだけど……慣れると結構楽しいものなんだよ」

「……そういうものか？」

未だにN市をコンプレックスに思う隆也には、その感情は理解できない。

しかし三上は誇らしげだった。隆也が抜き出した刀を指さすと、

「それだって、小さいから装飾は無理だけど。もっと大きいものだったら、僕にだって装

飾はできるんだ。ほら、この刀型のキーホルダーの飾りとか、僕が作ったんだよ」

「へえ」

「後は、あそこにある大きな五月人形も僕が作ったんだ。ちよつと飾りがシンプルだけだね。子供なら着用できるよ」

そう言つて三上が指さす先には、確かに子供サイズの鎧兜が飾つてあつた。どうやら商品ではなく、趣味で作つたようだ。

「あれ、全部金属でできてるのか？」

「まさか。合成樹脂で作つた型に、金属箔を貼り付けていつたんだよ。うちではそういうものも作つてるからね。修行の一環だつて言つて、無理に分けてもらつちやつた」

うーむ、と隆也はうなつた。まだ半人前なのだろうが、それでも三上はしっかりと職人をしてゐる。少なくとも、自分にこんなまねごととはできない。同じ歳なのに。

(それにしても、鎧に飾り付けか)

これらを見てゐるうちに、何かが胸の中に引っかかりそうな気がしてきた。ごく最近、この二つに縁がある何かを見たような記憶があるのだが、思い出せない。

「ところでさ、新井君」

「何だ？」

「谷川さんは、打ち合わせに入れなくていいの？ 君がゐるのなら、少しは元気が出ると思うんだけど」

「いいや、あいつは入れない」

隆也は三上の間に、手を振つて拒んだ。それは、来夢を邪険にしているからではない。

むしろ、彼なりに彼女のことを思つての行為なのである。こんな行為、自己満足にしかないかもしれないが。

(ん？ 自己満足？)

隆也は少し考え込んだ。それに近しい行為をしていた人間を、最近どこかで見たことがある気がする。それに鑑、アクセサリー。

思い出した。

「ああ、そうか」

「どうしたの、新井君？」

「一つ思い出したことがあるんだ。しかしこれだけじゃ、話題は呼べない……」

それから、三上をしげしげと見つめると、

「お前、本当に将来この仕事に就くつもりなのか？」

「この仕事じゃなきゃ、食つていけない自信はあるよ」

「なるほどな」

うんうんとうなずいて、隆也は三上の肩に手を置いた。

「名物が二つ決まった」

「え、二つも？」

「ああ。そのうち一つは………お前だ」

「えええっ？」

三上は素っ頓狂な声を上げた。



○

来夢にも自覚はあった。

隆也を無理矢理、自分のわがままにつき合わせているという自覚が。

しかも彼は散々と言っているのだ。自分はN市は嫌いなのだと。しかし、来夢にはそれをそのままにしておきたくない理由があったのだ。だから、我田引水の自覚はあっても、彼を名物作りに参加させたかった。

「でも、怒るよね……普通」

とある日曜日の、その昼下がり。彼女は自室のベッドに仰向けになりながら、ため息を吐いていた。少女らしい、柔らかく軽い色彩で彩られた部屋には、机や本棚やテレビやゲーム機が並び、彼女の頭の隣には窓があつて、カーテンとガラス板を開けば隆也の部屋が見えるはずだった。

しかし、今はその両方を閉めている。万が一彼と顔を合わせると、気まずいからだ。来夢はこの間、彼を頼ろうとしてぴしゃりと怒られた。それが自分が彼に甘えすぎたせいだと、彼女は反省していた。

例えばどんなに自分を省みようと、過去は変えられないのだが。

来夢は再び嘆息した。自戒とは言え、かれこれ二週間も隆也に会っていないのである。寂しいことは寂しい。いや、寂しいどころか、胸が締め付けられそうさ。

「隆くん、どうしてるかな」

いつもの明るい口調も、元気な声も、今はなりを潜めている。来夢は一人の少女だった。

儂く、今にも壊れそうな。隆也に見せたことのない彼女が、ベッドに寝そべっていた。

そんな時である。彼女の部屋の扉がノックされたのは。

「はい？」

今、家には母親くらいしかいない。そう思っただけの返事だった。だから、扉を開けて隆也が入ってきた時は、来夢は心底驚いた。

「た、た、隆くんっ？」

「悪いな。おばさんに言っただけ、無理に上がらせてもらったんだ。どうしても、チャンスが欲しくってな」

「え、え？」

来夢は目を白黒させると、とりあえず跳ね起きてベッドの上に座った。自分でもわからないが、なぜか正座だ。そのまま隆也の視線を受け止めていたが、やがて彼のセリフをやつと理解して、首を傾げた。

「あの、隆くん。チャンスって何？」

「お前に謝るチャンス」

涼しい顔で、さらり、と言い切ると、隆也は突然深々と頭を下げた。

「この間は悪かったな、大人げない対応して。すまん」

「あ、えつと、えええつ？」

奇妙なその態度に、来夢はますます混乱して両腕を振る。

「た、隆くん。頭上げてよ。謝らないといけないのは、私の方だよ」

「それも確かにそうだな」

「あう」

あっさりと言われて、少し力が抜けた。前のめりにうつ伏せる彼女に、そっと隆也が近づいてくる。肩を叩かれた。はっ、と顔を上げると、隣家の幼なじみはどこか優しい笑みを浮かべていた。

「まあ、俺が謝りたかったんだ。取っておけよ」

「うん……」

呆然とうなずく来夢に、今度は笑みの質を変えてみせる。どこか悪戯っぽいものに。

「で、お詫びの品ってわけでもないが、面白いものを用意した。ぜひお前に見て欲しいんだが。来てみるか？」

「え？」

来夢は再び、目をぱちぱちと瞬かせるのであった。

来夢が連れて行かれたのは、三上工房であった。ガラス戸の前で、彼女はますます困惑を深めた。

「あれ。隆くん、どうしてここを知ってるの？」

「色々あったんだよ」

面倒くさそうに隆也は答えると、入り口の隣についているインターフォンを鳴らす。扉を開いて、三上が姿を現した。

「やあ、新井君。それに谷川さんも。待っていたよ」

上がつてくれ、と中を示すので、二人は工房へと足を踏み入れる。

来夢の目が丸くなった。

「え、何これ？」

工房の中には、従来の工芸品の他に、異質な品が置いてあったのだ。

一番に目を引いたのは、金属製の鎧である。来夢も見たことのある、有名な中世ファンタジーの映画で、英雄たる主人公が着ていたものだ。設定では神から与えられたというもので、装飾などが細かく再現は難しそうなのだが、目の前のそれはかなりの完成度を誇っていた。ただ、まだ未完成ではあるらしく、胸から上までしか作られてないが。

「でも、すごい。この鎧、三上君が作ったの？」

「鎧だけじゃないよ」

そう言つて、彼は近くにある長机の上から、アクセサリーをいくつか取り出してみせた。これも違うファンタジー映画で、魔法学校に通う主人公が校長先生に渡されたアミュレットである。やはり再現率が高い。

その他にも、手甲だの、腕輪だの、指輪だの。まるで劇に使う小道具のような品物の数々が、工房の隅に固めて置いてあった。

「これ、全部一人で？」

「ううん。最初は僕一人で作ってたけど、どうしても限界があつてさ。型とかは、演劇部の友人とかにも頼んで手伝ってもらつてるんだ。もちろん、バイト代は出してるよ」

「へえ」

感心した声を出してから、ふと来夢は訝しそうに首を傾げた。

「でも、どうしてまたこんなの作ってるの？ 隆くんが見せたかったのってこれ？」

「まあな」

隆也は肩をすくめると、来夢と三上を交互に見るようにした。

「今、海外で映画のコスチュームプレイとかが流行ってるんだよ。日本にも少しだが、その余波は来ている。だから、この未完成の鎧をホームページで公開して、こういうのを作っている、受注にも応じるっていうのを宣伝したんだ」

「え、それって？」

「三上工房は、コスチュームプレイヤーを視野に入れて活動するようになったってことだよ。もつとも、僕以外の職人は一切関わってないんだけどね。何しろ、普通の商品も作らないといけないし。だから修行ということ僕個人でやらせてもらってるんだ」

三上が説明を引き継ぐ。そんな彼の背中を、隆也が軽く叩いた。

「もちろん、コスチュームを作るだけじゃそんなに宣伝にはならない。だけど、三上みたいな若い奴が作っているとすれば、多少は話題になる。ま、客寄せのパンダだな。実際、こいつみたいにか小さい頃から修行している奴は、今の世の中じゃそこそこ珍しいらしくて、結構ネットで噂されてるみたいだぜ」

「よしてよ、そんなに大きさに話されてないってば」

そして笑い合う二人。いつの間に彼らがそんなに仲良くなったのか、来夢は呆然と口を開けっ放しにしていたが、それよりも思うところがあって声を出した。

「あ、あの、隆くん」

「何だよ？」

「これって、ひよつとして名物を考えてくれたの？ 私のために？」

「……特別だからな」

ぶつきらぼうに、いつものように答える隆也に。来夢はいつものように飛びついた。

「ありがとう、隆くん大好き！」

「こ、今回だけだぞ！ 今回だけ！」

そんな二人に向かつて、三上が両手を合わせて軽くお辞儀をした。まるで「ごちそうさま」と言っているかのようにであった。

○

「まあ、そんなに世の中うまくいくもんでもないよな」

一週間後。隆也は自室のPCの前で、独り言をもらした。三上工房のことである。

一時期は、どこかの掲示板で多少噂になってはいたが、それも今やすっかりなりを潜めている。所詮、コスプレなどという狭い世界を狙ったのと、若い職人が作っているという宣伝文句くらいでは、話題の持続力がなかったようだ。

それでも、コスチュームプレイヤーの間では結構な評判らしく、その手のブログやホームページでは未だに注目を集めている。それが成果といえば、成果ではあった。

すっかり友人となってしまうた三上の話によれば、注文はちよくちよく来ているらしく、特に金属の本格的な加工技術はあまり一般人には普及していないため、一部のコスチュームプレイヤーから重宝されているらしい。

『加工費とか送料とか考えると、それなりに値も張るんだけど、ありがたいことに一部で

ブランド扱いされていき。個人の仕事としては、結構繁盛しているよ』

もう学校やめちやおうかな、とか冗談めいたことも言っていた。

隆也は、冗談でもそんなことを言える三上を、少し羨ましいと感じていた。

（あいつの目的地は、もう決まってるんだな）

対して、自分はどうかだろうか。今の今まで、N市から出ることを考えてがむしやらに勉強してきた。が、その先のことをまったく考えていないことに、隆也は気づいてしまったのだ。

どこか、ここより栄えた街の大学に入る。漠然と、それは決めている。では、どの街のどのような大学に入るのか。それを自分で調べたことがあつただろうか。具体的な行動を、自分はしてきたのか。

いや、それ以前に。本当に自分はこのN市を出るつもりがあるのだろうか。

小さい頃に、彼はこの生まれ育った町に嫌気がさした。それが彼のN市から出ていこうとする原動力になった。しかし、逆に言えばそれだけしかない。今の自分は、単にあの頃の子供の感情を引きずったまま、惰性でこの町を出ていこうとしているのではないか。

そこまで思考を進めてから、隆也は暗澹たる気分になった。いつもならそれでも、意地を張って「出ていく」と答えただろう。なぜなら、N市を出ていくことに何のデメリットも感じなかったはずだからである。

しかし、今は――

「来たな」

深くため息を吐きながらも、どこか楽しげに彼はつぶやいた。

扉が勢いよく開かれたのは、次の瞬間だった。

「隆くん、隆くん！ 三上君に聞いたんだけど、結構評判いいみたいだよ！」

嬉しそうに叫んだのは、言わずもがなの隣人であった。今さらながらのことを口にしつつ、隆也の腕を掴んで揺すってくる。

「私達を作った名物が、初めて世間に認められたんだよ！ やったね！」

「バカ、評判がいいって言ったって、極々狭い界限の話だろ。それで世間に認められたって、認識が甘いわい。それからな」

隆也は腕から来夢の手を離すと、彼女の後ろに回った。

「ふえ？」

「あれはほとんど俺が考えたんだろが。何が『私達を作った』だよ、調子のいい！」

「ご、ごめん、ごめんってばあ！」

ヘッドロックをかけられて、来夢はじたばたともがいた。一応手加減はしてあるが、それなりの苦痛は受けているはずだ。

十秒数えてから、ほどいてやる。来夢は涙目で隆也を見つめたが、すぐに明るく元気な彼女の顔に戻ると、

「でも、少しでも認められたんだもん。これは大いなる前進だよね」

「そうかもしれないな」

「なら、この機を逃さずに、次の名物を考えるべきだよ。だから……」

ほら来た。隆也は予想通りの言葉を受けて、用意しておいた回答を述べた。

「言っておくが、俺は手伝わないからな」



「わぁ！　ありがとう、隆くん！」

「話聞いてるのか、おい！」

叫びながらも、このやり取りが心地いいことに、隆也は気づいてしまった。これも、何とかの弱み、なのだろう。

しかし、いつかははつきりとしないといけない。自分が何を選択するのか。そのために、何を切り捨てるのか。

それは小さい頃からの夢なのか、それとも目の前の少女なのか、それとも——その答を出す時は近くなりそうだと、隆也は何となく感じていた。

**NONSTOP**



響け、  
私たちの歌声

広野未沙

Illustration: うらら

あらすじ

不幸な事故で滑り止めだった優華女学院高等部に通うことになってしまった有香は、クラスメイトのひかりに誘われて、弱小合唱部に入部する。自分と似た環境だった部長の菜々子のように「自分の居場所を見つけるため」に。県の合唱祭で初ステージに立ったり、ひかりの家に遊びに行って友情を深めたり。有香の優華女学院での高校生活は、今のところ、思ったよりも悪くない。



土田菜々子

(つちだななこ)

優華女学院合唱部部長。高三。成績優秀で教師の信頼も厚い。さばさばしている。

酒井有香

(さかいゆか)

高一。受験日当日の事故により優華女学院に通うことに。平凡な家庭で育った平凡な女子高生。

友枝ひかり

(ともえだひかり)

有香のクラスメイト。純粋培養のお嬢様。誰もが認める美少女。合唱部。

第四話 ささやかなすれ違い

「有香。あなた、転校するつもりある？」

いきなりの母の発言に、夕食を食べていた有香は思わず箸を止めた。

いつも通りの夕食だった。

父から仕事で遅くなるという連絡があったので、母親と二人でご飯を食べている。酒井家では、父親の仕事の都合上、そんな日も珍しくない。今日の夕飯は鮭の西京漬け。

テレビを見ながらだらだらとご飯を食べる。兄が進学で家を出て、一人減ったときはなんだか寂しかったが、いつの間にかこの状況が当たり前になっていた。話題は主に学校のこと。とくに最近は部活——合唱についてが多かった。

不本意な理由で第一志望を受験できず、有香が滑り止めの優華女学院に通い出して約半年。友人に誘われた入った合唱部で、有香は部活動に精を出している。考えもしなかった部活だけれど、思いの外有香には合っていたらしい。そういう意味では、誘ってくれた友人には感謝してもらいたくない。

もちろん、母親が進学先が有香にとつて不本意だったことをよく知っている。受験当日、事故に遭って受験できなかったとき、落ち込む有香を励ましてくれたのも母だった。

（転校？）

汁ものを飲んでいなくて本当によかったと有香は思う。一歩間違えば吹き出していたかもしれない。

「えっと」

有香は持っていた茶碗を置き、ゆっくりと深呼吸をする。

「転校って言った？」

中学だったらともかく高校だ。そう簡単に転校できるとは思えない。

父親の会社のひとの息子さんは、せっかく入った進学校が肌に合わず、中退して別の学校を受けたと聞く。

「そっよ」

母親はあっさりと言った。

「どこに？」

まさか中央高校、なんてことはないだろう。でも、だからといって「転校」できそうな学校など思いつかない。

母親はあっさりと言った。

「東京」

考えてもみなかった選択肢だ。

「なんで？」

「お父さんがね、転勤するかもしれないの。まだ正式に決定ってわけじゃなくて、あくまでそういう話があるって程度なんだけど」

「そうなの？」

「有香も進学のことを考えるんだったら、優華よりは別の学校の方がいいんじゃない？ わかっていたこととはいえ、周囲の話を知っていると、優華だとやっぱり内部進学以外は弱いみたいだし」

パートに出ている母親は、パート先でやはり有香と同じくらいの年代の子供を持つ母親とよく話す機会があるようだ。他の高校の話も聞く機会があるのだろう。

「親の仕事の都合で引越したら、欠員があれば、公立高校にも転入が認められるそうよ」  
「……」

有香が優華女学院に入学するにあたって、一番懸念していたのが大学受験だった。

有香には、地元の大学に入って教師になるという夢がある。だからこそ、地元の大学の進学に強い中央高校へ進みたかったのだ。

優華女学院だって、中央高校と学力レベルはそこまで離れているわけじゃない。ただ、優華女学院の場合、ほとんどの生徒が付属の短大へ進む。一応選抜試験はあるとはいえ、外部受験に比べたらかなり緩いものだ。そんな中で、一人ががんばれることができるのだろうか。それが悩みだった。

「まあ、東京なら、たくさん学校あるし、公立が無理でも、優華よりは受験に協力的な学校に入れるんじゃない」

母親は平然と食事をしている。

——他の高校に転入。

考えたことがないとは言わない。入学したばかりで、優華が嫌で嫌でたまらなかつた頃。どうにかしてもっと進学に向けた高校に通う方法はないかという調べたことがある。けれど、基本的に母が言ったとおり、公立高校の転入は親の都合でどうしても通学が無理なところに引越すことになった、というパターンくらいしか認められていない。

例外もあるというが、少なくとも受験体制が不安なので、なんていう個人的な理由では絶対に無理だろう。おとなしく中退して来年受験し直してください、で終わってしまう。第一、欠員がないと無理なのだ。

「言ったとおり、正式じゃないからだめになる可能性も高いし、あくまで頭に入れておいてって程度だから。まだそんなに悩まなくてもいいのよ」

黙り込んだ娘を心配してか、母はそうフォローする。有香はうん、とうなずいた。

それこそ四月の有香だったら、この話に一も二もなく飛びついていただろう。

けれど。

今は違う。

放課後の音楽室に歌声が響く。

今日はパトリダー（といっても二人しかいないパートだが）の菜々子がじゃんけんに勝ったので、音楽室で練習ができる。メリットは、キーボードを用意する煩雑さがないことと、吹奏楽部の音があまり聞こえてこないことだ。同じ音楽室内でソプラノも練習しているけれど。



優華女学院高等部合唱部が目標とするヴォーカルアンサンブルコンテストまであと一ヶ月ほど。パート練習の時間は最初の頃に比べると短くなっている。パート練習の内容も、音というより表現に重点を置いたものの方が多い。

コンクール用に練習しているのは、ミサ曲であるキリエとグロリア。アカペラの女声三部合唱だ。宗教曲を歌う学校はけっこう多いのだという。

短いキリエはともかく、グロリアは歌詞を覚えるのも大変だった。それでも、なんとか発音を含めてそれっぽく歌えたようになった気がする。ただ、音をなぞれるだけではだめだ。それに表現を加えなければならぬのだから。

表現。これがまた難しい。単純な強弱ならわかりやすいけれど、言葉を聞きやすくとか、思いを込めるとか言われるのはぴんとこない。特に歌詞はラテン語。間違えずに歌うことで精一杯だ。

歌うだけなら楽譜なしでもいけるけれど、細かい表現をとられると困る。それが今の優華女学院合唱部の曲の仕上がり状態。

一通り、菜々子と二人で通して歌う。最初に音を取った以外は、ピアノなしだ。早さはかちかちとなるメトロノームに合わせる。

最後の部分で菜々子は再びピアノのキーを叩いた。

「少し音が下がり気味かな」

菜々子がほんの少し顔をしかめる。たしかに、ピアノのキーの音とは、少しだけ音が違う気がする。音が下がる、とは、歌っているうちに音程が低くなっていくことだ。低い高いはわかりづらいけれど、音が違う、というのは有香も何となくわかるようになった。

「なるべくほほをあげて、音を上げるつもりで。ほほがさがると、音も下がっちゃうから。あと、最後は静かに、なんだけど消えないように。前にも言ったけど、余裕があるんだつたら、Rは舌巻いて。Lは巻かないでね」

「わかりました」

言われたところは、すぐに楽譜にメモをいれる。この数ヶ月で、きれいだった楽譜にびっしりと注意点が書き込まれていた。練習中には楽譜とペンが欠かせない。

「じゃあ、五分休憩にしよっか」

パート練習の時間は、あと二十分ほど残っている。

椅子に座って楽譜を眺めている菜々子に、有香は思い切って話しかけた。

「土田先輩は勉強、いかがですか？」

「まあ、順調よ」

菜々子が顔を上げる。

菜々子は親の勧めで優華女学院高等部に入学したものの、大学は外部受験——それもかなりレベルの高い大学——の予定だ。

有香にとっては、指針になってくれる先輩。有香が合唱部入部を決めたのも、菜々子の存在が大きかったことは否定できない。

「部活との両立、大変じゃありませんか？」

この時期、普通の三年生はとっくの昔に部活を引退している。特に、外部受験をするつもりならなおさらだ。

たとえば、中央高校合唱部。結局県大会はトップで通過したものの、九月下旬にあった

地方大会を突破することができなかった。そこで三年生は引退して、すでに二年生が部長として新しいスタートを切っているという。もちろん、ヴォーカルアンサンブルコンテストに出るのは、一年生と二年生。そんな話を聞いた。

「大変じゃないとは言わないわ。でも、受験が大変なんていうのは、みんな同じじゃない？ 内部進学だって百パーセント希望学科に行けるわけじゃないし」

菜々子はさらりと答える。

確かに菜々子の言うとおりなのかもしれない。内部進学の場合でも、簡単な選抜試験はある。さらに、誰もがみんな希望学科に入れるわけではない。定員が決まっていて、成績順に割り振られていく。

「前にも言ったかもしれないけど、遅くまで部活をやっている生徒の方が、それだけ危機感もって集中して勉強するから合格するつても言うしね。要はやる気次第よ」

「……」

やる気次第。それはわかっている。ただ、それには周囲に流されない強い意志が必要だ。それが、自分にあるだろうか。

「何か、あつたの？」

菜々子が首をかしげる。

「酒井さんが私に質問してくるときは、たいてい自分に悩みがあるのよね」

（……やっぱり見抜かれちゃうか）

「実は……」

有香は母親が転入の話を持ちかけてきた、と話した。

「まだ本決まりじゃなくて、実現する可能性は相当低いんですけど」

最後にそう付け加えるのも忘れない。

「まあ、ありかなしかと言われたら、ありじゃない？」

菜々子はあるささりしている。菜々子のことだ。止めることは絶対ないと思っていたけれど。

「この学校が外部受験のサポートに関してかなり弱いのは確かだし。それは私が身をもって経験してる。義務教育と違って、高校に転入できるっていうチャンスは早々ないからね。私は、前にも言ったかもしれないけど、酒井さんがどうしたいのかっていうのが一番大事だと思うな。私はこの学校で外部受験っていう道を選んだけれど、それはあくまで私の選択なんだから」

(あたしは……)

「と、五分経ったね。練習始めようか」

菜々子は座っていた椅子から立ち上がる。

なんとなく、自分の気持ちはすでに固まっていた気がした。

(転入……?)

思わず飛び込んだできた声に、友枝ひかりは心臓がどきりとした。

ソプラノのひかりは、アルトが練習しているピアノと反対側で、キーボードをつかって練習していた。キーボードを弾くのは、同じソプラノの先輩である二年の金澤亜美だ。

一通り歌って、少し休憩することになった。ちょうどアルトも休憩らしく、菜々子と有

香は何かを話している。

大好きな菜々子と有香。二人が話していることがほんのちよっぴり気になって、ひかりは近づいた。

そこで、ひかりの耳に飛び込んできたのが、有香の「転入」の言葉だった。

その言葉が衝撃過ぎて、そのあとに続く言葉が頭に入ってこない。

耳がよいのも困りものだな、と思う。結局、二人にそれ以上は近づくことができないまま、ひかりはキーボードの前へと戻った。

（有香ちゃんが他の学校に転入？）

中途半端にしか話が聞こえなかったから気になる。でも、他意がなかったとはいえ、立ち聞きしたようなものだ。それを率直に有香に聞くのははばかられる。

もともと有香が、優華女学院が第一志望でなかったことは知っている。中央高校に通いたかったのだけれど、受験日に不幸にも事故に遭ってしまい、受験できなかったのだという。

きつと、何事もなく受験できていたら、有香は今頃中央高校の制服を着ていたに違いない。有香は、定期テストの成績も抜群だ。古文が苦手だ、とは言うけれど、ひかりに言わせてみれば、どこが苦手なの？ という感じだ。外部進学、それも地元の国立大学を目指しているだけはある。

菜々子と同じように、有香も、どうしてわざわざ優華女学院に入学したの？ と首をか

じげたくなるような人間なのだ。  
でも。もし、有香が中央高校に通っていたら。

もちろん、ひかりと知り合うこともなく、ひかりは中学に引き続き、同学年ゼロという状態で合唱を続けていたはずだ。

有香がいなくなったら、また、中学のときのように戻るだけ……。

「どうしたの？ ひかり」

ソプラノの先輩である金澤が首をかしげる。

どうやら、顔が沈んでしまっていたらしい。ひかりは、ぶんぶんと勢いよく首を振った。

「なんでもありません。練習しましょう！」

(きつと、言ってくれるよね。有香ちゃん……)

「あのね。有香ちゃん」

「どうしたの？」

「あのね……」

ひかりにしては珍しく歯切れが悪い言い方だった。

駅前のロータリー。この季節、六時にもなれば、すっかり日は暮れてしまう。

少し駅前が混んでいるらしく、いつもひかりを待ってましたとばかりに停まっている友

枝家の車が見当たらない。車を待つひかりに有香もつきあうことにしたのだ。

同じ合唱部の一年生であるひかりとは、毎日駅前まで一緒に帰っている。家が駅から遠いひかりは、駅からは車で帰る。本当は学校まで車で送迎してもらっていたのだけれど、有香と一緒に帰るために帰りだけは駅までしてもらった、という。なんだか申し訳ない気分にならなくなってしまおうが、ひかりは無邪気なものだ。

純粹培養お嬢様のひかりは、きつと、有香が優華女学院に通わなかったら、一生接点が無かった類の人間だと思う。それが今では親友とも言える間柄なのだから、世の中わからない。

しばらく待ったけれど、なかなかひかりから次の言葉は出てこなかった。

(どうしたんだろう)

だいたいひかりは思ったことはすんなり口に出すことが多い。こういうふうに言いよどむことは少ないのだ。

そういえば、帰り道も、少しだけ思索にふけている時間があつた気がする。いつもほとんどの話題提供はひかりで、有香は聞き役に回ることが多い。なのに、今日は有香がひかりに話すことが多かったような気がする。これくらいでバランスがいいのかもしれないけど。

「……。あ。車来たみたい」

ひかりが声を上げる。確かにひかりの言うとおり、黒塗りの車がこちらへ向かってきている。やがて、目の前で車は止まった。

「じゃあね。ばいばい。有香ちゃん」

友枝ひかりは、元氣よく手を振ると、黒塗りの車に乗り込んだ。さっきの沈黙は考えすぎだったんじゃないかと思うほど、いつも通りだ。ゆっくりと車が発進するのを有香は見届ける。

ひかりの乗る車が消えたのを見て、有香は回れ右をした。

駅前、学校帰りの高校生や、仕事帰りのサラリーマンで賑わっている。

郊外の高級住宅地に住むひかりと違い、有香は駅前のマンション住まい。ここからは歩いてすぐ家に着く。

すたすたと歩いていたら有香だが、ふと予備校の前で足を止めた。

全国的に名が通っている予備校の前には、合格者実績に並んで、これからの模試のスケジュールが貼ってある。三年生ほど頻繁ではないけれど、一年生も三ヶ月に一回くらいのペースで模試があるようだ。

センター試験対策のマーク模試と、記述式の模試。

一番近いのは一月のマーク模試だった。

(あたしも、受けてみようかな)

勉強のためなら、母親もお金を出してくれるだろう。

そう思ったのには理由がある。

今日の放課後。偶然、三年生——土田菜々子と月岡若菜の会話を聞いてしまったのだ。

「そういえば、菜々子、この前の模試はどうだった？ 外部模試、受けたんでしょ？」

「まあまあ。よくもなく悪くもなくって感じ。第一志望はA判定だったから、この調子でがんばる」

「A判定って、さすが菜々子ね」

「模試でA判定だからって、必ず合格できるってわけでもないわ。ただの目安。むしろ慢心して落ちるひとがいるくらいなんだから」

「まあ、あんたらしいって言えばあんたらしいか。でも、あんた、本当にすごいよねー。

私なんて第一志望の学科行けるかどうかの瀬戸際だっていうのにさー」



どうやら、菜々子は予備校の外部模試を受けてきたらしい。

優華女学院高等部では、いわゆる外部模試の類はやっていない。中央高校に通っている友だちは、一年の時から学校で希望者に模試をやっていると聞いていた。こういうところが、菜々子の言う「外部受験のサポート」なのだろう。

まだ一年。されど一年。高校三年間なんてあつという間だという。

(よし。受けてみよう)

大学受験は全国の受験生がライバルになる。校内でよい成績を取ったからと言って、それが通用すると限らない。自分のレベルを知ってみよう。

「酒井さんだよね？」

「うわっ」

いきなり声をかけられて、有香は驚いた。

振り返ればひかりの兄——友枝義昭が立っている。ブレザーにチェックのズボンは、昇星学院高等部の制服だ。県内でも有数の進学校の三年生。

「そんなに驚いた？」

義昭とは、以前ひかりの家に遊びに行ったときに知り合った。それから何度か顔を合わせたことがあるけれど、いつもひかりが一緒だった。

「まさか、声をかけられるとは思わなかったの……」

正直な感想を有香は述べる。義昭は背が高いので、どうしても見上げる形になってしま

う。  
「そりゃあ、街で知っている顔を見つけて無視するほど、俺は薄情じゃないよ」

義昭は笑みを浮かべる。優華女学院にもひそかなファンが多いと言われる笑顔だ。

「一人？ 今日はひかりと一緒にじゃないの？」

「いえ。さつき別れたばかりです。えっと、友枝さんは？」

なんと呼ぶのが相応しいか悩んだあげく、結局「友枝さん」で落ち着いていた。

「ああ。俺は今から予備校。さすがにそろそろ受験だからね。真面目に勉強しないと」

昇星学院高等部は、県内でも有数の進学校として知られている。きつと義昭が目指す大  
学もすぐくレベルの高いところなのだろう。

「酒井さんは？」

「あたしは、模試を受けようかなあと」

「ああ。優華女学院は、あんまり進学に力いれていないみたいだね。みんな付属の短大  
なんでしょ。そういえば土田も似たようなこと言っていたな。酒井さんも知っているよね。

土田菜々子」

「土田先輩をご存じなんですか？」

「親の仕事の関係だね」

そういえば、部活の先輩後輩という関係の前に、ひかりと菜々子は昔からの知り合いだっ  
た。ひかりの兄である義昭と菜々子が知り合いでもおかしくない。学年的には、義昭と菜々  
子が一緒なのだから。

「でも、偉いね。一年生のときからそうやってしつかり考えてるのって。俺の場合、通っ  
ている学校が学校だから、嫌でも意識させられてたところはあるけど、それでも学校まか  
せだったもんなあ。優華はそういうものないでしょ？ うちの妹見てればわかる。土田み

たいなのが特殊なんだろうなあ。あいつは一年の時から、こういう模試、きっちり受けてたし」

「そうなんですか？」

「そうだよ。あ。もう時間だ。模試受けるとしたら、がんばってね！」

義昭はさわやかに言うと、建物の中に消えてしまった。

なんだか風のような人だ。

有香は半分啞然と彼を見送り、そして息をつく。

義昭曰く、菜々子は一年の時からきっちり模試を受けていたらしい。受験に対する意識が高かったのだろう。

けれど。有香は。

一応毎日勉強はしているけれど、学校の予習復習の範囲だ。

指折りの進学校に通う義昭は、学校側が嫌でも受験を意識させてくれたと言っていたけれど、優華女学院にはそれが無い。日々の勉強のとき、たまに真面目に勉強しないと希望の学科にいけないと言われるだけだ。希望の大学、ではなく、希望の学科、という時点で内部進学者がほとんどであることがわかる。

(わかってはいたんだけどね)

三年間、自分でしっかりががんばらないといけない。菜々子は一年の時からずいぶん意識が高かったようだ。けれど、有香は……。

(でも、今からでも遅くない、よね)

優華女学院でできるだけやってみよう。

菜々子みたいにしっかりした意志が必要なのはわかっている。模試は、その第一歩だ。

模試について書かれたチラシをもらって、有香は家へと帰った。

夕飯後、ひかりは自室で勉強をしていた。

大嫌いな数学の宿題を広げているけれど、全然進んでいない。

ひかりは、大きくため息をついた。

——結局、有香は何も言ってくれなかった。

菜々子には相談していたみたいなのに。

ひかりだって、有香が菜々子に相談したくなるのはわかる。菜々子は、優華女学院にいなながら、外部受験を目指している。しかも、十一月まで部活を続けた上で、だ。

同じ道を目指す有香にとって、菜々子は頼もしい存在なのだろう。

でも。ひかりにも何か一言欲しかった。

今日、偶然耳にしなれば、きつとひかりは何も知らないままだっただろう。

(でも、今日はたまたま言えなかっただけかも)

自分なりに水を向けてみたつもりではあるけれど、まだまだ足りなかったのかもしれない。明日になれば、有香は言ってくれるかもしれない。

ふう、とひかりはため息をつく。このまま机に向かっていても宿題は進みそうにない。少し気分転換をしよう。そう思って、ひかりは部屋を出る。

「あ。ひかりか」

廊下でばったりと会ったのは兄の義昭だった。どうやら予備校から帰ってきたらしい。今年受験生である兄は、毎日予備校にも通っている。東京の有名私立大目指して日々勉強中だ。その上の兄は、実際誰もが知っているような東京の私立大学に在学中。

ひかりは、女の子なんだから別にどこに言ってもかまわない、と言われていた。

母親なんかは、エスカレーターで優華女学院の短大に進むと思っているだろう。そして、卒業と同時に親が勧める人と見合い結婚。ありそうなパターンだ。

ただ、最近、本当にそれでいいのかと思いは始めている。

他の大学を受験してみてもいいんじゃないだろうか。優華女学院の短大では、選択できる学科が限られてくる。

たぶん、菜々子と有香の影響なのだろう。内部進学が当たり前、という雰囲気の中、彼女たちは別の道を進もうとしているから。

「お兄ちゃん。帰ってたの」

夕食の時間、ここ最近、義昭は同席している方が珍しい。

「今帰ったばかり。そういえば、今日、酒井さんに会ったぞ」

「え？ 有香ちゃんに？」

ひかりは目を見開く。まさか、兄の口から有香の名前が出てくるとは思わなかった。

「どこで？」

「予備校の前。お前と別れた直後。なんだか、模試受けるみたいなのを言っていたな」

（……え？）

ひかりは再びがつんと衝撃を受ける。

模試、というのは予備校主催の全国模試のことだろう。兄が定期的に受けているのを知っている。

模試を受ける……？

優華女学院では、全国模試などの類は受けられない。兄が通っている昇星学院では学校が休みの日に定期的に模試を受験できる環境がある。

(やっぱり、優華女学院じゃ進学は難しいって思ってるのかな)

だから、転入に結びつくのではないだろうか。

「ひかりも進学するつもりあるんなら、酒井さん見習って、少しは考えておけよ」

ひかりの頭をくしゃりと撫でると、兄はひょうひょうと自室へと消えていく。

何も知らなかった。

別に親友だからといって、すべてを話せというわけではない。話しづらいことだってあるだろう。

でも、偶然会ったとは言え、義昭には話せたのだ。だったら、自分に話せないわけがない。話せる範囲でかまわない。何でも真っ先に話すのは、自分であって欲しい。

そう思うのは、自分のわがままなのだろうか。

\* \* \*

お昼休みの教室は、学校で一番華やぐ時間だと思う。あちらこちらからきゃっきゃとしたりおしゃべりが聞こえてくる。

有香も教室でひかりや他の友だちと一緒にご飯を食べている。

毎度のことだけれど、ひかりのお弁当は、毎日これで足りるのだろうかと不安になってしまうほど小さい。有香のお弁当箱の三分の二くらいしかないのではないだろうか。有香のお弁当箱だって決して大きいものではないのに。

しかも、今日は食欲がないのか、あまり食が進んでいない。

(どうしたのかな。ひかりちゃん)

思えば朝からちよっとおかしかった。

たとえば、話が不自然に止まったり、何かいいかけてやめたり。

前にひかりの様子がおかしかったときは、有香の誕生日プレゼントを黙っていたからだった。ひかりは隠し事が苦手なのだ。

けれど、今はひかりが有香に隠さなくちゃいけないことなど全然思いつかない。もちろん、過ぎてしまった有香の誕生日は、しばらくやってこない。むしろ、ひかりの誕生日の方が近いくらいだ。今から、誕生日プレゼントを考えるのに苦労している。

「どうしたの？ 食欲ないの？」

有香はひかりの顔をのぞき込む。顔色が特別悪い、ということとはなさそうだ。

しばらく黙っていたひかりだが、やがて何かを決意したように、有香に顔を向ける。

「ねえ、有香ちゃん。私に言うことない？」

「言うこと？」

有香はきよんとした。

何かあっただろうか。しばらく考えてみる。

「あ。昨日、お兄さんに会ったよ。予備校通ってるんだね。すごいね。さすが受験生」  
「そうじゃなくて」

ひかりはぶんぶんと首を振る。

じつところちらを見つめてくる目は、真剣そのものだ。

「他に」

「……」

（何かあったっけ？）

有香は考える。ひかりとした約束を何か忘れていたりするのだろうか。

考えたけれど、思いつくことはない。

「あ。誕生日は忘れてないよ！ きちんと覚えてる。二十七日だよね」

——出てきたのがこれくらいだった。

「忘れてるなんて思っていないってば」

ひかりの顔には笑顔がない。いや、表情がない。

（あれ？）

いつだってひかりは、有香がうらやましいと思うくらい、自分の感情を素直に全面に押し出してくると言うのに。

「本当じゃないの？」

静かに問われる。

「……ない、と思う」

「そう」



ひかりとは思えない、感情のこもらない声だった。

「ごちそうさま」

ひかりは手を合わせるとお弁当箱をしまい、さっさと自分の席に戻ってしまった。有香が止める間もなかった。

一緒にご飯を食べていたクラスメイトが話しかけてくる。

「どうしたの？ けんか？ 珍しいね」

「けんか、になるのかな」

有香はうなる。

（あたしには、心当たりない、んだけどな）

知らないうちにひかりを傷つけるようなことをしてしまっていたのだろうか。

それについて謝れ、っていうことなのだろうか。

でも、それはあんまりひかりらしくない気がする。

「まあ、お嬢様は常人には理解しがたいからね」

「そんなことはないと思うんだけど……」

むしろ、ひかりは自分の感情を隠すと言うことを基本的にしないから、むしろわかりやすいくらいだな。

（あたし、何しちゃったのかな）

一生懸命考えるけれど、全然思いつかない。

昼休み以降、ひかりとは一度も口をきかなかった。

いつもなら休み時間にやってくるひかりが一度もこなかったし、有香もなんとなくひかりの元へはいけなかった。席だつて離れているし、掃除の班も違う。教室移動をするような授業もなかった。お互い関わるまいと思えば関わらないで済む環境。

――別に、有香はひかりを無視したいわけではない。

ひかりのことが気になって、授業の内容もあまり頭に入つてこなかった。

どうしてひかりが怒っているのか見当もつかない。

授業中だつて、一生懸命「ひかりに話すこと」を考えた。けれど、ぱつと思いつくようなことは何もない。もつとも、そう簡単に思いつくようなことだつたら、昼休みの時点でひかりに話せていただろう。

せめて、向こうから何を求めているか教えてくれれば、対応することができるのに。

放課後。気づけばひかりの姿は消えていた。きつと部活に行ったのだろう。

こんなことは、どちらかに用事がない限り、初めてだった。

「友枝さん、かなり怒ってるみたいだね。早く仲直りしたほうがいいんじゃない？」

クラスメイトはそんな風に助言をくれたけれど、それが可能ならば有香だつてさつさと実行している。ただ、どうして怒っているのかわからないから、何もできないのだ。ごめん、と謝つて済む問題じゃないのだろう。

ひかりは、大切な友だちだ。

避け続けて、それで済むような相手ではない。

相性が合わなかったから仕方ない。それで割り切れるような相手ではない。

(部活、行きたくないな)

そう思ったのは、初めてだった。

それでも、大会を約一ヶ月後に控えた今、気が乗らないなんていう理由で休むわけには  
いかない。

有香は、無理矢理自分を奮い立たせて、音楽室へと向かう。

「で、今日は一年二人に何があったわけ？」

パート練習に入る際、菜々子に真っ先に問われた。

今日はじゃんけんに負けたので、廊下で練習。少し離れたところでは、吹奏楽部の生徒  
たちがフルートを練習している。

ひかりのパートであるソプラノは、今日はピアノでの練習を勝ち取った。

(やっぱり、わかるよね)

合唱部は六人しか部員がないからこそ、みんな仲がいい。そんななか、一年生二人が  
口も聞かずに準備をしていたら、誰だっておかしいと思う。

いつもは、しゃべりすぎて(主にひかりが)怒られるくらいなのに。今日は、まったく  
会話がなし。菜々子じゃなくなっちゃって、おかしいと思って当たり前だ。

「……何があったんでしょ？」

有香としてはそう答えるしかない。

「あたしには、心当たりなくて……」

「本当に？」

「はい」

「じゃあ、どうして？」

「昼休みに、ひかりちゃんか、自分に何か話すことがあるかって聞いてきたから、ないって答えただけなんですけど……」

「本当に、ないの？」

「ない、と思います」

自信満々に言い切れるほどではないけれど。

はあ、と菜々子はため息をついた。いい？ と顔を上げる。

「たとえば、あなたが取るに足らないって思っていることでも、ひかりにしてみれば、そうではないのかもね。たとえば、昨日私にした転入の話とか」

「へ？」

思ってもみない話だった。

「だって、転入は結局……」

昨日、模試の話をする際に、一緒に母に優華女学院でがんばると告げたのだ。模試は、その決意表明に近かった。

母もそれを認めてくれた。まあ、まだ本決まりでもないしね。お父さんには我慢して単身赴任してもらいましょう。もつともせっかく買ったマンションを無人にしたくない、という理由もあったようだ。家は住まないと痛むから。

「断ったの？」

「はい。それに、菜々子さんにしか転入の話は」

「昨日はソプラノも一緒に教室だったでしょ。普通の声でしゃべっていたわけだから、聞こえていてもまあ、おかしくないわ。特にひかりは耳がいいし」

「あ」

有香は思わず口元を押さえた。

その可能性を全然考えていなかった。

もし、ひかりの耳に、偶然転入の話が入ってしまったとしたら。

有香がひかりの立場だったらどうするだろう。そのものずばり聞けるだろうか。いや、聞けない。

立ち聞きなんていうマナー違反をってしまったようで、気が引ける。

ひかりだって、それは一緒のはずだった。

だからこそ、一生懸命有香の口から引き出そうとしていたのだ。

思えば、昨日の帰りだって、ひかりは何か聞きたそうだったではないか。

「特別に時間あげるから、ひかりに話してきなさい。金澤さんには私から事情話すから」  
「わかりました！」

有香は思い切りうなずいた。

一刻も早く、ひかりに説明してあげたい。

廊下の外れ。吹奏楽部の音はやかましいくらいに聞こえてくるけれど、とりあえず人気はない。

菜々子はひかりを呼び出してきてくれた。そして、二人で話なさい、とこうして場所を

作ってくれたのだ。

気まずい沈黙が流れる。ひかりと一緒にいて、こんなに気まずい沈黙を感じたのは初めてかもしれない。

でも。口を開かなくちゃいけないのは、きつと有香の方だ。

「えっと、あの、ごめんね」

有香は勢いよく頭を下げた。

「その、転入のこと。あくまで全然本決まりじゃなくて。ただ、父親が仕事の都合で転勤するかもしれないから、どうするって母親に聞かれただけなの」

ひかりがほんの少し目を丸くする。

「それで、菜々子さんに相談してたんだ。たぶん、優華でもがんばれるって答えがほしくて」「そう、なの?」

うん、と有香はうなずいた。

「四月のあたしだったら、たぶん、その話が持ち出されたときにすぐに飛びついていたと思う。でも、母親に転入するきはあるか、って聞かれたとき、あたし、正直戸惑ったんだよね」

そうだ。母親の言葉にすぐに反応することができなかつたのは、有香が転校したくないって思ったからだ。

「で、やっぱり同じように外部受験目指している菜々子さんに話を聞いてみたの。たぶん、相談っていうより、心の整理のためだったんだろうな」

「……私、有香ちゃんがいなくなっちゃうかと思ってた」

ひかりが呟く。

「せつかく仲良くなれたのに、有香ちゃんがいなくなっちゃったらどうしようって。有香ちゃんが外の大学への進学目指しているのは知ってるから、私には止める権利なんてないし。だから、もし有香ちゃんの判断なら快く送り出さなくちゃって。でも、有香ちゃん、私には何も言ってくれないし。菜々子さんに相談するのは仕方ないと思っただ。だって、菜々子さんは有香ちゃんと同じ道を進もうとしているし。でも、お兄ちゃんにも、模試受けるって言ってる、私」

そこで義昭の話が出てくるとは思わなくて、有香は驚く。

「え？ 友枝さん——ひかりちゃんのお兄ちゃんには偶然会っただけだよ？」

それも、有香が模試について眺めていたから、そういう話になっただけだ。あそこに義昭がこなかったら、そんな話にはならなかっただろう。

「でも、お兄ちゃんが知ってる、私が知らないってことがあるのが嫌だったの！」

「……」

「有香ちゃんは、私の友だちなんだから」

ひかりが唇を噛む。

きつと転入話を自分から聞けなくて悶々としていているところに、兄が有香の情報を持ってきて、それが面白くなかったのだろう。

やっとひかりの気持ちが見えてきた。ああ。だから、彼女は怒っていたのか。

「ありがとう。ひかりちゃん」

本当にひかりはかわいいなあ、と思う。妹がいたら、こんな感じだったのだろうか。

「今度からは、なるべくひかりちゃんに真っ先に話すことにするね」

「本当？」

ひかりが上目遣いで有香を見上げてくる。有香は大きくうなずいた。

「本当」

「じゃあ、早速、今度受ける模試の話教えて」

「え？」

「私も受けてみようかなあつて思うんだ。だめかな」

ううん、と有香は大きく首を振った。

一人で受けるのは少し心細いと思っていたところだったのだ。一緒に受けたいというのなら大歓迎だ。

「私ね、このまま内部進学するつもりだったんだけどね、有香ちゃんや菜々子さん見ていてちよつと考えたの。確かに短大行くのが一番楽だって言うのはわかるんだけど、本当にそれでいいのかなくて。だから、三年になったとき、どういう道でも選べるように、がんばっておこうって思ったの」

ひかりがにっこりと笑う。ふわり、と柔らかい髪の毛が揺れた。

「じゃあ、今日、一緒に申し込みに行こう」

有香の申し出にひかりは満面の笑みでうなずく。

「うん」

先輩たちの待っている音楽室に、有香とひかりは並んで戻る。



「それにしても、お兄ちゃん、有香ちゃんのこと気に入ってるよね」

「へ？ 気のせいでしょう」

「だって、妹の友だちにわざわざ話しかける？」

「でも、それはあたしが顔見知りだから」

「ううん。絶対お兄ちゃんは有香ちゃんのこと、気に入ってる」

断言した。

「……」

「まあ、有香ちゃんなら、許すけど」

「話飛躍しすぎだよ？」

「ううん。お兄ちゃん、昨日妙に得意げだったし。大丈夫。私、有香ちゃんのこと、お義姉さんって呼ぶ覚悟しておくから」

「だから……」

ま、いつか。と有香は反応をやめる。ひかりだって決して本気ではないことくらいわかっている。ただの戯れ、みたいなもので。

こうして二人で話せることが、こんなありがたいなんて思っていなかった。

優華女学院で、外部受験はたぶん菜々子を見ている限り茨の道なのだろう。

でも、こういった友だちや、部活のみんながいるからがんばれる。

がんばろう、と思う。

いくら環境が整っていたって、本人のやる気がなければ無駄になるだけだ。逆に言えば、どんな環境だって、やる気さえあればなんとかなるってこと。

がらりと音楽室の扉をあける。四人の先輩方の注目が集まった。菜々子が代表してこちらにやってくる。

「この様子を見ると、無事に仲直りできたみたいね」  
有香とひかりは視線を交わすと、

「はい！」

二人で大ききくうなずいた。



# 平行線 ジンドローム

水島朱音

Illustration: 正午あきら

### あらすじ

澤村葉月は中学校の卒業式の日、片思いの相手・塚本日向に告白する。しかし彼は「一年以内に僕を見つけることができれば返事を教える」という謎の言葉を残して、その日を境に姿を消してしまったのだった。

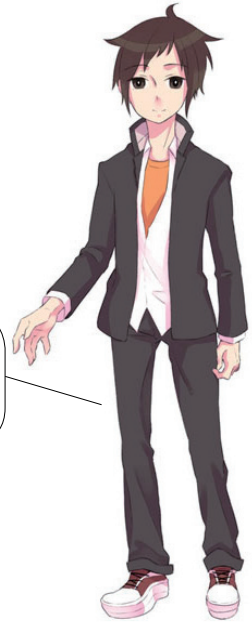
#### 澤村葉月

ポジティブでさっぱりとした性格。  
日向のことが好き。



#### 塚本日向

飄々として掴みどころがない少年。  
地元の分家出身。



#### 青田宗輔

葉月の中学時代からの友人。  
野球部所属。



第四話 空白に帰する

文化祭。

夏休みが開けると、中央高等学校では早速放課後の時間を来る文化祭の準備のために費やすことになる。

文化祭が近づいてくるといいう高揚感で、生徒たちの心は浮き立つ。それなのに。

「よお、サボり魔」

頭上から突然降り注いだ声に、澤村葉月は思い切り首を反らした。

「ちゃんと準備に協力しろよー」

そう言ってこちらを見下ろす友人は、何やら小さめのダンボール箱を肩に担いでいた。ここは一階。葉月は校舎の壁にもたれるようにしてコンクリートの上に座っていた。

「……あたしのクラスは模擬店だから、準備って言ってもまだそこまでやることないの。宗輔のときは、何するんだっけ」

「俺んところはお化け屋敷だよ」

よいしょ、と不安定になった箱を抱え直しながら、青田宗輔は答える。

「お化け屋敷かあ……それも楽しそうだね」

「おう、高校入って初めての文化祭だからな。みんな気合い入ってるぜ」  
につ、と笑みを見せる宗輔も、気合いが入っているように見えた。

そろそろ首が痛くなってきた、と頭の向きを正面に戻す。

「……なんか、おまえ」

「んー？」

「元気ねえな」

と言われても、「元気ないです」と答えるのもおかしな気がしたので。

「普通だよ」

視線を正面に向けたまま、答えた。中庭では、どこかのクラスがペンキを使って看板に絵を描いている。

不意に、大きな手のひらが葉月の頭をかき回した。

「普通じゃねえなあ」

「……ちよつと、宗輔」

振り払うように再び頭上を仰ぐ。

「……夏休みの間、なんかあったか？」

そう言っって目を細める宗輔に、ぎくりとする。

妙に勘が鋭いところがあるから、厄介だ。

「……ちよつと、色々」

「なんだよ。はつきりしねえな」

「一言じゃ説明できないんだよ」

ぐしゃぐしゃにされた髪を整えながら、少しなげやりにそう言うのと、宗輔は何かを思案するように「んー」と小さく唸り、視線を中庭に向けた。

「よし、じゃあ明日の昼休みにでも話聞くから」

「え、そんな」

「いいからいいから」

強引にそう決めてしまうと、宗輔は「んじゃ、また明日なー」と言っただけで去っていった。まいった。

ぼかん、と誰もいなくなった頭上をしばらく仰いでいたが、また首が疲れてきた。

戻した視線の先では、相変わらずどこかのクラスメイトたちがはしゃいでいる。

(楽しそうだな)

他人事のように考えるが、葉月だって別に文化祭が楽しみじゃないわけではない。高校に入って初めての文化祭なのだ。

しかし、夏休みからずっと、心の隅に引っかかっていることがある。

それがどうしても、手放しに文化祭を楽しむという気持ちにさせてくれなかった。

葉月はずっと、ある少年を探している。

彼の名前は塚本日向。葉月の中学時代の同級生で、地主の分家の息子だ。

葉月の片思いの相手である彼は、中学卒業後の行方がわからなくなっている。

卒業式の日に告白した葉月は、彼の「一年以内に僕を見つけてくれる」という言葉を信じて、これまで日向を探し続けてきた。

けれど。

『……未練を、断ち切る時が来たってこと』

夏休みのアルバイト中に起きた、小さな事件。それによって、葉月の心はしこりを残した。

日向のことがまだ好きなのか、それとも未練を引きずっているだけなのか。

葉月自身にも、わからなくなっていた。

(……未練を、断ち切る……)

以前、友人の少女にも何度も言われたことがあるのだ。新しい恋を始めるべきだと。

あの時はまだ、自信を持って「日向が好きだ」と言うことができた。けれど、今は。

(……なんで日向、ここにいないんだろう……)

自分の気持ちを確かめることすら、出来やしない。

一つため息を吐き、思い切って腰を上げた。まだそこまで忙しくないとはいえ、やることが全くないわけではない。



気合いを入れるように伸びをしてから、葉月は自分の教室に向かった。

翌日の昼休み。

葉月は昨日座っていたのと同じ、中庭に面した校舎の壁に背を預けながら弁当をつついていた。

隣には、同じように弁当をつつく宗輔の姿がある。

昼休みの中庭は、最近の放課後ほど騒がしくはない。

「……つまり、だ」

夏休みのアルバイト中であつたこと、それが原因で思い悩んでいることを話すと、宗輔はしばらくの間、葉月の話を頭の中で取りまとめるように黙って箸を進めていた。やがて、口の中のものを飲み下すと、宗輔は口を開く。

「お前はまだ、塚本のことを……諦めきれなかつたんだな」

「え、そこから？」

論点は葉月の日向に対する気持ち「恋」なのか「未練」なのかというところであつて、どちらにせよ諦めきれないということに変わりはないはずなのだ。

「いや、俺はてっきり……お前はもう、塚本のこと諦めてるもんだと……」

「なんで？」

「ほら、萌々ももとそれで喧嘩になつただろ。その後仲直りしてみたからだから、てっきり

萌々の意見を受け入れたもんだと……」

以前、葉月は親友の萌々と日向のことで喧嘩したことがある。萌々は日向のことを忘れるべきだと言い、葉月はそれを拒んだことから喧嘩になった。

「違うよ。あの時は……萌々が、あたしの気持ちをわかってくれて、仲直りできたんだ」  
「あー、そうだったのか」

宗輔は自分が勘違いしていたことを理解したようだった。

「それで、お前はまたぐだぐだ悩むはめになったのか」

「ぐだぐだって……うん、まあ……そういうことなだけけど……」

なんだか自分が情けなくなつて、箸で唐揚げをつつく。あの時、萌々に「自分のことは自分で決める」と強気の宣言をしたにも関わらず、未だにこうして思い悩んでいるのだから。

「うーん……」

一足先に食べ終えた宗輔が、巾着の中に弁当箱をしまいながら唸る。

「俺は、悩むぐらいならきつぱり諦めた方がいいと思うけどなあ……」

宗輔のその意見は、正しいのかもしれない。いつまでも引きずっているなんて、らしくない。けれど。

「それがなかなかできないから、困ってるんじゃない……」

そう、日向が「一年」なんて期限をつくらなければ、もつとスツパリ諦めていたに違いない。

そう思うと、なんだか日向に対して少しイライラしてきた。責任転嫁に近い。

ヤケクソ気味に唐揚げを一口でほおぼると、それを見ていた宗輔が「喉につめんぞー」とからから笑った。

「……諦めたといってなら、手伝ってやるぜ」

「え？」

咀嚼しながら宗輔の方を向くと、彼は真剣な瞳でどこかをじっと見つめている。

「……どうということ？」

手伝う、という言葉の意味がよくわからずに尋ねると、宗輔は葉月の方を振り向いた。

彼が何故か緊張しているのが伝わってくる。

「試しに俺と付き合ってみないか、ってこと」

予想もしていなかった言葉に、葉月は唐揚げを喉に詰まらせかけた。

「え……いや、でも……」

ペットボトルの茶を一口飲んで、自分を落ち着かせる。

「他のヤツと付き合ってみれば、諦めもつくかもしれないだろ？」

「いや、それは悪いよ……そんなことに、宗輔を巻き込むわけには……」

そう言うと、宗輔はどこか呆れたような顔になった。

「あのさあ。俺がただお前に協力するただけに、付き合おうなんて言ってると思ってるのか？」

宗輔の言っている意味がわからず、眉をしかめる。

「お前のことが好きだから言ってるんだろが」

言ってから、照れたように顔を逸らした宗輔に、葉月は今度こそ硬直するしかなかった。

「そっかー。ついにねー……」

「ついに、って……萌々、あんた知ってたわけ？」

その日の放課後、ファーストフード店に立ち寄った葉月は、そこで昼間の出来事を萌々に相談してみた。

すると彼女は、頬杖をついたまま先ほどのような返事をしたのである。

「うん、中学の時からね。まあ知ってたっていうより、気づいてたっただけけど」

さらっと答えた萌々に、葉月は哑然とするしかなかった。

「だ、だって全くそんな素振りなかったじゃん。萌々も……宗輔だっけ」

「私が葉月に教えるのもおかしいでしょ。それに、宗輔は割とわかりやすかったと思うけどなあ」

そう言われて、葉月は言葉に詰まる。全然わからなかったからだ。

「まあ、協力しようとは思わなかったけどね。葉月が塚本くんのこと好きなの知ってたし、そういうのは宗輔に相談されるなり何なりするまで、第三者が手を出すべきじゃないと思ってたから」

「……実は萌々が宗輔のこと好きだったからとか、そういうのは……」

「やあだ、ありえないからやめてよ」

ケラケラ、とおかしそうに笑う萌々に、なんとなく宗輔が気の毒になった。

でも、と萌々は一変して表情を落ち着いたものにする。

「宗輔がちゃんと告白してきたなら、話は変わってくると思う。……返事は、まだしてないんだよね？」

「うん……」

少し考えたい、といって保留にできてしまった。宗輔は、「焦らなくてもいい」と笑ってくれたが。

「宗輔の方からちゃんと告白してきた、そのうえ葉月が自分自身の塚本くんへの気持ちに迷いを感じているなら、試しに付き合ってみてもいいんじゃないかな」

「……萌々お……」

葉月は困った視線を萌々に向ける。しかし彼女は「大丈夫」と笑った。

「物は試し、だよ。あんまり難しく考えないのが一番」

そうは言われても、やはり難しく考えずにはいられなかった。

宗輔は葉月のことを好きだと言ってくれたのだ。宗輔も萌々も「試しに」と言っていたが、やはり彼の気持ちを利用するようなことはしたくない。

翌日、昼休みに宗輔を呼び出した葉月は、自分の思ったことをそのまま伝えたが、

「それでもいいよ」

と言われてしまったのだった。

「試しに付き合ってみて、それから判断してくればいい」

昨日告白してきたとは思えないくらい、宗輔はあまりにも普段とかわりない調子だった。それだから、逆に葉月の方がうるたえてしまうのだ。

けれど、そう言われてしまえば葉月の方に断る理由が見つからないのも確かだった。

日向のことを諦めたいと思っているわけではないけど、自分の気持ちをはっきりさせたというのは事実だった。宗輔と一緒にいれば、それもはっきりするだろうか。

そうして、半ば流されるようにして、葉月は頷いていたのだった。

しかし、いざ付き合うとなっても、何をしたらいいのかがいまいちよくわからない。文化祭が近づき、それぞれのクラスの準備が慌ただしくなってくると、顔を合わせる時間もこれまでより少なくなる。

昼と一緒にご飯を食べたりすることもあったが、それも毎日というわけではない。互いに友人関係というものもある。

(……あれ、なんかいつも通りじゃない……?)

中庭で屋台の組み立てに参加しながら、葉月はふとそんなことを考えていた。

これでは何の解決にも繋がらないような気がする。

「はーづきっ」

その時、やたら機嫌の良さそうな声がして振り返ると、小柄な女子生徒がこちらに駆け

てくるところだった。

「萌々。……何、その格好」

「今ねー、衣装合わせしてたところなの。かわいいっしょ？」

「ああ、あんなのどこ劇だっけ」

西洋風の、黄色いシンプルなドレスに身を包んだ萌々は、その場でぐるりと一回転してみせた。

「よく出来てるねー」

「でしょ？ 本番は見に来てね！」

「行く行く」

劇かあ、大変そうだけどやりがいがあるだろうな、などと考えていると、ちよいちよいと萌々が手招きする。ちよつと来い、という合図なのだろうと解釈し、クラスメイトに少し離れるとだけ告げて、それに従った。

「何？」

「宗輔とはどんな感じ？」

人の気配から遠ざかったところで話を切り出すと、萌々は逆に尋ねてきた。どうやら、どこかへ連れていこうというわけではなく、それを聞くのが目的だったらしい。

「どんなって……別に、何ともない感じかなあ……。今までと何も変わらないっていうか」  
あまりにも変わらなさ過ぎて、答えるのに照れも何も感じない。けれど萌々は、「まあ、そうだよねえ」とわかっていたかのように頷いた。

「友達の期間長すぎたしね。今さらどうこうもないよね」

「あー、うん。そんな感じ」

「でも、ちよつとは意識するようになったんじゃない？ 異性として、とまではいかなかったも、あいつのこと考える時間は増えたでしょ？」

それは確かにそうだ。どう接したらいいのか、どんなことをしたらいいのか、色々と考えてはいられない。

頷くと、萌々は小さく笑った。

「それでいいと思うよ。そうやって、少しずつでいいんだと思う」  
少しずつ。

そうやって宗輔に近づいていけば、やがて日向に対する気持ちも、決着がつくのだろうか。

けれど、葉月はまだ少し。

決着をつけてしまうのが怖いと思っていた。

そうして準備に追われていると、あつという間に文化祭当日が訪れた。

葉月のクラスはいくつかの班に分かれて模擬店を出す。その中で、葉月はわたあめを売る班になった。

その中でもさらに、午前を担当するメンバーと午後を担当するメンバーの二手に分けられる。葉月は午前を担当することになった。



「おー、葉月上手だね」

「まあねー。練習したし」

白だけでなく、ピンクや黄色など様々な色を取り揃えたわたがしは予想以上に評判が良く、生徒だけでなく子供連れの一般客にも人気だった。

「模擬店部門で売り上げ一位取るかもね」

「やー、取れたらいいけどね！ どっかのクラスのカレーがめっちゃ美味しいらしいじゃん。あれどこだっけ？」

「2年のどっかだった気がする。強敵だねー」

普段は話すことの少ないクラスメイトとも、話が盛り上がる。

準備期間、他のことに気をとられて悩んでいたのが嘘のように、葉月は思い切り文化祭を楽しんでいた。

ちようど客足が途切れたところで、葉月は携帯電話が振動しているのに気づいた。

「ごめん、メールだ」

その場をクラスメイトたちに任せて、メールを確認するため少しだけ屋台から離れる。

送信者は、宗輔だった。

『俺、午後から暇なんだけど。そっちは？ 空いてたら一緒に回らね？』

絵文字も何もない、いつもの簡潔な文面だが。

(……これは、デートのお誘いのなアレですかね……)

そう思った直後で、「デート」という単語がらしくないと思った。けれど、そういうことなのだろう。一応、形的には付き合っているわけなのだし。

特に、他の人との約束があるわけでもない。葉月はすぐに、『いいよ』と返事を送った。

黒幕の張られた体育館から外に出ると、その明るさに目がくらんだ。

「うおっ、まぶしっ」

それは宗輔も同じだったようで、小さく叫ぶとぎゅっと目を閉じている。葉月は手で日光を遮りながら、目が光に慣れるのを待った。

「意外に本格的だったね。萌々も役にびったりはまっていたし」

「だなー。アイツちっこいから、ああいう役似合うな」

萌々のクラスの劇は、西洋のとある旧家で起きたスキヤンダルを描いたものだった。萌々はまだ幼くお転婆な、ヒロインの妹役を演じていた。

「うんうん。次の年はあたしも劇やりたいかも。模擬店も楽しいけど」

「おっ、なんかやりたいヤツでもあんの？」  
「具体的なのはまだないけどさー……」

そんなことを話しながら、二人は移動し始めた。

時間的には十五時を少し過ぎたところだが、二時間ほど前に合流して昼ごはんを食べたばかりなので、まだお腹は空いていない。

「なんか見たいところある？」

「んー、色々見て回りたいけど、特にコレ！　つてのはないかなあ……」  
「んじや、適当にブラブラすつかあ」

宗輔の提案に特に異論はなかったたので、彼とともにあちこち見ていくことにした。

特にあてもなくふらふらと歩き、そういえば展示的なコーナーもあったなあ、などと考えてよそ見していると、うっかり前から歩いてきた生徒にぶつかりそうになった。

「うおっと」

間一髪で、宗輔が腕を引いてくれる。

危ういところで、生徒を避けることができた。

「ちゃんと前見て歩けよー」

しようがない、といった風に苦笑を浮かべながら、宗輔はそのまま葉月の腕を掴んでいった。

別に、こんなことは中学の時からよくあった。

けれど今は、葉月の腕を掴む宗輔の手のひらが、少しだけ緊張しているのがわかる。

(……頑張ってくれてる、のかな)

宗輔も。

葉月と、関係を変えようとして。ちゃんと恋人らしくなって、葉月がいつか日向のことを忘れられるように。

だとしたら、葉月はその思いに答えるべきなのだろうか。葉月も、変わるように努力をしなければ。

「……葉月？」

ふと耳に入った、凜とした声。小さな声だったが、不思議とはつきりと聞こえてきたのだ。だ。

声のした方に顔を向けると、ボブカットのきれいな少女が足を止めて葉月を見ていた。「依織……っ？」

見覚えのある顔に、葉月も思わず立ち止まる。彼女の腕を掴んでいた宗輔も、引つ張られるようにして足を止めた後、その手を離れた。

「嘘、来てたんだ……！ 一人？」

「ええ」

頷いた彼女の名前は、宇佐美依織。私立の女子高に通っており、葉月とは夏休みの間のバイトで知り合った。

新学期が始まってからは連絡をとりあうこともなかったのだが、まさかこんなところで再会するとは思わなかった。

「あ、それ家庭科部のクッキーだっけ。買ったんだ」

「うん。おみやげにしようかなって」

依織は、オレンジ色の小さなラッピング袋を手に使っていた。クラスだけでなく部活で出し物をしているところもあり、おいしいと評判の家庭科部のクッキーは、葉月のクラスメイトにも持ち帰り用として買っている子が何人かいた。

あたしも買って帰ろうかなあ、などとたわいのない会話を交わしていると、ふと依織の視線が横にずれた。その視線の先が宗輔であることに気づき、葉月は彼を振り返る。

「バイト仲間だよ」

簡単に依織のことを紹介すると、宗輔は納得がいったように顔をほころばせた。

「ああ、なるほどな。中学にはいかなかった顔だよなー、と思つてよ」

どうも、と小さく頭を下げた宗輔に、依織も会釈して返す。それから、彼女は葉月と宗輔を何度か見比べた。

その様子を不思議に思っていると、依織はかすかに首を傾げて、  
「いつの間に彼氏できたの？」  
と尋ねてきた。

「そんなんじゃないよ」

咄嗟だった。咄嗟に、葉月は否定していた。照れ隠しだとか、そういったわけではない。依織は、葉月に別に好きな相手がいることを知っているはずだ。その彼女に、「宗輔と付き合っている」だとか、そんな風に思われるのは。なんだか、責められているようで。依織のこちらを見る視線すら、責めているように見えてしまつて。

けれど、否定した後には我に返つた。  
少なくとも、宗輔と葉月は今、形だけとはいえ付き合っているはずだった。彼はちゃんと、告白してきてくれたのだから。

どうしよう、と宗輔の顔を見られずにいると、その空気を察したのかさうでないのか、  
「じゃあ、私はそろそろ行くから」

と依織がその場を離れていった。

手を振って彼女に別れを告げた後、どうしようかと再び黙りこむ葉月にかげられたのは、予想に反して先ほどと全く変わらない調子の宗輔の声だった。

「俺らも行くか」

驚いて顔を上げると、まるで何も気にしていないというように、宗輔がほほ笑んでいる。それにぎこちなく頷いて返すと、彼は歩き出した。

葉月の考えすぎだろうか。

「なあー、そろそろなんか食う？」

相変わらず立ち止まったままにいる葉月に、少し先で振り返った宗輔が尋ねてくる。

「あっ……、う、うん！」

慌てて駆け寄ると、

「俺、焼きそば食いたくなってきた」

と宗輔が笑う。曇りのないその笑顔に、葉月はますます申し訳なくなるのだった。

なんとなく妙な雰囲気になってしまった。

というより、葉月が一方的にそんな雰囲気になっているだけなのだろう。

(……ダメだ、こんなんじゃ……)

宗輔が焼きそばを買う後ろで、葉月は密かにスカートの裾を握りしめる。

今は、完全に宗輔に甘えてしまっている状態だ。このままでは良くない。気づかないうちに、もっと彼を傷つけてしまうかもしれない。

「葉月？ どした？」

知らず知らずのうちに険しい顔をしていたようで、振り向いた宗輔が不思議そうな表情を浮かべていた。

「う……ううん、なんでもない。買った？」

「おう。どっか移動すっかー」

「そうだね。中庭にいっぱい座るとこ設置されてたけど……空いてるかな」

「ま、行ってみようぜ」

屋台の並ぶ道をぬけると、人が一気に減ったように感じられる。そのまま中庭に向かうとしたところで、宗輔がいきなり声を上げた。

「あれ？ 白石じゃね？」

彼の視線を追うと、前方から歩いて来る一人の男子に目が止まった。私服なので、一般客らしい。よく見ると、それは葉月にも見覚えのある人物だった。

「あ、ホントだ。白石くんだ」

彼は中学時代の同級生で、葉月は特別親しいというわけではなかったが、宗輔が話しているのをよく見かけた気がする。

相手も葉月と宗輔に気がつき、すぐに笑顔を浮かべた。

「おー！ 青田に澤村じゃん！」

「久しぶりだなー！ 何、遊びに来てたわけ？」

「そー。そしたら懐かしい顔いっぱいあってさー」

「そりゃ、第一中を卒業したヤツなんて大半がここ通ってるからな。当たり前だろ」

宗輔の言う通り、公立の中学校を卒業した者は、同じく公立である中央高等学校に進学

することが多い。白石は私立の学校に進学したらしいが、そちらの方が少数派なのだ。

「ああ、そういやさ。知ってる？ 塚本の話」

唐突に白石が切り出した話には、葉月の心臓がドクンと鳴る。

宗輔も一瞬ちらりと葉月を伺ったが、すぐに表情を取り繕って白石に向き直った。

「……塚本が、どうかしたか？」

「いや、アイツこつちには来てないから、てつきり中高に行ったもんだと思ってたけど、違うらしいじゃん」

白石の言う「こつち」とは、彼の通っている学校のことだろう。

「ああ、そうだな。中高にも来てない」

「ふーん。てことはアレかね、やっぱ市外の高校に通ってるってことなんかね。そんでそれに合わせて引っ越したとか」

一人納得したように、白石は頷く。

(あれ?)

引っ越した?

「……白石くん、日向の家知ってるの?」

「んあ? いや、家は知らねー。けど、俺の親父が塚本の親父と知り合いでさ」

「えっ」

初めて聞いた重大な事実には、思わず宗輔と揃って声を上げた。葉月は思わず、白石に詰め寄る。

「そっ、それで? 引っ越したって?」



「あ、知らなかったか。んー、なんか親父から聞いた話なんだけどさ、引っ越したらいいんだわ。そんな親しい知り合い、ってわけでもないらしいから、引っ越し先の場所までは親父も聞いてねえつつってたけど」

どういことだろう。

引っ越したということは、白石の言うように市外に行った可能性が高いだろう。

(でも、「引っ越す予定はない」って……「市内にいる」って……言ってたのに……)

そう、日向と最後に会ったあの日、彼はそう言っていたのだ。このN市から離れることはない。

(……あれは、嘘だったの……?)

もちろん、予定が変わったということもあるのかもしれない。親の都合で、急に引っ越さざるを得なくなることもあるだろう。

けれど、葉月は日向のあの言葉を信じてきたのだ。絶対に彼は近くにいて、そう信じていることで日向への気持ちをつないでいた。

(……どうしよう……)

気持ちだが、どんどん揺らいでしまう。

その時、肩をポンと優しく叩く、大きな手のひらがあった。

「そっか。また他のやつのも色々教えてくれよ」

「おー。てか今度遊ぼうぜ！」

「そだなー。久々にな」

宗輔はごく自然に白石との会話を終わらせ、「またなー」と去っていく彼を見送った。

「……移動すつか」

促す宗輔の言葉に、葉月は無言で頷いた。

宗輔についていく形で向かったのは、中庭ではなく校舎の中の一室だった。普段使わなような備品が置いてあり、生徒は滅多に足を踏み入れない部屋。葉月も入るのは初めてだ。

文化祭に湧き立つ学校中から切り離されたように、その空間だけは静かだった。人気のない場所を選んで、ここに連れてきてくれたのだろうと思った。

埃っぽい部屋の中、物が大量に積まれた机の隅に、座れそうな空間を見つけて腰掛ける。宗輔は窓際に寄りかかり、口で割り箸を割った。

「食う？」

「……うん」

ものを食べるような気分ではなかった。

うまいのになー、などと言いながら宗輔は焼きそばを口に運んでいる。葉月は深いため息を吐いてうつむき、組んだ両手を額に当てた。

日向が、市内にいない。決して低くはないその可能性を付きつけられ、葉月の心は深く沈んでいた。

白石の父親が日向の知り合いだというなら、引越し先を聞き出してもらおうという手もあ

る。むしろそれは真っ先に考えた方法だ。

けれど、葉月はそれが失敗に終わるであろうことを知っている。一度、日向の親戚だという女性の家までたどり着いたのだが、それより先は彼女も口止めされていたからだ。

だから恐らく日向の父親も、わざと引越し先を言わなかったのだろう。

(……市外なんて、どうやって探したらいいの……)

途方もなく感じられて、ぎゅっと目を閉じる。

「……俺さあ」

その時、無言で焼きそばを食べていた宗輔が声を発した。

顔を上げると、彼は窓の外を眺めていた。

「さっきのお前の様子見て、確信したんだ」

「……さっき？」

いつのことだろう、と葉月が首を傾げていると、

「ほら、あのバイト仲間だつて女の子に会った時」

そう言つて、宗輔は残り一口になった焼きそばをかきこんだ。

そういえば。白石に教えられた事実が衝撃的で、すっかり忘れてしまっていたけれど、あの時宗輔に申し訳ないことをしてしまったのだった。

「あ……その、ごめんね……」

「ん？ いやー、別に謝ることじゃねえけどさ」

プラスチックの容器に割り箸を入れ、それを傍らに置くと、宗輔は膝の辺りでゆるく手を組んだ。

「俺さ、あれでハッキリわかったんだよ」

「……何を？」

尋ねると、彼は窓の外に向けていた視線を、葉月に移した。

「俺分たたた、よどさは葉月にとつて、友達以上の存在にはなれないってこと」

そう言つて口元に緩い微笑を浮かべる宗輔。

その表情が、どこことなく寂しげに見えて、葉月は口を開こうとした。けれど、言葉が出てこない。

「なんていうんだるな……。違うんだよ、やつぱり」

頭をかきながら、宗輔は再びそっぽを向いた。

「……宗輔……」

ようやく葉月が口にできたのは、その名前だけだった。

外の喧騒が、切り離されたようなこの空間に、ひっそりと響く。

「……でも、さっきの白石の話。……アレでお前、また揺れてるだろ」

完全に見透かされていた。

葉月の無言を肯定と受け取り、宗輔は言葉が続ける。

「お前次第だよ。……お前が、塚本のことを諦めたいって思うなら、俺はお前の気持ちが変わるまで、彼氏として傍にいたいと思う」

「……友達以上には、なれないのにな？」

「おっ」

ためらいなく答える宗輔が、なんだか眩しく見える。

「……なんでそこまでしてくれるわけ？」

「さあ？ 惚れた弱みじゃね？」

なんつって、と笑う宗輔は、吹っ切れたような顔をしていた。諦めている、ようにも見え  
えた。

つられたように笑ってから、葉月は俯く。

『葉月次第』

宗輔は、選択肢を与えてくれた。選べと。

いい加減、葉月はここでちゃんと決断しなければいけないのだと。そう思った。

\*\*\*

中学時代の文化祭は、高校のそれとは大きく違い、展示や劇、合唱などがメインで、屋  
台などは出ていなかった。

そのためあまり祭りといった雰囲気はなく、盛り上がりも高校に比べると今ひとつだっ  
たような記憶がある。

けれど文化祭当日、日向はやたらワクワクしている様子だった。

「葉月葉月、三時から吹奏楽部の演奏だつて。見に行こうよ」

薄っぺらなパンフレットを開きながら、日向はにこにここと葉月に笑いかける。

「別にいいけど……」

「やった！ あとね、パソコン部がなんか面白いことしてるらしいって聞いたんだ」

いつになくはしゃいだ様子の日向に、葉月は思わず苦笑を浮かべた。

日向が嬉しそうにしているのは、葉月も見ていて嬉しい。だが、中学校の文化祭でそこまでテンションが上がったりするものなのだろうか。

「日向、そんなに楽しい？」

「楽しいよー。いつもと違うから」

にここに、と相変わらず日向は笑顔を崩さない。

「まあ、そうだねえ。授業ないってだけでもやっぱり嬉しいよね」

「うん。特別な感じするよね」

スキップでもしそうな日向の少し後ろを歩きながら、葉月は彼の背中を見つめていた。

「普通の日も大事だけど、やっぱり特別な日は特別だから。記憶にも残りやすいし」

「うん？ うん、そうだね」

「だから、忘れないように。今日はめいっぱい楽しみたいんだ」

そう言っつて振り返り、彼は笑った。

その時葉月は、またいつものように日向が少し不思議なことを言っているなと思ったけれど。

(……あたしも、忘れないでいたいなあ……)

こんな楽しそうにしている日向の姿を、いつまでも覚えていたい。

そう思いながら、彼の笑顔を見つめていたのだった。

\*\*\*

今にして思えば、日向にして思えば、彼ば、彼はあの時からすでに、中学校を卒業したからあの時からすでに、中学校を卒業したら姿を消すことを決めていたのかもしれない。

「忘れないように、というあの言葉は、彼にとって思い出作りのようなものを意味していたのだろうか。」

（……忘れない、ように……）

葉月は、あの時確かに思ったのだ。

その日の日向の姿を、忘れないでいたいと。

「……宗輔」

葉月が過去のことを回想している間、宗輔は急かすこともなく、ただ黙って待っていてくれた。名前を呼ぶと、窓の外を見ていた彼がふり返る。

「……あたし、もう日向のことは好きじゃないのかもしれない」

意外とすんなりと、それを口にすることができた。

そこに、まだ確信がないからなのだろうか。

「でも、今ここで諦めたら、きつと後悔すると思うんだ」

一年。日向に与えられたその猶予は、まだ残されている。

「中途半端なのは嫌だ」

だからこれ以上、宗輔に甘えることはできない。彼はきつと、本当に傍にいてくれる。葉月が完全に日向のことを吹っ切る、その日まで。

けれど宗輔自身が気付いてしまったように、葉月もまた気付いていた。

きつとこれから先、どんなに近くにいてくれても、葉月が宗輔のことを好きになることはない。友達以上には、見られない。

それがわかっていながら、彼を縛り付けることはできなかった。

「……そっか」

つぶやいて、宗輔は立ち上がった。

「ホントは、はじめつけたかったの、お前じゃなくて俺の方だったのかもな」

そう言って、ふっと笑う。

静かな笑みだった。

「じゃあな」

プラスチックのゴミを手にすると、宗輔は葉月に背を向け、部屋を出ていこうとする。

「あ……」

途端に、不安が押し寄せた。このまま、友達に戻れなくなってしまったら。

しかし宗輔は、ドアのところまで一度立ち止まると、

「また、明日な」

振り返らないまま、そう言って片手を上げたのだった。

一人きりになった、埃っぽい部屋の中。目を閉じて、気持ちの整理をしようとする。



なんだか泣きたくなくなったのは、宗輔の優しさのせいか、彼の気持ちに答えられなかったことに対する罪悪感か、これから先のことに對する不安か。

(……あたしは、日向に聞かなきゃいけない)

告白の答えより、何より、彼が消えたわけを。

それを知るまでは、納得できない。

(もう、揺らがない)

そう誓う。

忘れてなんか、やらない。

\*\*\*

誰も出てこないことはわかっていたが、その家に入る時、依織はいつも玄関の扉を軽くノックしていた。

家というよりは、小屋とでも言った方が正しいような、小さな小さな木造の建物。

靴を脱いで中に入る。足音を忍ばせ、その部屋に近づいた。

「……起きてる?」

ささやくように尋ねると、小さく「うん」と返ってきた。そこでようやく、依織は音を忍ばせるのをやめる。

「……夕日、眩しくない? カーテン閉める?」

「ううん、大丈夫」

答えた少年が、それまで体を横たえていた布団から身を起こした。

「……今日、別の高校の文化祭、行ってきたの」

「文化祭……そっかあ、もうそんな時期だね。楽しかった？」

「ええ。……それで」

肩に提げていた鞆から、一つの包みを取り出した。オレンジ色のラッピング袋。

「お土産。クッキーよ」

「わあ」

差し出されたその包みを、彼は目を輝かせながら受け取った。

「ありがとう、依織」

にここに、と嬉しそうに笑う彼に、依織も目を細める。

「文化祭かあ……懐かしいなあ」

手のひらの上に乗せたオレンジ色の包みを眺めながら、少年はしみじみと呟いた。依織は座布団を引き寄せて座る。

「……やっぱり、楽しかった思い出とかあるの？」

「うん」

依織の問いかけに即答してから、彼はそっと目を伏せた。

「まだ、忘れてないよ」



# あたりまえのこと。

水面浮月

Illustration: 新月竜

※ 『あたりまえのこと。』は作者急病のため休載させて頂きます。

# ターニング ポイント

諸星崇

Illustration: 橋ぼん

**あらすじ**

ヒロキはこれといってやりたいこともない、平凡な高校生。高校入学を機に始めたアルバイト先で、ダンサーを目指すヤヨイと出会う。  
曲者ぞろいのバイトの先輩たちにも囲まれて、なんでもないヒロキの毎日が、少しずつ転換点に向かっていく。



**ヤヨイ**

私立優華女学院高等部の三年生。ダンサー志望で、アルバイトの合間に練習にはげむ。無口で、感情表現が小さい。



**ヒロキ**

市立中央高校の一年生。高校入学を機に駅前のショッピングモールでアルバイトを始める。ごくごく平凡な少年。

第四話 少し先のステージ

1 大学見物

春先と秋口、繁華街では一時的に大学生の姿が増える。

前者は新入学シーズン。サークルや部活動が新人を勧誘するために精力的に活動する。

そして、後者は学園祭シーズン。年に一度のお祭りとその準備期間が学生たちを盛り上げ、街へとくり出させる。

大学の学園祭、いわゆる学祭は高校までの文化祭とはレベルがちがう。

校舎と教室、体育館あたりで学生たちが身の丈に合った出展を行う文化祭とちがって、学祭は広大なキャンパスすべてで、お金も時間も大量につき込んだ出展が山のように開かれる。

高校生はこづかいや授業の制約をいろいろと受けるが、大学生はそれらを自由にコントロールできる。一般の人々も基本的に自由に参加できるため、学祭は地域の行事の一つとしても数えられている。

などと話を聞いてきたが、実際に目の当たりにしてみると、学祭というのはヒロキの想像をはるかに超えた空間だった。

「M大祭へようこそー！ はい、こちらパンフレットです」

「ただいま焼きそば半額タイムセール中ですよー！」

「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい！ さあさあそこ行くお嬢さん！ いい手相をしていらっしゃる！ お顔を見ただけでわかっちゃう占いハウスは階段上！」

正門を入った広場は、どこからこれだけの人が集まったのかというほどのにぎわいだ。体育祭で見るような大型のテントがいくつもならび、「運営本部」の看板が大きくかかげられている。

そこにいる三分の一は、着ぐるみやら和服やら学ランやら、なにかしら目立つ服装をしていた。それがまったく違和感をあたえない。

わき上がるような熱気とざわめき、遠くから聞こえてくる激しいロックミュージックが、すべてを包み込んで「祭」という一言に集約しているのだ。

「すごいね」

「すごいですね……」

正面の大階段にほどこされた巨大なクジラのモザイクパネルを前に、ヒロキとヤヨイは呆然とつぶやいた。

どこかのテーマパークか、公共のイベントにでも迷い込んだような気分だ。ここが仮にも学校であるとは、到底思えない。

ヒロキはこれまで大学の敷地に入ったことはない。高校にも今年、入ったばかりなのだ。



N市に大学はないので、今まで無縁の場所だった。

テレビやネットで見るかぎり、閑静で人が少ない場所だという印象を受ける。無機質な建物が建ちならび、ところどころに緑があつて、その間を私服姿の学生が歩いているというイメージだ。

実際には高校とは比較にならない数の学生がいるらしいが、そんなふうには思えない。あとは難しい研究や講義をしているらしい、ということ聞いたくらいだ。

「大学なんて、そんなまともなところじゃないよ。ためしに見に行つてみたら？」

ところが、先日。バイト先のメカニックで唯一の現役大学生であるムロフシは、ヒロキの想像を一蹴してしまった。

「見に行くつて、入つていいんですか、大学？」

ムロフシがあまりにあつさり言うので、ヒロキは思わず聞き返した。

「講義はばれるかもしれないけど、敷地ならはつきり言つてフリーだよ。制服着てたら止められると思うけど、私服なら大丈夫だし、もし止められても見学だつて適当に言えばいい。それに、今週末なら誰でも入れる」

「今週末なら？」

「学祭だよ。うちのは一般開放してるから」

学祭という単語はヒロキも聞いたことがあつた。大学で一年に一度、文化祭のような行事が開かれるらしい。

もつとも、文化祭とは比較にならない規模だということだが、それは想像の中でしかなく、ヒロキには実感が得られなかった。

「ヒロキもそのうち受験とかするだろうし、キャンパスを見とくのもいいかもしれないね。高校とは別世界だから、いろいろ参考になるかもよ」

ヒロキは高一なので、まだまだ受験のことは考えていない。両親も先生も、そこまでするさくは言わない。

ただ、大学には興味はある。学祭というのも一度はのぞいてみたいと思っていた。

「学祭か。いいっすねー。ナンパし放題なんスよねー。みんな浮かれてっから」  
「まあ、そういう場でもあるよね。たしかに」

横で聞いていたカワナの言葉に、ムロフシが苦笑をもらす。そして、ふと思いついたように言った。

「そういえば、ヤヨイちゃんも行くって言ってたな。一人で」

十分後、ヒロキはバイト仲間のヤヨイのもとへ走って行って、いっしょに学祭に行く約束を取りつけた。

そんなこんなで、ヒロキとヤヨイは学祭初体験の日をむかえたわけである。

「ヤヨイさん、なんか見たいのがあるんですよね？」

「うん。メインのステージでプロのダンスチームのショーがあるの。それが見たい」

高三のヤヨイはダンサーという、ちよつと変わった進路を志望している。進学先には東京の専門学校を考えているそうだ。

今のところ、ヤヨイに受験の予定はない。だが、ムロフシたちにすすめられて、見物だけでもしてみようという気になったらしい。

今年の学祭の目玉として、N市ではなかなか見られないプロダンサーのチームが来ると

いうのも決め手になったようだ。

入り口でもらったパンフレットをめくると、会場の案内とショーの開始時間がでかでかと書かれていた。

コピー紙をまとめたような安いものではなく、カラー印刷で企業の広告まで入った本格的なものだ。こんなところにも、高校までの文化祭とは明らかな差を感じる。

「ヒロキくんは？ なにか見たい？」

「えーと……」

いろいろと見てみるが、数が多すぎて逆によくわからない。こんなにたくさん出展するネタがあるのかと、感心するほどだ。

何度かパンフレットを読み直して、ヒロキは音を上げた。

「よくわかんないんで、実際に回ってみるってことで」

「わかった。そうしよう」

なんだか情けない返答になってしまったが、ヤヨイはうなずいてくれた。

中央ステージのショーまでは三十分ほどある。とりあえず、ヒロキとヤヨイは腹ごしらえから始めることにした。

2 ちがいのわかること

ヒロキは芸術の類にはうとい。

はやりの歌を聴いて、いい歌だなと思うことはある。映画を見て感動することもある。携帯音楽プレーヤーもそのうちほしい。

けれど、ダンスの良し悪しはちよつとわからない。テレビの歌番組などでたまに見てみるが、正直なところ、うまいな、どうか、そのあたりの感想がせいぜいだ。

そして今日、はじめて生でプロのダンスを見たのだが。

ヒロキの認識は一変した。

「すげえ」

それ以外の言葉が出てこない。圧倒された。その一言につきる。

メインステージの周囲は大歓声に包まれ、それが一時もやむことがない。軽快な音楽に合わせて刻まれる、リズムカルなステップ。男女五人によるフォーメーションは一糸も乱れず、見るものをステージの上に引き込んでいく。

ヒロキが目をうばわれたのはその表情だ。全身を使つた絶え間ない動きは、素人のヒロキから見ても激しい運動だとわかる。

けれど、ステージの上にいる人は一人として苦しそうなそぶりも見せない。それどころか、見ているだけで心が浮き立つような、はじけんばかりの笑顔を向けてくれる。それもまた、ステージの上の世界に引き込まれる大きな要因になっていた。

「すてき。かっこいい」

となりではヤヨイが食い入るようにステージに見入っている。ほおが紅潮し、大きな目はまばたきも忘れていた。

ヤヨイは感情の起伏がとぼしい。普段から口数も少ないし、表情もあまり変わらない。だから、こういうヤヨイを見るのは新鮮だ。彼女があこがれや好意をはつきりと出すことはほとんどないからだ。

気づけば、ヤヨイは音楽に合わせて身体をゆらしていた。毎晩、バイトの合間に駐車場のすみで練習にはげんでいる彼女のことで。身体がだまっていけないのだろう。

いつか、ヤヨイもあんなふうになりたてだろうか。こぶしを突き上げ、観客を引きつけて笑顔をはじけさせるのだろうか。

ヒロキには想像するしかない。ただ、もしそうなったらいいな、と、素直に思える自分がいた。

ヤヨイがそんなふうにあつてくれるのなら、見てみたいと思った。

メインステージの前半の目玉イベントは、大盛況のうちに終わった。拍手と歓声の中、ダンスチームは両手を大きくふって退場する。放送委員会のMCがかわって壇上に現れ、観客はそれぞれに感想を口にしながら解散していった。

「すごかったですね」

「うん」

興奮が冷めやらないのか、ヤヨイがはずんだ声でうなづく。一時間ほどのステージだったが、どの曲のどのダンスの動きがすごかったか、ヤヨイは正確に思い出してヒロキに語った。

頭からラストまで一通り語って、ようやくヤヨイは落ち着きを取り戻す。

「なんだか、わたしばかり盛り上がっちゃった。ごめんね」

「いいですよ。オレも楽しかったし」

いつもとちがうヤヨイの一面も見られたし。ヒロキは心の中でつけ加えた。

大きなイベントが一つ終わったことで、学祭も少し落ち着く時間帯に入ったようだ。昼食どきということもあり、目下の主役はステージから出店に変わった。

あちこちに人だかりができて、思い思いの食べ物や飲み物を口に運んでいる。

逆に、展示物などのコーナーは少し空気が出ているようだ。

「今度はヒロキくんの見たいところ、さがそう。つき合う」

「メシ、いいですか?」

「まだお腹すかないし、あとになれば安くしてもらえるから。たぶん」

けっこう計算高いヤヨイのセリフに、ヒロキは目をしばたいた。ヤヨイはくすつと小さく笑う。本当にめずらしい一面をよく見せてくれる日だ。

とりあえずヒロキはあたりを見回してみた。

「うわ。あれ、すごいな」

すぐに目につくものが一つあった。

自動車部と書かれたのぼり。その下で、自動車が丸ごと一台、解体されていたのだ。

「ああいうのが いいの?」

ヒロキの視線を追ったヤヨイがたずねる。ヒロキはうなずいた。

「ちよつと興味あります」

「そうなんだ」

夏、ヒロキとヤヨイはバイト先の先輩たちに連れられて海に行った。そこでヒロキはど

ういうわけか、もと走り屋の先輩の助手席に乗ってしまった。

もちろん、ヒロキはまだ免許を持っていない。だが、少しばかり車への興味を刺激されたのはまちがいなかった。

それに、運転もそうだが、その仕組みが直接見られるというのはなかなかさそうだ。

「お、いらっしやーい」

車が置かれているのは敷地の端にあるプレハブのガレージだった。わきではつなぎ服の男たちがのんびりとコーヒーを飲んでいる。ひざや胸のところどころに油がしみている。首にかけて、額に巻いたりしたタオルがなんとも味があつた。

「あの、これって、みなさんがばらしたんですか？」

「そうだよ。マグロならぬ車の解体ショー、なんてね。工具が使えるば、そんなにむずかしいもんでもないし。車、好きなの？ 少年」

「バイト先でちよつと機械のことか教えてもらつてて。おもしろそうだったんで」

「へー。じゃあ、ちよつと下、もぐつてみる？」

一人が奥から、取っ手のなくなった台車のようなものを持ってきた。自動車の修理のときなどに、背中を乗せて車の下にもぐり込むための台座だ。

ヒロキはそれに寝そべって、車の下を見せてもらった。めつたに、というより、まず見ることにない光景だ。それだけでわくわくする。

「このクランク、変わった形してますね」

「うお、わかる!? そうなんだよ、ここの伝達系がうまくできてきてさ！」

なにげなく気づいたことを口に出したら、すごい勢いで食いつかれた。エンジンから後

輪への動力の伝え方に工夫を凝らしてあるらしい。

いかにパワーを出すか、自動車部の面々が知恵をしばって部品を改良したのだそうだ。自動車部というのはヒロキは知らなかったが、なんでも他の大学とのレース対決や工学部との技術協力などを行っているらしい。免許を取れる大学生ならではの活動だ。

ヒロキが機械系の話がわかると知って、部員たちがわらわらとむらがつてきた。足回りがどうか、ステアリングがどうか、矢継ぎ早に説明してくれる。

見た目ははでな展示だが、なかなかこんな話ができる人は来なくて退屈していたらしい。

そんな専門的な話が、おおかた理解できたのがヒロキには意外だった。バイト先でスパナを使ったり、モーターを解体して中を清掃したり、そんなことをくり返しているうちになんとなく知識が身についていたのだ。

車の裏側など、少し前までは見たいとも思わなかったのに、今はそのしくみを考えながらさわっている。不思議な感覚だった。

ひとしきり車体の構造を教えてもらい、何ヶ所かハンマーでたたいたりして、ヒロキは車の下から出た。お礼を言うと、自動車部の人たちは明るく答えてくれる。

近くのベンチに腰を下ろしていたヤヨイのもとへ、あわてて走っていった。

「すみません」

「ううん」

ヤヨイはきげんをそこねた様子もなく、ヒロキの顔をじっと見つめる。どこか、まぶしそうな目をしていた。



ヒロキは思わず、自分の顔に手を当てる。

「なんかついてます?」

ヤヨイは小さく首を横にふった。

「そんなんじゃない。ただ、男の子だなんて思っただけ」

「?」

なんだかよくわからないが、放ったらかしたことを怒っているわけではないようだ。それならいいやと、ヒロキも深く聞くのはやめにした。

さて、これからどうしようか。

そろそろ腹ごなしでもしようかと屋台のむれを見渡したとき、ヒロキたちは背中から声をかけられた。

「こんにちは! 高校生さん?」

ショートカットの女性が明るい笑顔で立っている。蛍光色のジャンパーは、会場内ではほらと見かけるそろいものだ。腕には「実行委員」と書かれた腕章をつけている。

にこにこ楽しそうな女性は、手に持ったビラをヒロキに差し出した。

「M大祭によるこそ。お昼の予定は決まったかな? よかったらこれ、見に来てね」

A4サイズのコピー用紙の中央には、太字ででかかといイベントの名前がおどつていた。

『ミスM大コンテスト』。

なんともわかりやすい、見ただけで内容がわかるタイトルだ。

「学祭恒例、定番中の定番、美女がいっぱい、美少女もいっぱい! 目の保養になるよ。

ポロリはないけどね。ごめんね！」

うたい文句なのか、実行委員の女性はすらすらとテンポよく宣伝をする。

ヒロキも男だ。ミスコンという言葉には勝手に心惹かれるところがある。特に、大学のミスコンと言われると意味もなくすごいイベントに思えてしまう。

高校生には反射的なことなのだ。しかたない。

(この人も出るのかな)

なんとなく、ヒロキは目の前の女性の顔をながめた。快活で明るい話し声がよく似合う、愛嬌のある人だ。好感度は高い気がする。

そんなことを考えていると、背筋に冷たい視線を感じた。

「楽しそうだね」

ヤヨイが普段よりさらに無表情になってヒロキを見ている。目つきはいわゆる半眼というやつだ。ヒロキは失態をさとした。

「あはは。カノジヨさんにはつままないよね。そんなときはこれ！ はい、どうぞ」

そこへ助け舟として、二枚目のビラが差し出された。これ幸いと、ヒロキはそこに飛びつく。

同じく白黒印刷のビラだが、書体がちよつときつくなっている。真ん中にはこう書いてあった。

『ミスターM大コンテスト』。

「え。なんですか、これ？」

「あれ、わかんない？ こっちはミスコンだよ。男子のだけど。みんなで女装して、トッ

プを決めるの。盛り上がるよ」

なんでも一番かつこいい男性ではなく、一番かわいい男性を決めるコンテストなのだそうだ。

真剣に女性と見まがうような姿で現れる人もいれば、ボディビル部がセーラー服を着ただけで登場することもあり、妙なところで盛り上がりる名物イベントらしい。

こわいもの見たさというのだろうか。これでも集客力は高いのだそうだ。

「こんなものもあるから、気軽に楽しんでね。よかつたら……」

と、そこで実行委員の女性は不意に言葉を途切れさせた。笑顔が消え、ほおがいそがしくけいれんする。

片手が下腹のあたりをおさえた。

「ご、ごめん。ちょっとお腹の調子悪くて。あ、痛たたた……」

うめくように言うと、女性はそのまましゃがみ込んでしまった。歯を食いしばり、額には脂汗がにじんでいる。どう見ても普通の腹痛ではない。

「だ、だいじょうぶですか？」

ヒロキは思わず、月並みな言葉をかけてしまった。ヤヨイもとまどいながら、女性の横にひざまずく。片手がひらひらと弱々しくふられたが、返事はなかった。

悪いことに、人の流れとはずれた場所にいたので、近くに気づいてくれそうな人がいない。

誰か呼ぶべきか。それとも救急車か。けれど、ヒロキには119番をダイヤルした経験はない。ヒロキは頭が真っ白になってしまった。

「あれ？ ヤヨイちゃんとヒロキちゃん？」

こてこての関西弁が意識を引っ張り戻してくれたのは、そのときだった。

Tシャツとジーンズという、ラフきわまりない服装をした浅黒い肌の男性が近づいてくる。太い眉と少し濃い顔立ちには、ヒロキもヤヨイも知っている相手だった。

「クスダさん！」

「なんや、奇遇やな。来とったん？」

メカニックの先輩であるクスダは、いつものように人なつつこく笑いかけてきた。ちがうのは、手にカメラを持っていること。写真用ではなく、映像を撮るためのものだ。家庭用にしては少し大きい。

ただ、今のヒロキたちはそこに気を回すよゆうはない。クスダもすぐにうづくまる女性に気づき、真剣な表情に変わった。

「どないしたん？」

「それが、急に苦しそうになっちゃって」

クスダは女性に声をかけ、返事もできないことを知ると、すぐに立ち上がった。

「すぐ誰か呼んでくるさかい、ちよお待っととき」

それだけ言い残して、会場のほうに走っていく。

ほどなく、女性と同じジャンパーを着て、腕章をつけた一団が戻ってきた。ヒロキとヤヨイが立ちつくす前で、大学生たちはきばきと状況を整理し、携帯電話を取り出す。

やがて、遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

3 代役出場

「盲腸やて。すぐに処置したから全然心配いらんてさ」

クスダの言葉を聞いて、ヒロキとヤヨイはほっと安堵の息をついた。

二人がいるのは、メインステージ近くにあるM大祭実行委員会の本部テントだ。さわぎのあと、クスダにつれてきてもらった。

さいわい、ヒロキたちの前で倒れてしまった女性は、軽い症状ですんだらしい。

「いやー、助かったわ。ありがとね、二人とも」

「いえ、こちらこそありがとございました」

礼を言うクスダに、ヒロキは頭を下げ返した。

クスダがたまたま見つけてくれてよかった。ヒロキたちだけではおろおろするばかりで、きちんと対応できなかっただろう。

「そういえば、クスダさんはこんなところでなにしてるんですか？」

「ああ、ちよいと仕事よ。今は休憩中」

言いながら、クスダはわきに置いていたカメラを取り上げた。

さつきも持ち歩いていた、映像用の大きなものだ。それをおどけた様子でヒロキとヤヨイに向ける。ヤヨイは苦手なのか、さつとヒロキの背後にかくれた。

「見習いやけど、今日のカメラマンよ。知り合いに頼まれてん」

ひょいっとカメラを下ろす手つきは手慣れたものだった。

N市のショッピングモールでアルバイトをするかたわら、クスダは映像関係の事務所にも所属していると聞いている。具体的にどんなことをしているのかはよく知らなかったのだが、本当に撮影にたずさわっているらしい。

これもまた、ヒロキには無縁の世界だった。クスダがテレビに関わったりするのだろうか。とりとめのない想像がヒロキの頭をよぎる。

「せや。二人とも、昼飯食うた？」

と、唐突にクスダが話題をふってきた。ヒロキもヤヨイもそろって首を横にふる。クスダはにかつと大きく笑った。

「よっしゃ、よっしゃ。お兄さんにまかしとき。おごっちゃろ」

いかにも親密そうにヒロキの肩をたたく。ヒロキは違和感をおぼえた。

クスダは明るくて友好的な性格だが、うそがへただ。こうやってわざとらしく接してくるときは、たいていなにか裏がある。

「クスダさん、なにかたくらんですか？」

ずばりとふみ込むと、クスダの顔が笑顔のまま、ぴきつと固まった。

その顔を、ヒロキとヤヨイがじつと見つめる。たつぷり十秒は沈黙してから、クスダの口がぎこちなく動いた。

「そんなことないで」

「そこまで棒読みにならなくても」

あまりにばればれのクスダの態度に、ヒロキはあきれを通り越してしまった。

お調子者でどこか憎めない先輩はぽりぽりと頭をかきつつ、白状する。

「いやー、実はな、二人つてか、ヤヨイちゃんに頼みがあんねんけど」

「なんですか」

「ちよいとステージに立つてもらわれへんかなーつて。ほんま、ちよつとでええんよ。五分かそこら」

なんとなく、ヒロキはクスダの言いたいことを察した。

ヤヨイもそうなのだろう。顔に洗面が浮かんでいる。それでも無下に断るのは悪いと思っただのか、一応確認した。

「なんのステージですか？」

「ミスコン」

「いやです」

「そこをなんとか！ お願い！」

にべもないヤヨイの返答に、クスダは両手を合わせて拝みにかかった。

「さっきのコもミスコンの出場者やったんよ。欠員が出てまうとイベントも盛り下がってまうし」

「そんなの、わたしじゃなくてもいいじゃないですか」

「いやいや、ヤヨイちゃんほどかわいい子はそうそう見つからんで」

クスダのへたくそなおせじに、ヤヨイはますますへそを曲げた。ぶいっと横を向いてしまふ。

しかたなく、ヒロキが仲裁に入った。

「クスダさん、ミスコンのスタツフなんですか？」

「正確にはちよつとちゃうねんけどね。学祭全体の撮影係なんよ。見る？」

クスダはてきばきとカメラをいじって、視聴モードに切り替えた。画面にメインステージが映って、聞きおぼえのある軽快な音楽が流れ出す。

さきほどまで見ていた、ダンスチームのショーの映像だった。

ヒロキはそれに目をうばわれた。なんと言うか、うまい。映像はまったくぐれなしいし、いいタイミングでダンサーのアップになったり、観客が映ったり、たくみに切り替えられている。

ヒロキや友達が携帯で撮る動画とは根本的に質がちがう。臨場感たっぷり、ショーを見ていたときの高揚がよみがえるようだ。

ヤヨイもまた、食い入るようにそれを見ていた。

と、クスダがさつとカメラを取り上げる。

「はいはい、お楽しみはここまでよ。こんな感じでキレイに撮るから。な、このとおり！」  
「で、でも……」

「あ、この映像、ダビングしよか」

その途端、ヤヨイがうつと言葉につまった。

「ヤヨイちゃん。人助けやと思うて、なんとかしてもらわれへんかな。あのコもこのイベントを成功させるために一年がんばったんよ。年に一度のお祭りやねん。ええ形でおわってほしいやんか。な？」

一転して、クスダが人情話にうつる。ヤヨイの眉がハの字になった。



(あーあ……)

内心、ヒロキはヤヨイの負けをさとった。こう見えて、ヤヨイはけっこう単純で人がいい。こういうゆさぶられ方をされると弱いのだ。

ヤヨイはうらめしそうな目でカメラとクスダとを交互に見た。クスダはそしらぬ顔で口笛を吹いている。それがものすごくわざとらしくて、ヒロキの苦笑いをさそった。

結局、ヒロキの予想どおり、ヤヨイが折れた。

「……ちよつとだけですよ」

「ありがとう！」

ことさらに大きな声でクスダが叫ぶ。ヤヨイはまだ洩々といった表情で、口をへの字に曲げていた。

ヒロキは口元がゆるみそうになるのを必死にかくした。

4 夢を追って

メインステージ前には、午前中にも増して人だかりができています。

ミス・M大コンテスト。どこの学祭でも開かれる定番イベントだ。昼食後という足を運びやすい時間帯もあって、ステージには続々と人がつめかかっている。

ヒロキは観客席から見えないステージ横で、ヤヨイと向き合っていた。

「だいじょうぶですか、ヤヨイさん」

「やるって決めたからにはやる。舞台上に立つときは真剣に立たないとダメだから」

クスダにのせられたかっこうのヤヨイだったが、彼女なりに前向きにとらえているようだ。どうやらダンスチームのショーに感化されて、プロ意識のようなものが芽生えたらしい。

「それに、あの実行委員さんががんばってたんだから、わたしも力になりたい」

「そうですね」

盲腸で倒れてしまった実行委員の女性は、いまごろ病院だ。成功を夢見ていたこのイベントを見ることはできない。

ヒロキとヤヨイは少し言葉をかわしたただけだが、目の前で病院に運ばれるところを目にしてしまったのだ。

後々、少しでもいい話が届けばいいと思うし、そのためにできることがあるのならしてあげたい。

あいにく、ヒロキにはできることはほとんどないが、せめてヤヨイをはげますくらいはしたかった。

「がんばってくださいね」

「うん。ありがと」

ミスコンと言っても、そんなに過激なイベントではない。司会者の進行にしたがつて順番にステージに立ち、自己アピールを行う。要は特技や一発芸の披露だ。その後、観客の投票によって優勝者を決める。

東京の有名な大学ならば優勝者がテレビ出演するような機会もあるが、地方の一大学にすぎないM大でそんなことはめったにない。

ヤヨイが出場をOKしたのも、そんな小さなイベントだという安心感もあったようだ。ちなみにヤヨイには言わなかったが、ミスコンに彼女が出るとなつて、ヒロキの心がちよつと浮き立ったのも本当だった。

「じゃ、オレ、クスダさんとここにいますから」  
「うん」

ヤヨイに手をふつて、ヒロキは観客席の後方に向かった。

クスダは脚立の上にカメラを乗せて、あれこれと調整している。さすがにヒロキも、カメラのしくみや使い方などはわからない。じゃまにならないよう、横でながめていた。

ケーブルをまとめたり、ファインダーをのぞき込んでカメラの位置を動かしたり、クスダはてきぱきと動く。

バイト先でのクスダは、どちらかというとおつちよこちよいで、ときおりポカもやらかす。頼れる先輩の一人にはちがいないが、同時にちよつと危なっかしい面もある人だ。

けれど、今のクスダのよどみない手つきは、そんな一面をまったく感じさせない。息をするように手を動かす。それはプロフェッショナルの姿だった。

思わず言葉をなくして見とれていると、クスダがヒロキの視線に気づいた。

「しやべつてもええよ。音声はべつで編集するから」

映像に音が入ってしまうことを気にしているように思われたらしい。否定するのも変な感じがしたので、ヒロキはクスダに聞いてみた。

「クスダさんは、なんでカメラマンをめざそうと思ったんですか？」

特に深い意味があったわけではなく、素朴な疑問だった。

クスダは少し考えるようなしぐさをして、逆にヒロキに聞いてくる。

「なんでやと思う？」

ヒロキは思ったままに答えた。

「もうかるんですか？」

「そんなわけではないやんけ」

即答される。クスダの顔には、苦笑いが浮かんでいた。

「この業界で一人前になれる人なんて一握りよ。テレビに出てるような映像監督とかなんて、ほんまにトップに立ってる人だけやし。食えるようになるんでもきつついやるな」

まるでいいとこがないかのような答えが返ってくる。けれど、クスダがその道を歩もうとしているのも本当だ。ヒロキの疑問は深まった。

そうやって言うと、クスダはさらりと答えた。

「まあ、好きやからね。やっぱ、それが一番ちやう？」

クスダが録画ボタンを押した。ほどなく、ステージ上で華々しい音楽が鳴りひびき、司会進行役のMCが現れる。

だが、ヒロキは彼らの話を聞いていなかった。

クスダの「好きだから」という言葉のほうに、頭の中にずっと大きく反響していた。

「俺、映画撮りたいんよ」

カメラをかまえたまま、クスダがつぶやいた。

「昔っから映画好きでいろいろ見たんやけど。おもしろいのもあったし、つまらんのもあったんな。ほうすると、そのうち自分ならこう撮るのにとか考え出してん。ほしたら止まらんくなつて、今ここにおるの」

最初の出場者が壇上に上がった。ズームしたのだろうか。ファインダーをのぞくクスダの顔が前後する。

ヒロキはそれを、ただ見つめていた。

「そーいうの、見つからんつて顔してるな」

「はい」

素直にうなづく。こちらを一顧だにしないクスダがどうしてわかったのか。それは疑問に思わなかった。

クスダはあいかわらず、ヒロキを見ないまま続ける。

「なんやるな。どうやって見つけるんかは、俺もようわからんよ。けど、理屈やないと思うねん。好きなこととか興味あることって、理由なんかわからへんやる？」

クスダの口からこんなまじめで熱のある言葉を聞くのははじめてだった。けれど、すんなりと耳に入ってくる。

なんだかんだと言つても、ヒロキより十年以上長く生きている人の言葉には、たしかな重みと深みがあった。

たとえ大音量の音楽と歓声に包まれた空間であっても、ヒロキの耳にしっかりと届いてくるほどに。

「ほんで、見つけたときはそれに一直線になると思う。あとでいろいろ考えるんかもしれ

へんけど、どうしても頭から離れへんのよね。ぶっ倒れてもうたあの実行委員のコも、仕事やないけど、このイベントに夢中になったんやろうし。ほれ。あのコかて、好きでめざしてるんやろ。踊り」

そう言われて、ヒロキはじめてミスコンの舞台に目を向けた。

小柄な少女が緊張気味に立っている。飛び入りの高校生だと紹介されて、観客席がわき立った。

「今日はまた、どうして参加してくれたの？」

「友達と、遊びに来て。こういうステージがあるって聞いたものですから」

「じゃんけんして、どっちかが出ることにしたとか」

「そんなとこです」

ちよつと声が小さいが、ヤヨイは一生懸命に受け答えをしていた。クスダに頼まれたとは言わない。印象も悪いし、クスダに迷惑がかかるかもしれないと考えたのだろう。

こわばった肩や口元は、ヤヨイの緊張を表している。誰かと話すこともあまり得意ではない性格だ。視線もときおり泳ぐ。

けれど、将来の夢を聞かれたとき、その目がすつと澄んだ。

「さつき、このステージでもショーを見たんですけど。わたし、ダンサー志望です」

その言葉は、はつきりとしたひびきを持っていた。まっすぐな視線がヒロキを射抜く。今日は、ヤヨイの知らない一面をいろいろと見た。

けれど、このときの毅然とした姿が、ヒロキには一番印象的で鮮烈に記憶に刻まれた。

「一曲あるけど、踊る？ せっかくだし」

「あ、じゃ、じゃあ、お願いします」

司会者の言葉に、ヤヨイはまたぎこちなくうなずく。アップテンポのダンスミュージックに乗って、ヤヨイの細い身体がくるりと舞った。

観客席から口笛や歓声が浴びせられる。プロに比べれば、ヤヨイのステップはつたなく、表情も動きもぎこちないだろう。

けれど、観客たちは彼女を応援していた。

クスダは踊るヤヨイを、真剣な顔で撮影している。レンズ越しのヤヨイの姿はどんなふうに見えるのだろう。ヒロキには少し気になる。

ヤヨイやクスダのように、胸をはれるなにかが自分にあるだろうか。それをいつか、見つけられるのだろうか。

音楽が止まる。上気した顔に、ヤヨイははにかんだ笑顔を浮かべた。総立ちになった観客から好意的な拍手が送られ、ヤヨイは小さく手をふる。

ヒロキは複雑な思いを抱きながらそれを見つめていた。

ヤヨイが少し遠いところにいるような気がしたのは、ヒロキがその距離を感じられるようになったからだだった。

**NONSTOP**



N市という小さな田舎町を舞台に、毎回一つのキーワードを裏テーマとし繰り広げられる8つの物語。進路に悩む中学生、ゲーム制作に奮闘する高校生、寂れた地元の町起こしに奮起する幼なじみ、外からやってきた都会者。

全くタイプの違う主人公達は、友情や進路、恋といった十代がぶつかる悩みを抱えながら成長していく。

主人公同士が関わり合うことはないけれど、同じ舞台を様々な視点から読むことができるのがポイント。シェアワールドという難しい舞台設定を作者なりにアレンジしどう活かしてくるのか、どの作品も毎回先の展開に期待させてくれる。

『クローバー』入江棗

中学三年生の千伽、楓、孝士の三人が、高速道路開通問題に揺れる地元を舞台に心を通わし関係を育んでいく物語。

隣りの席になったことをきっかけに楓にパシリ同然の扱いを受けるが、実家の書店経営のためにも地主の息子である楓には逆らえない千伽とそれを心配する幼なじみの孝士。稚拙で歪な関係から始まる三人の間柄は書店の万引き事件を通して急速に親しくなる。初夏から始まる物語は、友情・進路などのテーマをメインに変化する恋心を繊細に描いていく。

いがみ合っていた楓と孝士が普通の友人に変化して行く姿も読んでいて楽しいが、進路と二人の少年を重ねて揺れ動く千伽が最後にどのような選択を撰ぶのが気になる。

『Dear My Life』 貴水玲

内気で自分の意見も言えず下ばかりを向いてきた花は優華女学院では変わるのだと決意していた。しかし一方的な御家問題に巻き込まれ、従姉妹だという自分にそっくりな少女、ありさの執拗な嫌がらせから孤立した花は中学までの自分に逆戻り。そんな花を救ったのは、花には無縁の世界に生きる十河星流だった。星流の励ましに突き動かされた花は周囲からの無視、盗難事件の疑いを乗り越え、逃げ腰な自分を受け入れる。

王子様役の星流が常に花の手を引くのではなく、花が自分で考え行動して行く姿を描いているのが逆に印象的。ひた向きに変わろうとする姿は読んでいて応援したくなる。

『やろうぜ!』 土本強

やってみるか?—そう、自称平凡な高校一年生の田尻すなおに言ったのは、小学五年生で始めてプログラムを組んだと語る同級生の中村ひかる。

ゲーム好きという共通点を知った二人は『ゲーム制作同好会』を立ち上げる。教則本を片手に始まった二人のゲーム制作を支えるのは、コミックマーケットへの出展を提案するちよつとくせ者の副担任横井ひろこ。コミケでの惨敗、方向性のズレ、同好会廃会。いくつもの困難を重ねより深まる友情と進化するゲームは必見!

あくまで普通の少年たちが試行錯誤する姿を描いているのが印象的で読み入ってしまった。ギャグも控えめだが、それでいて読む人が読めばわかる小ネタにニヤリとしてしまう。

## 『From・N』 番棚葵

思い立ったらまっしぐら（だけどアイデアは隆也まかせ）の来夢と常に冷静（だけど来夢の涙に弱い）な隆也のちぐはぐコンビが送る町起こしストーリー。

住みずらい田舎から早く脱出するため都会への進学を目指す隆也は「一緒にN市の名物を作ろう」という幼なじみの唐突な提案から名物探しに巻き込まれる。ラーメン、恋愛成就の神社、心霊スポット……。来夢の持つてくるネタを素に、渋々ながらも隆也がアイデアを出してN市活性のため二人は奔走する。

正反対なタイプだからか意外とバランスの取れた二人のやり取りが読んでいて楽しい。また、今回のネタからどう町起こしに繋げるのかと気づけば一緒に考えてしまう。

## 『響け、私たちの歌声』 広野未沙

事故で本命校を受験できなかった有香は、本意でない高校進学をする。自ら学校やクラスに馴染む気に慣れない有香へ声をかけたのはクラスメイトの友枝ひかりだった。彼女の懇願に負けて参加した合唱部の体験入学で、有香は三年生の先輩土田菜々子と出会う。受け入れられない現実と、受け止めなければいけない現状の中で有香が求めたのは合唱部<sup>部</sup>。

合唱部を通してどうコンプレックスを解消し、現状を受け入れていくのか展開が気になる。また葛藤し少しずつステップアップしていく有香や、それを見守る同じ部やライバル校の先輩たちの姿は心地よい読後感を残してくれる。

『平行線シンδροーム』水島朱音

「一年以内に僕を見つけたら、気持を伝える」という謎めいた言葉を残して、卒業式で最後に姿を消した塚本日向。ケータイは連絡がとれず、進学先も実家もわからない。ようやく見つけた親戚には日向の行方を黙秘され、葉月は日向への手がかりを完全に失ってしまふ。そして、やがて葉月の中に浮かびあがる疑問、「恋と未練の境」とは何なのか。一途な恋心を巡り交差する十代の瑞々しい感情を丁寧な言葉に乗せて描かれる。

誰もが知っている感情を、些細な仕草やセリフで表現しているのが上手いと感じる。葉月の一途さが健気で早く再会させてあげたい。ちゃんと日向と再会できるのか気になる。

『ターニング・ポイント』諸星崇

市立の高校へ通うごく普通の少年ヒロキは、入学後すぐに始めたアルバイト先でダンサーを目指す私立優華女学院の三年生ヤヨイと出会う。休憩時間に会話を重ね、時にはヤヨイの相談にのり、微妙な距離を保ちつつ引かれ合って行く二人の関係がもどかしくも可愛らしい。また、そんな二人を温かく見守るのは、最近N市で話題になっているシヨッピングモールの裏方役、メカニックのメンバー。

友情・将来・性といった十代が持つ不器用な感情を、タイプの違う大人たちを通して描いているのが上手い。コミカルな会話や、子供をからかう大人達の図が可愛くて楽しい。

柚木ゆな

2011年09月5日 発行

- 著 者 入江棗／貴水玲／土本強／番棚葵／広野美沙／水島朱音／水面浮月／  
諸星崇
- 企画・監修 榎本秋
- 発行所 株式会社榎本事務所  
〒179-0076  
東京都練馬区土支田 1-29-12 ファミール光が丘 102  
電話 03-6750-6341
- 表 紙 Snow (AMG 出版工房)
- イラスト 新月竜、まつきなほ、伊藤由希、戌 祐秋、U35、うらら、正午あきら、  
橘ぼん  
(すべて AMG 出版工房)
- 協力 協功一、三浦奈緒  
(アミューズメントメディア総合学院大阪校キャラクターデザイン学科)

本マガジンの配布、複製は不許可とする。